

506

204

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19</sup>m 1 2 3 4 5

始



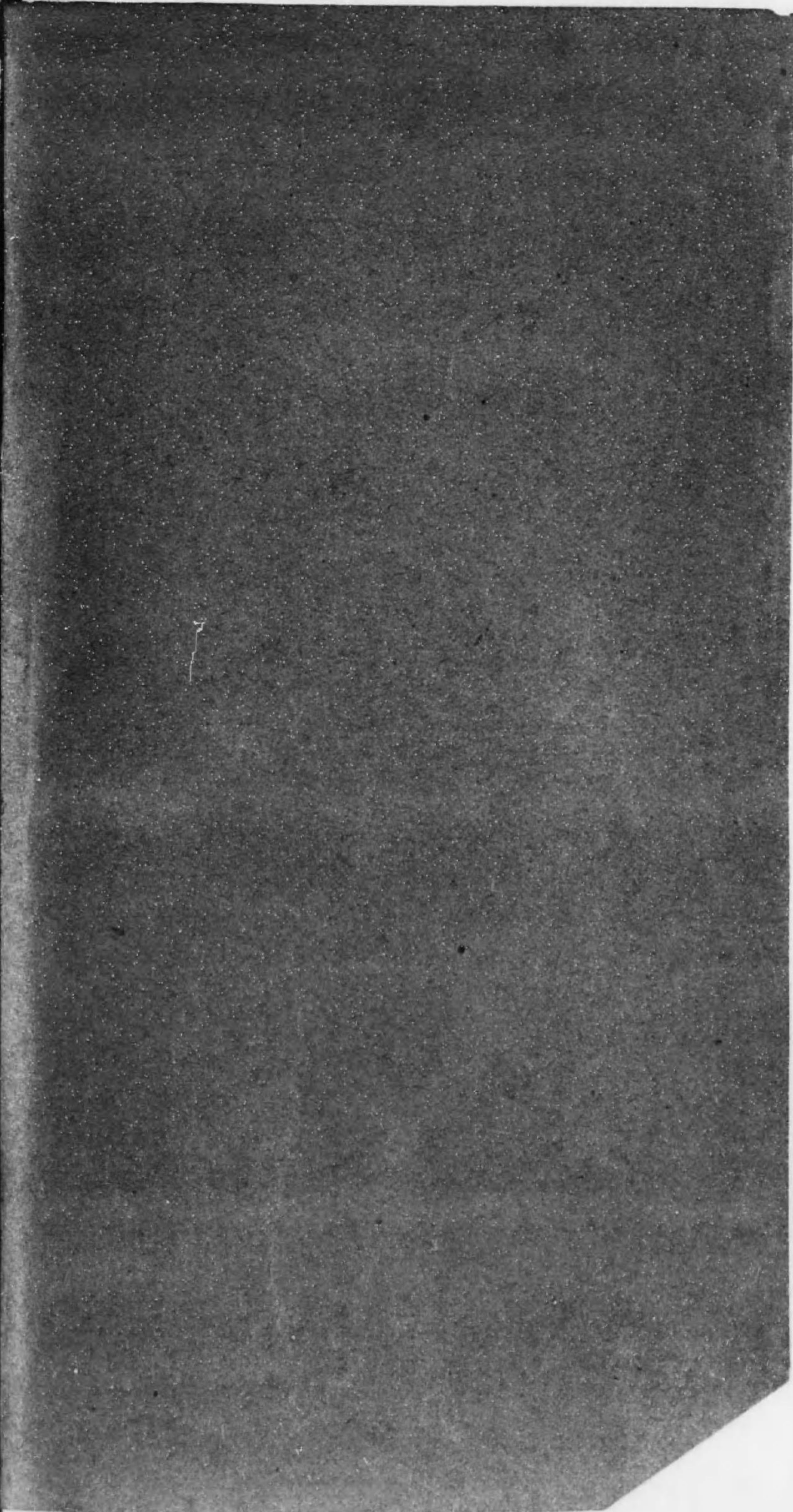


脚 色  
第兄フゾーマラカ

306  
204

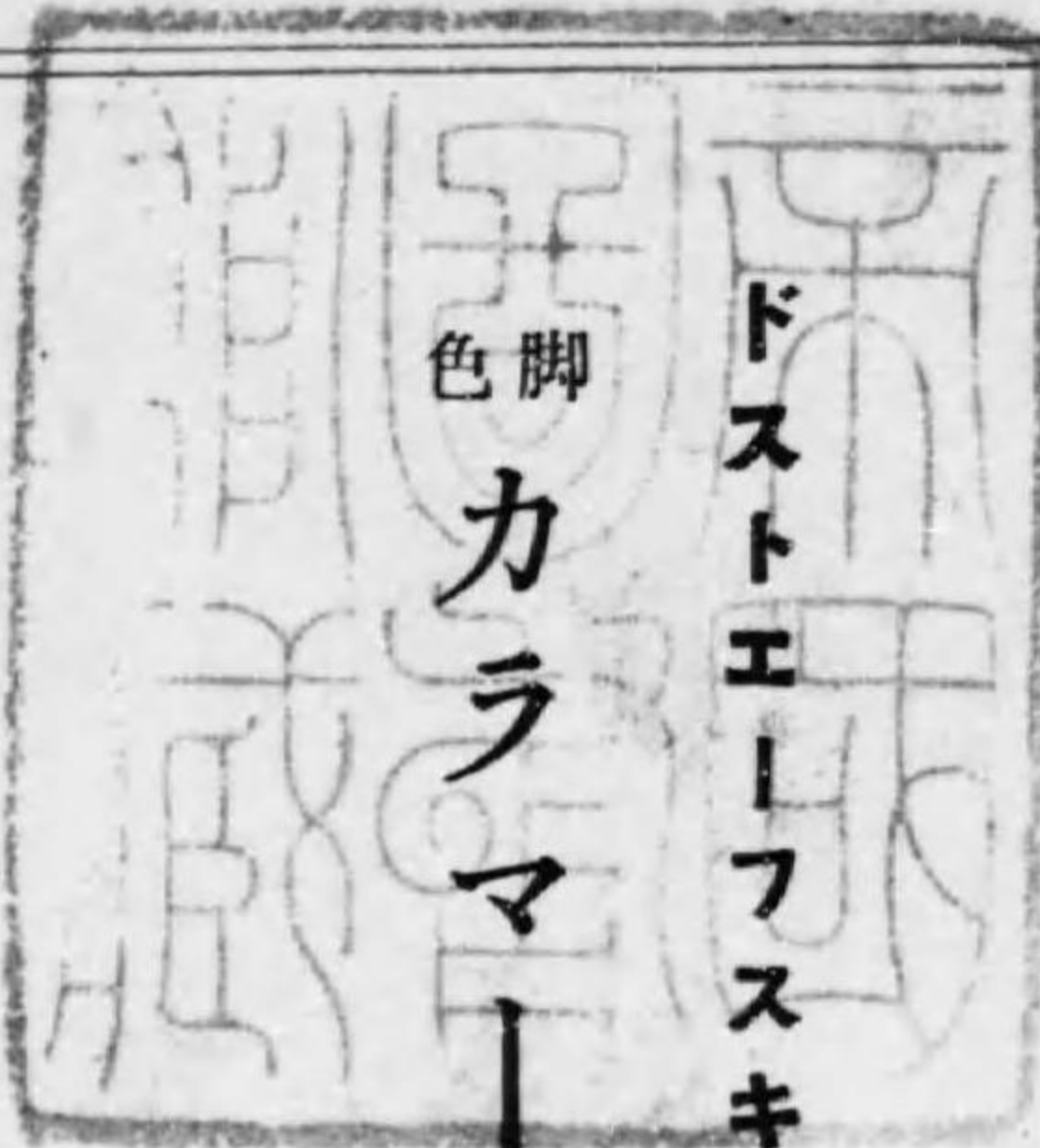
1922

版社潮新





506-204



ドストエーフスキイ原作

脚色

カラマーゾフ兄弟

(五幕)

ジャック・コホー脚

伊藤松雄編

大正 11. 9. 18  
内交

新潮社出版



## 譯者の序

□ ジャック・コポーは純藝術的な小劇場運動者で、巴里のギユウ・コロンビエ座の経営者であり、同時に舞臺監督として世界的に有数な人であるのみか、俳優としては、巴里の三名優としてザミエ、ルネボーの二人と共にその名を唄はれ、また脚色者としてもこの『カラマーゾフ兄弟』以外に幾多の名篇を書いている。

□ 劇場経営者として、舞臺監督として、俳優として、脚色者としてのジャック・コポーが心願は、眞實に演劇藝術を愛すること、演劇藝術を在來の徒らなる商業主義にのみ立脚してゐた興行師の手から純藝術家の手に取戻すことであつた。而して現に、彼はいまギユウ・コロンビエ座によつて、理想通りの規律と、利益無視と團體的精神と方法の節約と調和のための結合を完全に遂行してゐる。其處には斷じて在來のお芝居的な空氣も無ければ風習も残されてはゐない。斯くしてギユウ・コロンビエ座の成立は、演劇藝術家の天才にして劇場を有せず、且つ商業主義の劇場と接觸することを拒んだ場合、また眞の演劇藝術を熱愛する公衆が商業主義の劇場に行く事を厭ひ且つ自分達の劇場を有してはゐなかつたと云ふ場合、この二つの缺陷を充したに違ひ



ない。

二

□ギユウ・コロンビエ座の創立は一九一三年であつて、一九一七年の十月から一九一九年五月までは紐育に行つて、その變ることなき理想主義の下に彼独自の演劇運動を起してゐたが、戦後、即ち一九一九年九月巴里に歸來するや、再び現在のギユウ・コロンビエ座を礎くに至つたのである。

□『カラマーゾフ兄弟』の脚色は嘗てマスクワに於て二晩に分けて上演せられたものもある。併し私はジャック・コポーの脚色に心から敬服してゐる一人である。フランス劇壇にとつてこの脚色の上演が誇るべき効果を擧げたと云ふことは十分想像出来ると思ふ。無論、戯曲として書かれたものと、小説として書かれたものの脚色との意義に就ては論ぜらるべき數々の點がある。併し乍ら假令それが再現的のものであらうとも、即ち小説として描かれた世界を戯曲として再創造したものであらうとも、この名脚色によつて、尙且十分なる、また周到なる準備と討究とに俟つて舞臺藝術化することが出来れば、必ずそこには特殊な効果と感銘とを有する新境地を開拓することが出来ると思ふ。演劇藝術の天才はこの小説たるロシアの名篇をさへもその努力によつては如何様にも舞臺の言葉たらしめ、而してそれをそれ自身の持つ文學的理解と力強

さとして、飽くまでも舞臺上のものとして幻覺的な戯曲たらしめ、且つ同時に一のスペクタクルとして恍惚たらしめる戯曲とすることが出来るだらう。

□ジャック・コポーが特殊の領域は前記の如く「純眞なる劇場」の王國の中に横はりギユウ・コロンビエ座の理想を目標として先驅してゐる。即ちこの目標こそ廣義に於ける新劇場の完成と新戯曲の喚起とに在ること論を俟たぬ。彼が常に口にし且つ實行に移してゐる劇藝術の單純化、舞臺藝術の表現方法、さうしたものを酌むにも、この脚色『カラマーゾフ兄弟』の一篇は可成に力あると思ふ。

□この一本によつて脚色と云ふことに對する偏見を先づ捨てて欲しい。而して尙この脚色の演出によつてさうした理解を深めてほしい。

□この譯編は日本に於ける上演用として相當に骨折つた積りである。尙この脚色を編するに當つて新進の佛語學者若目田三郎氏の助力を感謝すると共に、多年歐米に在つて演劇研究に携はつてゐた家兄伊藤時雄氏の助言に俟てるもの少くなかつたことを併記する。

(大正十一年七月二十九日)



	第	第	第	第	第
	五	四	三	二	一
	幕	幕	幕	幕	幕
	.....	.....	.....	.....	.....
	一六	一五	一四	一三	一二

装	跋
畫	文
.....	.....
中	柴
川	田
紀	勝
元	衛



舞臺協會上演臺帳

ドストエーフスキイ原作

脚色 カラマーゾフ兄弟 (五幕)

ジャック・コボー脚色

伊藤 松雄 譯編



## 第一幕

マスクラの近郊に在る僧院の庵室。場面はスタレツツ・ソシマの室房に續く應接室。中央一杯に廻廊。百花咲亂れた僧院の庭を見せる。庭には木造の階段から下りられる。左手は御堂に到る入口、右手の扉から長老ソシマの室房に續く。八月も漸く終らうとする頃の一日。晴朝ではあるが大氣は蒸してゐる、美しい朝である。

### 第一齣

ソシマ長老。アリョーシヤ。

(幕開く。舞臺空虛。庭に長老ソシマが現はれる。小柄で瘦癯の如く腰が稍曲つてゐる。アリョーシヤの肩に倚りかかり、難澁げに緩やかに歩く。兩人階段を上る。最後の段まで上りついてソシマ足を停め、太息を吐き、遙けく衆人の聖歌を聴く)

アリョーシヤ (聖歌に耳を傾け乍ら) 惱みしさの餘りに貴方様をお慕ひ申して來た人達が、いまでは



みんなあのやうにその惱みも癒され、心も満されて居ります。

ソシマ たつた一人の人間、それも罪人たる俺に、かうまで多勢の同胞達の心に愉悅を戻すことが許されてゐますなら、神様御自身にはいかなことでもお願い出来るでせう。

アリョーシャ 長老様、まったく貴方様はどうしてああした不思議な業がお出来なのでせう。

ソシマ みんな神様のなさる事ぢや。(室房の方に歩みよつたが再び立止る)アリョーシャ、重くはありませんか？ 知つての通り、日増しに俺の力は衰へてゆきますのぢや。やがて間もなく死ぬことであらう。(アリョーシャ黙して額を長老の胸にあてる) よいわ……泣くのではない。死は俺共に愉悅を與へますぢや。

アリョーシャ 私をこの世界にたつた一人残していらつしやるので御座いますか。

ソシマ お前のための生命はこれから始まるのぢや。時なのだよ……。

アリョーシャ 今日はいつともよりお快いやうに見えます。お顔は微笑んでおいでですよ。

ソシマ (再び歩み始める) 俺に布施をしようために子供を抱いて六里の道を徒歩でやつて來なすつたあの御婦人が俺には嬉しいのだよ。アリョーシャ、人間は幸福になるやうに造られたものぢや、

子供のやうに、空の鳥のやうに、いつでも元氣であることだよ。絶えず人を愛する。一切の人間を愛する。それだけで十分なのぢや……。

(兩人室房の入口に到る。アリョーシャは伏せたる眼を擧げる)

アリョーシャ 貴方様のお後に従つてゐれば、私には何の苦みもないのです。貴方様を失つては苦痛と暗黒とがあるばかりなのです。

ソシマ (微笑み乍ら) よい、よい。俺が死んだらその暗黒の中へお前は行くのだよ……。

(アリョーシャ跪く。ソシマの手に接吻する。ソシマは祝福を與へて室房に入る)

## 第二齣

アリョーシャ。(後から)ドミートリイ。

(アリョーシャ獨り残つて暫時室房の入口に佇んでゐたが徐ろに足を階段に運び幾段か下りかけドミートリイを認めて俄かにもとへ上る)

ドミートリイ アリョーシャ！ 吃驚したかい？



アリオージャ (再び一段下りて手を差伸べ乍ら) ドミートリイ兄さん!

ドミートリイ (アリオージャの肩を抱き乍ら) 弟!

(順禮の歌新に、更に遠ざかりて聞える)

アリオージャ (昂奮して、この昂奮、話につれて増してゆく) お聴きなさい……順禮達が歸つてゆくんです。ロシア全国から集つて来た人達ですよ。今朝奇蹟が二つまで行はれました! 初めのは悪靈につかれた女の頭の上にゾシマ長老様が金のおけさをお載せになるとその女は見る見るうちに落着いてしまひましたよ。兄さん、長老様はこの地上で誰よりも尊いお方ですね、僕はその方のお家にゐるのです、その方の榮光に觸れてゐるんですよ。

ドミートリイ 人間の中には謙遜な人も少くはないさ。だがこの世界で謙遜にしてゐては人間も苦しいやね、俺の考へるのはただそれだけさ。

アリオージャ 僕は人を愛します。

ドミートリイ けれどお前は人間を避けてゐるんだ。

アリオージャ 僕は人を信じてはゐます、ただ汚れや誘惑が怖いんです。

ドミートリイ うむ、お前の家の汚れがねえ。

アリオージャ 眞面目に聴いて下さいよ。ね兄さん、僕は我と恐ろしい氣がするんです。

ドミートリイ (冷やかに) それで、お前は自分だけの安心ばかりを考へてゐるんだね。小さい坊さん!

アリオージャ 『總てをわかつて、全きを望まば我に従へ』と申されてゐます。僕は不滅のもののために生きたいんです。

ドミートリイ 確にさうだ! カラマゾフ一家の贖ひにや兎にかく聖者が必要だらうよ。

アリオージャ (眼を伏せて) 僕も兄さんと同じカラマゾフの一人です。

ドミートリイ だがお前は二十にもなつてまだ童貞でゐるからなあ! (アリオージャ面をそむく) 弟! 俺の可愛い鳩! 横をむくことはないぜ。さあ、この腕でお前をちつと抱かしてくれ、まづたくこの世界中で俺が愛してゐるのはお前だけなんだからなあ。(アリオージャを抱く、頭を擧げてアリオージャを眺める) お前がまづたく純粹だからよ。さうしてお前の云ふことは何時でも正しいのだ……お前は神の作つた人間だ、家中の者が愛してゐるお前、お前にや家中の者がお前なしにはゐられ



ないつてことが分らないのかい？

アリョーシャ イヴン兄さんには誰かゐないぢや居られぬつてことはありませんね。求めてゐるのは別の何かですもの……僕の智恵の足りないことや若さを見てイヴン兄さんは微笑んでゐます。さうして兄さん、貴方のことを僕は「兄さんは救はれた」と自分で云つたんです。兄さんが、カチェリ  
ー・ナイブーノヴナさんと許婚の約束をなさつたと聞いた時にですよ……。

ドミートリイ うむ、俺も軍隊を出て、親父の老境を何かとそばにゐて世話する氣から許婚をつれて歸らうとしたんだ……だが歸つて見るとあの穢はしい放逸と馬鹿げた茶番なんだ。

アリョーシャ 兄さん！……お父さんですよ……。

ドミートリイ さうさ、情も慎しみもない親父さ、俺のお母を死なせる、それからお前のお母だ。それも散々悲しませたり、嘆かせたりした揚句の果だ。イソプめ！ ビエオだ。女の尻ばかり追ひくさる。

アリョーシャ 悲しいことですが許さなければいけないんです。

ドミートリイ あんな奴が許せるかい、イヴンでさへ云つてゐたぜ、「許される代物ではないつて」

ね。

アリョーシャ イヴン兄さんの云ふことを聞いても仕方がないでせう。

ドミートリイ どうして？

アリョーシャ イヴン兄さんは謎ですもの。

ドミートリイ 謎、成程なあ……。

アリョーシャ いつも何だか難かしい考へばかり持つてゐるんです。何の考なんですか……。

ドミートリイ 元來ならイヴンが俺と親父との間に立つて好いのだ。それが近頃では親父を憎むやうに俺にたきつけるんだからなあ。それでまた親父とイヴンとがうまく行つてるんだから——。

アリョーシャ をかしいですね。

ドミートリイ 何もかもが掴みやうもない、おつそろしい、得體の知れないこつた。ね、お前は俺に分らしてくれるだらう、俺は何もかも告白するよ。御覽、俺の顔を見て恐くはないかい？

アリョーシャ 恐怖が……それから悦びが見えます。

ドミートリイ 懺悔はシルレルの悦びの頌歌で切り出したんだ。けれどこれ以上俺が落ちこんだ



ことはないのだがなあ、でもいくら俺が呪はれてゐようが、また馬鹿だらうが、主よ貴方の子であることには變りありません！ 貴方を愛する、さうして悦びは私に在る。

アリオーシャ　み天なる永久の者にみ榮あれ。

ドミートリイ　私の中なる永久の者にみ榮あれ。さあお坐り……此處へ、俺によく見えるように！ 何も云つてはいけない、俺が話すのだ。けれど極く低くだよ。極く低い聲でなければいけないよ……。誰にもきこえないように。ねアリオーシャ、今日と云ふ今朝、そして近頃、どんなにお前に逢ひたかつたらう。俺にはお前が必要なんだ。けだかい人の心に許して貰ひたいのだ……お前だけに何もかも云ふ、また笑はずに聞いてくれるのはお前だけなんだもの。ね、明日から俺はまったく新しい生活を始めるのだよ。

アリオーシャ　ええ兄さん、カチェリーナ・イヴーノヴナと……。

ドミートリイ　人間が谷底へ陥ちたやうな思ひがする、この夢を知つてゐるかい？　それが、今と云ふこの瞬間夢もなく俺ばかり陥ちこんでゆくのだ。恐しくもない……うむさうだ、恐しい。だが恐しさは俺には手ぬるいんだ。……いや手ぬるいと云ふよりは酔つてゐるんだなあ、これが美

なのか、理想なのか？　謎だ！　これを俺は随分と考へぬいた。カラマーゾフ家の人間には屈辱の中にも美があるのだ。神、神と云ふ概念だけでも俺は苦しくなる……やがてそれが何だと思ふ！　美しい太陽を見る、澄んだ空、緑の樹々を見る、時は眞夏だ、四邊はしんと静まり返つてゐる……一體何を云はうとしたのだつたかなあ？　何だか解らなくなつた。

アリオーシャ　兄さんの許婚……。

ドミートリイ　（憂悶をこめてやさしく）おおさうだ、カチェリーナ……ねお前、あの女、俺を苦しませるのだよ、俺はもうすつかり切れてしまはうかと思ふんだ。

アリオーシャ　カチェリーナ・イヴーノヴナさんを棄てようと仰しやるんですか？

ドミートリイ　嘆くことはないさ。あいつも自分の好きなことをしてゐることさ。誰かあいつを女房にするだらうよ。俺よりは上等の人間がなあ。

アリオーシャ　他の人が？

ドミートリイ　イヴンだよ、大抵は。

アリオーシャ　そんなことが。



ドミートリイ　なあにイヴンがあいつを思つてゐるのは確かだ……いいさ、おかげで俺が救はれると云ふもんだ。

アリョーシャ　え、兄さんが……。

ドミートリイ　うむ、お前は何も知らないんだ。だから俺をさげすむ氣も起きるんだ。お前は俺があの女と何の苦痛もなしに別れられると思ふのかい？……俺だつて自分をよくしようと望んでゐたさ、今まででもしよつちうこの尊い境地を渴し求めて苦しんで來たんだ。ね、お前同様、俺にだつても美を渴き求める感情があるんだよ。ああこれだけせめて解つてくれるとなあ……。

アリョーシャ　兄さん、僕は兄さんが話して下さることがみんな眞實だと云ふことは分つてゐるんですよ。

ドミートリイ　さうかい、ぢやお前はありのままをそつくり聞いてくれるね？　それなら俺もさつくばらんに云つちまはう……お前も知つての通り俺は工兵大隊の少尉だつた。衛戍地の小さい町ぢや俺も随分受けがよかつたさ。何處へ行つても金をバラ撒いたからなあ。俺は素的な金持だと思はれたんだよ。また俺自身もさう信じてゐたさ……俺が大隊に入つた頃だつた。大佐の二番目

の娘が戻つて來ると云ふ評判が町中にたつてゐた。何でも都の華族女學校か何かで勉強してゐたのが卒業して歸つてくると云ふんだな……うむ、カチエリーナ・イヴーノヴナさ。まったく美人の評判が高かつたよ……ある晩、司令官の邸で、俺が側へ寄つていつたら、カチエリーナは俺をじろりと見た。ああ……俺にはその時の、あいつのいかにもさげすんだやうないやな顔がどうにも我慢出來なかつたんだ！

アリョーシャ　その時から思つておいでだつたんですね？

ドミートリイ　自分より上のものに見えたと云はうよ！　カチエリーナがもう小娘ではなくて、性格も、自尊心も、それにしつかりした淑徳も、また何よりも教養があり睿智の備はつた婦人だと云ふことが分つたんだ……それだけに俺がどんな人間かわからないのに、痛い目を見せてやりたかつたのさ。

アリョーシャ　ぢや兄さんはあの方を嫌つてゐたんでせうか？

ドミートリイ　その至純な、矜持の高い女にどう手を觸れていいか、どう動かしたのか、施す術もわからなかつたんだなあ。俺は自分のあれに加へようとしてゐる邪惡を俄かに豫感したよ。け



れどそれをどうにもやめられなかつたのだ。丁度その時分さ、親父から六千ルーブリの金をわけ  
て貰つたのは。そしてそれから殆ど間もないこと、カチエリーナ・イブーノヴナの父親、俺の隊の  
大佐に、隊の金を使込んだ嫌疑があると云ふ話を、友達の奴がうかつに喋るのをききこんじまつ  
た……俺はカチエリーナ・イブーノヴナの姉に逢つて、話の中にまあかう云つたんだ。「ひよつとお  
父様が金を拂ふことになつて、その金が算段出来ない場合、軍法會議に廻されて、役を褫奪され  
でもするやうな仕義になつたら、妹さんを私のところへお寄越しなさい、金はありますから御入  
用だけさしあげませう、誰にも祕密にですよ……」つてね。いいかい、使ひこんだ金と云ふのは四  
千五百ルーブリと云ふ噂だつたんだ。所が、かう云ふと姉娘は俺を散々に罵つたよ。だが家へ歸  
つてから俺の申出をカチエリーナに話したと見えるんだ。俺にしたつて、もうそれだけで満足だつ  
たよ……と、そこへ俺の隊へはほかの司令官が来ることになつた。俺は待つてゐたさ……（沈黙）  
二日ばかりたつたある晩のこと、俺は外出をしようと思つてゐると、急に扉が開いた、そして俺  
の目前、俺の部屋にカチエリーナ・イブーノヴナが姿を現はしたんだ……誰の眼にも入りはしない、  
お互ひだけの祕密ですむことだつたさ……カチエリーナは室内に入つて来た。その眼はかたい油

心で光つてゐる、横柄な所まであつたさ、だが唇はぶる／＼震へてゐたがね……「妾がとりにま  
あつたら四千五百ルーブリ下さるやうに姉から聞きました……参りましたから下さい。」ただこ  
れだけさ。これ以上何も云はない、聲は急に失せてしまつた……おい、お前きいてゐるのかい？  
眠つてゐるやうだね……。

アリョーシャ 聞いてゐますよ。

ドミートリイ 何よりも先づ湧き上つた考は、カラマーゾフ家の一人としての考だつたさ……俺は  
カチエリーナをぢいつと見つめた……美しい女だつたが、その瞬間には美を超越したものが何か見  
えてゐた……父親のために生贄いけにへになり来た……それも俺の生贄にだ！ 身體も魂も俺の自由よこしま  
なるんだ。分るかい？ カチエリーナは俺をさげすんでゐる。俺は殆ど我を忘れかけてゐた。邪な  
心が俺の身體の中にえくりかへる。自分がこの女にふさはしくないと思へば思ふほど、現在自  
分の力で出来うる最も卑しい所業をさへ成遂げてやれと思つて来た。で暫くの間俺は恐しい憎惡  
をこめて女を眺めてゐたんだ。

アリョーシャ もう澤山です、もう澤山です。



ドミートリイ 俺は窓側に行つてこの頬を冷えた硝子ガラスにびつたりとつけた。その冷いことまでが俺を焼きただらせるやうに思へたんだ……それから俺はもとに戻つて、抽斗から五千ルーブリを出して無言でカチェリーナに見せ、たんで渡してやつた……そして自分の手で扉を開けて丁寧に頭を下げた……とカチェリーナはをのいて、俺をぢいつと見てゐたが段々蒼白くなつていつた……そして急に一言も云はずに、だが和いだ衝動で、俺の足下、床板に頬をびつたりとくつつけた。

アリョーシャ (強い感動を抑ゆる能はず) 兄さん、兄さん。

ドミートリイ それから急にはねおきて、とぶやうに姿を消した……そして俺はカチェリーナが行つてしまふとサーベルの鞘をはらつて自殺しようとしたんだ……何のためだか自分でも譯らない、感動のあまりなのか？ お前には分るだらう、人間はあまり感動すると自殺する氣になるものかなあ？

アリョーシャ 兄さん、あなたはその時、カチェリーナさんよりずっと高い處に上つてゐたのです。カチェリーナさんを負かしてゐたんですよ。

ドミートリイ うむ、さうだ。その通りだ。その時、たつたその一瞬間だけ下らない一兵隊の俺が

あの令嬢を征服してゐたんだ。そしてわかるだらう、それだからと云つてカチェリーナが俺に許すことはないのだ。氣位が高い女だつたからなあ。父親が死んだ後になつてからその金を返して来た。併しむろんそれだけぢやすまなかつたさ、感謝の心で自分の生命を俺の生贄に捧げる決心をしてやつて来たんだ。感謝と云ふのは征服したい欲求のことさ、あの女が渴き求めてゐる無限の渴望だ、アリョーシャ、あの女は實に俺によく似てゐる、どんなことをしてもひきとめられるもんじゃない。

アリョーシャ その日あの人に戻つて来た時、兄さんはあの人を愛してゐたんでせう？

ドミートリイ 自分の立派な行爲の方が愛されたよ、それにあの女は恐ろしく遠慮ぶかつたからなあ。

アリョーシャ でも許婚いひなづけの約束をなさつたんですね。

ドミートリイ 三ヶ月たつて後、聖像の前で……ああ俺の生涯でもあの日は忘れることは出来ない、アリョーシャ、あの女が俺を愛してゐると云つた日、愛してゐると書き送つて来た日……手紙は今でも持つてゐる、身體から放したことは一遍だつてありやしない、墓へ入る時も一緒に埋めて貰



ひたいと思つてゐる。讀んで御覽、俺の汚れた唇にはこの文句をくりかへす資格はないからなあ、あの女はこの俺に逆もいやしがたい痛手を負はせたんだ。(うなだれて泣く)

アリョーシャ

(やさしく) 兄さんお氣の毒です、だけど決して氣をおとすことはありませんよ。

ドミートリイ

何故俺はあの時サーベルを鞘にをさめたんだらう、どうせまたこんなにまで陥ちるんだつたならあの晩死んだ方がいくらまじだつたか知れやしない……二人が約束を結んだ時俺はカチェリーナにすつかり話してしまはうと思つて手紙を書いたんだ……あのこともこのこともありつたけさ。所がわかつてくれようもしないんだ……そこで俺はイヴンに行つて貰つた、あの男なら俺が云ふよりも、二人が一緒になるなどと云ふことが間違つてゐると、あの女を納得させることも出来ようと思つたんだ。

アリョーシャ

けれどイヴン兄さんは……

ドミートリイ

うむ、イヴンはあの女に夢中になつてしまつたんだ。カチェリーナもイヴンを愛するやうになつたんだ、さう云はなくとも俺には分つてゐる。イヴンの人好きのいいのに惚れたんだ。あの二人が思ひあはなくてどうするものか？ 女はあんなに純粹だし男は頭があるし、必然さう

なりゆくべきだつたんさ。

アリョーシャ

では兄さんはどうなさるんです？

ドミートリイ

(怒つて) 俺か、俺はまた泥の中に陥りこんでゆくのだ。

(無言)

アリョーシャ

ほんとに兄さんはお氣の毒です。

ドミートリイ

お黙り、俺のことを歎いたつて仕様がななさ。

アリョーシャ

(きつとなつて) 兄さん、あなたはカチェリーナさんを思つてゐらつしやるんです。御自分を犠牲にしてあの方を棄てる、そして贖ひの出来ぬこともないある過ちを御自分で罰しようとなさる、さうに違ひありません、いいえ、私に嘘は仰しやらないで下さい、あなたにはまだ私に話して下さらないことがあるんです。

ドミートリイ

あの女から離れよう、それだけのことだよ。

アリョーシャ

もしさうなら貴方はいつでも泣くやうな思ひに苦しまなくちや……

ドミートリイ

馬鹿！ 俺だつて強いんだ。決心はしてゐるさ。



アリョーシャ (苦しげに) 兄さん!

ドミートリイ 心配するな、弟、自殺なんざあしないよ、もうそんな力さへ俺にはないんだ。これ  
がもつと後だつたらともかくだ……だが——なんだよ、あれがすむまでは……いやこれだけだ!  
もう何も云ふまい、行くぜ、何時だらう?

アリョーシャ 十一時でせう。

ドミートリイ 左様なら、俺のために祈ることはいらぬよ、無駄なことだ。(去らんとして幾分か歩  
み、立ちどまり、後に戻つて両手で弟の手をとり、無言で顔を見る) まだ俺を愛してゐてくれるかい?  
え? 俺は兇暴な情慾を持つてゐる、亂暴で、淫蕩で、放逸と殘虐が好きだ。だがいままでにし  
て来た、またこれからするかもしれないどんな所業を持つて来ても、今俺のこの胸にある汚れと  
は比べものにもならないだらう。おい弟! ドミートリイ・カラマーゾフが盗人だ、卑劣な小盗人  
だと思へるかい?……一昨日のことだ、カチェリーナ・イヴーノヴナが何のためだか奇妙にマスク  
ワにゐる妹のアガフィアに三千ルーブリ届けてくれと云つてその金を俺に渡したんだ……俺は丁  
度一コベックも持つてゐなかつた時で、あの女はそれを知つてゐるんだ。知つてゐながらこの呪は

れた金を俺にあづけたんだ。金を手渡しし乍ら笑つたよ、何のために微笑したんだか分るかい?  
とにかく俺はその金を受取つたさ! さうして郵便局まで行つたには行つたが、俺は郵便局へは  
入らず終ひさ……。

アリョーシャ (息もつまつて) その金をどうしたんです? え兄さん? どうなすつたんです?

ドミートリイ (胸を打ち聲をひそめて) 此處にあるんだ、俺のふところなくしに縫ひこんで持つてゐ  
る。手はつけてゐないさ、まだだよ。恐ろしいのはこれからだ。なあ弟! まだ使つた譯ぢやな  
いから盗人にやなつてゐないよ、だが使はずにはゐられない、奇蹟でもない以上とても使はずに  
やゐられないさ。

アリョーシャ (強く) そのお金を私に下さい、ね兄さん!

ドミートリイ 親父はお母が俺にくれた遺産六千ルーブリの餘を横取りにしたんだからそいつを三  
千ルーブリだけ俺にくればそれで我慢してやるさ。それだけはどんなことがあつたつて無理に  
も貰ふんだ、さもなけりや俺の立つ瀬がありやしない、これより外に途はないんだ、どんなこと  
をしたつてそれだけは貰ふんだ……おい弟、お前の兄のドミートリイ・カラマーゾフはこんな吝な



ふところ思案をしたんだなあ、三千ルーブリギリ／＼の決着だ、老いぼれがくれたらよし、俺は眞直な人間でもゐられようが、くれないとでも云つたら最後、カチュリーナの金をかう持つてゐるんだ、俺は泥棒になるばかりさ、どうだい、俺はいま谷底にはまりかけてぶら／＼してゐるんだぜ……一度汚辱の間にとびこんだらそれつきり光明へも歡喜へも舞ひ上る道はもうなくなるに決つてゐるんだ。へん、なか／＼面白いや、ああ、こんなことを考へるだけでも俺にや極樂行きは出來さうにもないさ。

アリョーシャ 兄さん、何故あなたはそんな氣を起したんです？ 何故その三千ルーブリを出さなかつたんです？

ドミートリイ 何故？ 何故だつて？ 仕方がないからさ、俺は親父の子には似合の性惡のゲジゲジぢやないか、家ぢや色好みが氣違ひ沙汰になつてゐるんだぜ……さああばよだ、お前にもいつかは分るだらう、どん底、くらやみ、いまのお前にや話してきかせたところで無駄なことつた……泥と地獄！ もうきかない方が好いだらう、あばよ！ なあ弟！ 俺の前にや清いものなんてありつこはないんだ、分つたかい、さあどいた、どいた。さあ俺を行かせるんだ。（庭の方へ出ようとし

て階段の下のスメルチャーコフを見る）うんお前……スメルチャーコフぢやないか！ どうしたんだ？（つか／＼行つて會ふ）

### 第三齣

ドミートリイ。アリョーシャ。スメルチャーコフ。

スメルチャーコフ （階段の下から）ドミートリイ旦那。

ドミートリイ どうしたんだ？ 何故見張をほつて來たんだ？

スメルチャーコフ 御免なさいまし、小旦那が、こちらにおいでかと思ひましたんで。

ドミートリイ お辭儀はいいかげんにしろ、何かあつたのか？

スメルチャーコフ 少うし内々でお話したいんですが。

ドミートリイ 弟がゐたつて話したら好いだらうが。

スメルチャーコフ 左様、如何で御座いますかな、極く内々のことですが、

ドミートリイ アリョーシャ、ゐたつて好いよ。



スメルチャーコフ 極く大事なことで。

ドミートリイ ええ話せ！ 畜生め！

スメルチャーコフ いやさうお怒りなさつては。

ドミートリイ (肩をひつつかんで) 叩きのめすぞ。

スメルチャーコフ はい、はい、ひどいことをなさいますな、おつかねえことを。話します、話します。

ドミートリイ ええ、いら／＼させやがる。

スメルチャーコフ どうもな、いろ／＼の具合から考へますに、大旦那の方が旗色が好いやうでして。

(ドミートリイの怒れる所作を見て) まあ、まあ、ドミートリイ・フォードロギッチ様、そんなことはない眼をなさらないで、まあおしまひまで聴いてみて下さい……こちらが危険だと申すのは、昨日あなたのおために萬事うまく運んでゐるやうに見えたあのグルーシエンカさんが、急に大旦那の方へ寝返つたやうに見えますんで。

ドミートリイ あの女がお前にさう云つたのか？

スメルチャーコフ 今朝ほどのことですよ、大旦那のところへグルーシエンカさんから手紙が来ました

……それを讀み乍ら大旦那のお顔には血が上つて赤くなりましたな。

ドミートリイ (つばを吐く) ペッ、ペッ。

スメルチャーコフ 大旦那がどうやつてあの方の云ふことを聞かぬのを押通したのか、またあのとつちつかずのためらつてゐるのを定めさせたか分りませんがな、それと表立つた約束はしないで、まあ手紙ではグルーシエンカさんは大旦那のところに、而も今晚来るやうに云つてゐますんで。

ドミートリイ 幾時に？

スメルチャーコフ 眞夜半でさあ。

ドミートリイ お前は手紙をよんだのか？

スメルチャーコフ 讀みましたよ！

ドミートリイ 悪黨め！ 裏切つたのは貴様だ。

スメルチャーコフ めつさうな、私が裏切つたなら何でかうしてお話に来るもんですか？

ドミートリイ おいぼれは何をしてゐる？



スメルチャーコフ 大旦那はあの方を迎へるお支度でさあ、弟御のイヴン様にはチュルマーシニアの地所へ材木を賣るとかのお話で今晚行くやうに話しておいででね、これも實はイヴン様がゐて邪魔にならないやうになさるんでさあ……そればかりぢや御座いません、大旦那はたつた今しがた百ルーブリの札を三十枚お包みなさつて、紅いリボンをかけ封蠟をして『私の天使グルーシエンカへ、若し來たらば』とその上にかいておいででしたよ。

ドミートリイ でお前はその金を見たのか？

ハメルチャーコフ へえ三千ルーブリ、お父様はそれをふとんの下へ入れる前に私にお見せなさいましたよ。

ドミートリイ ふむ、おいぼれ猫め！俺の金で女をつらうとしてゐるんだな。(振返つてアリョーシヤを見て) おお、お前此處にゐたのかい、ふむ、眼をそんな風に擴げて！かうなつたら何もかも分つたらう？……親父が俺から盗まうとしてゐるこのグルーシエンカと俺は出て行かうと云ふんだ。金が欲しいと云ふのもこいつのためさ……聯隊から歸つて見ると親父がこの娘に惚れこんでこいつに財産も何もかも相續させる氣でゐると云ふ噂をきいた、事實、この女のために俺に渡すべき

金まで呉れないんだからなあ、俺はグルーシエンカのところへ駈けこんでいつた、女を毆打うたがしてやるつもりでさ。

アリョーシヤ その方を見さんは思つてゐらつしやるんでせう？

ドミートリイ 俺があの女をまだものにしてゐないと云つた所で誰も眞實ほんとにはしないだらう。それどころか……親父だつてまだものにはしてゐないんだ、まるで蛇のやうに掴まへやうがないんだ。

アリョーシヤ でも今夜そのグルーシエンカさんがお父さんの處へ行つたら……？

ドミートリイ 力づくでも暴れこんで邪魔をしてやるさ。

アリョーシヤ で、もしか？

ドミートリイ もしか？ ああ、お、俺は我慢が出来ない。

アリョーシヤ 兄さん！

ドミートリイ な、な、何をするか知れないぞ！俺はあの呪まじはれた面つらが耐らなく厭だ、あの二重顎、鼻、厚かましい笑ひ顔を見るときもう勘忍が出来なくなるんだ！

スメルチャーコフ そんなことを云つちやいけませんよ。



ドミートリイ うむ、貴様グルーシエンカが親父のそこへ行くのを見て俺に云はずにほつておいたら  
最後、貴様から先づ叩き殺すからさう思へ。

スメルチャーコフ (巧みにさけて) 今の所は大丈夫でさあ、大旦那とイヴン様とは私の後からおつつけこのお寺においでなさるんだから。

ドミートリイ この寺へ？ 何をしに？

スメルチャーコフ 大旦那はあなたの亡くなつたお母様アヂライイダ・ミウソフの遺産のことで今  
みたいに貴方様と仲違ひになつてゐるのを、ゾシマ長老様に仲裁して頂くやうに考へたのでして  
ね、長老様の地位と云ひお人柄と云ひ仲直りをさせるには持つて来いだと仰しやるんで。

ドミートリイ ふむ、また新奇のお茶番かい？

アリオシヤ 兄さん、世間體もありますからね。

(スメルチャーコフ退場)

#### 第四 齣

ドミートリイ。アリオシヤ。

ドミートリイ 俺の気がひけるとでも思つてゐるんだ。ままにしろ！ 坊様の前だらうが云ふだけ  
のことは云つてやるんだ。向うが譲るのが當り前なんだからなあ。それから直ぐグルーシエンカ  
のところへ駈けつけて連れて逃げてやる。二人ともこんな土地から離れば幸福になるんだ、お  
前、カチエリーナのところへ行くかい？

アリオシヤ あなた御自分でいらしつてお金を返しておあげなさい。

ドミートリイ それからなんだ、グルーシエンカが「さあ、貴方のものよ、連れていつて下さい」と云つ  
たら……

アリオシヤ 何もかもカチエリーナに打開けるんです。さうしたら安心が得られるでせう……

ドミートリイ 俺を許してくれつてかい？ 俺を踏んづけてくれるつてかい？ 俺にはそんな犠牲  
は向かないよ。イヴンが嫁に貰ふさ！ 二人とも似合ひの夫婦だし、それで萬事がまあるく行く  
と云ふもんさ。俺は二人を祝福するよ……だが、グルーシエンカ！ 俺のグルーシヤが、あのおい  
ぼれ牛の餌になるなんて！……俺はグルーシヤに惚れてゐるんだ。あれがほんとうの女だ。俺



の悪いところを、見もしないでゐてくれる。そりや二人はぶち合ひもやるさ、だがお互ひが思ひ合つてゐるんだ。俺を惚れさせたのはあの女だけだ。グルーシヤは俺の女房にするんだ。あいつをなくして生きて行けるものか。

アリョーシヤ 落ち着いて下さい。ね、兄さん、けれど、神様には何もかも分つてゐませう。兄さんの失望も見ておいでなんですよ。むごたらしい所業は決してお許しになりません。堅い約束を破つてはいけません。

(この前後、對話の始めの時、イヴン、スメルヤッコフを後に、階段の上部に登場)

## 第五齣

ドミートリイ。アリョーシヤ。イヴン。スメルヤッコフ。

イヴン (アリョーシヤの話の中に) やあ、坊さん、大分お説教がうまくなつたね。

アリョーシヤ (顔を赧らめて) イヴン兄さんはいつもからかふんですね。

イヴン 悪気はないんだよ、弟、僕はお前にかからかふのが愉快なんだ。お前の眼が光るのを見るの

が嬉しいんだね……今日は、兄さん、相變らず元氣旺盛ですね。

ドミートリイ 今日、イヴン、御機嫌よう。

アリョーシヤ イヴン兄さんは何もかも知つてゐて、なんにも仰しやつては下さらないんですね。

ドミートリイ 墓石のやうに何でも隠してゐるんだ。

アリョーシヤ (イヴンに) 兄さんは段々僕等から離れてゆくんですね？

イヴン あゝ何とでもお云ひ。

ドミートリイ おい……ここに二人の人間がだぜ、この地上の萬物を棄てゝいま昇天しようとする……二人ともでなくともいゝ、その中の一人だけでもいゝんだ。姿を消さうとする一人は、残つた一人のところへきてかう云ふとする。「これこれのことをしてくれないか。」臨終の床でなければ求められない事柄をだよ。その場合残る方の人間は、友人であり、兄弟であつたら、その要求に従はざるを得まいだらうがね。

イヴン 何を言つてゐるんです！ 何を意味しようと言ふんです、もつとはつきり言つたらいいでせうに。



ドミートリイ (興奮を抑へて) 直ぐに、こゝを出て、カチェリーナ・イヴーノヴナのところへ行くんだ。そして俺からの祝福をして、もうお目にかゝることはありますまいと云つてくれ。

イヴン 氣でも狂つたんですか？

ドミートリイ さう辛くあたつてくれるな。俺は莊嚴な心持で云つてゐるんだぜ。カチェリーナが何を求めてゐるかは知つてゐるだらう。また俺がどんな人間かなあ。あの女はお前の頭を、お前の生命の純真さを愛してゐるんだ。お前を信じてゐる。お前の云ふとほりになるんだ。これを最後に感謝といふ名で、あの女の存在の全部を破ることは出来ない。そんな無理な話はないからなあ。そのことをよく呑み込ませてくれといふんだよ。

イヴン 手紙を持たせてやつたらどうです。それともアリオシヤをお使番としますかな。

ドミートリイ イヴン、俺はお前に頼みたいんだ、お前が行つてカチェリーナに、『兄貴が行けと云つた……』と云ふんだ。さうしたら話を通じるよ。

イヴン (背を向けて) 戯談でせう！

(フョードルの笑ひ語るのが庭より聞える)

アリオシヤ お父さんですよ。

ドミートリイ 笑つたのが聞えたかい？ アリオシヤ、行かう。

アリオシヤ 御堂へはひりませう、イヴン兄さん、また直ぐに。

(アリオシヤとドミートリイ退場)

## 第六齣

イヴン。スメルチャーコフ。

(スメルチャーコフ、前景の間、話の中心より離れ乍らも耳を傾けてゐる)

イヴン 何をして居たんだい？

スメルチャーコフ 何も致しちやをりませんよ。たゞ考へてゐたんです。

イヴン 一體どうしたと云ふんだ。

スメルチャーコフ まあ……何もかもこれからですよ。

イヴン うん、お前はそれを考へてゐたのか。



スメルチャーコフ 大旦那と小旦那のことが心配になつてなりません。この狭い道でお二人が鼻と鼻をつきあはすことになつたんです。どつちも後へ引くことの出来ないお方達ですからね。

イヴン 口の中で) どうなるか今に分るさ。

スメルチャーコフ ですが、イヴン様、ドミートリイ様のやうなお若い旦那が、かうして許嫁を棄てるのはお氣の毒ですからね。まあ、何ですよ、カチェリーナ・イヴーノヴナさんが今お金を澤山お持ちなのを別にしてでもですよ。マスクワにゐる小母様から大分、持参金がついたといふ話ですが。

イヴン (脇を見て) おやおや、そんなこともお前は知つてゐるのかい。

スメルチャーコフ 六萬ルーブリでさあ、びた一文ない男には悪かありませんからなあ、結構な歩ですよ。(聲をひそめて) それをグルーシエンカさんの出やう一つで、ドミートリイの小旦那は、うつちやらうてんですからね……

イヴン 僕には関係のないことだ。

スメルチャーコフ それだけの金を損しようつて云ふんですかねえ。

イヴン それで、善良なる基督教徒のお前が残念がつてゐるのかい？

スメルチャーコフ あなたは御自分で惜しいとはお思ひにならないんですか？

ドミートリイ ドミートリイは俺の兄貴だよ。

スメルチャーコフ 私はお家のことを随分と考へてゐるんですよ。御存知ですか、この前の週に、酒に酔つたドミートリイ様は、酒場の真中で、あの方の許嫁にや不釣合だと御自分から大つびらにおつしやつたんですぜ、小旦那はきつとあの方にあきてゐるんでせうよ。(内證に) あの方も、もうぐらついでますぜ。

## 第七齣

イヴン。スメルチャーコフ。フョードル。僧バイーシイ。僧ヨシフ。

フョードル (舞臺奥にて兩名の僧に話しかける) お坊さん方、今一度十字を切ります。何事の起りますにも、(聖像に向ひてわざとらしく大きく十字をきる。やがて振返る) おゝ、イヴンや、このお坊さん方の住んでおいでのところは、ほんとうに薔薇の谷だな！



イヴン (低い聲にて) お父さん、あんなに云つておいたでせう、いゝ加減にしないと置いて歸りま  
すよ。すぐにでも。

フョードル 何か悪いことを云つたかな? お前も自由思想家としては、ひどく罪にさいなまれて  
ゐるやうなところがあるよ。人の心を読みぬく尊いお方の前へ出て、その額の中に思ひ浮ぶ考へ  
を主の目に讀まれるのがこはいのか。

(笑ふ。イヴン肩を聳かして再び階段を上る)

スメルチャーコフ (フョードルに近寄りて) 旦那、ドミートリイの小旦那が来ておいでですよ。しつ：

…どうして、今日の寄合が分つたものですかねえ。世間體もありますからな、旦那もどうか落ち  
着いて……威嚴をなくなさないように!

フョードル 俺の傍にゐてくれ。

スメルチャーコフ よろしう御座いますとも。

(兩名の僧は來訪を告げるため右に入る。アリョーシヤ、左手、御堂より再び登場)

## 第八 齣

イヴン。フョードル。スメルチャーコフ。アリョーシヤ。

フョードル おゝ! 來たな、來たな。(駆け寄りてアリョーシヤを抱く) 俺に抱かれてゐる可愛い、い  
い子! 鳩、親父の祝禱を受けてくれ……なに、ほんの十字をかくんだよ。……アリョーシヤ、ど  
うだな、こちらは? 面白いかな? 娘つ子はゐないことだらう……うん、うん、俺達罪人の爲  
によく祈つてゐてくれるかな? 俺達は生きてゐる間にいくらでも罪を犯すものでな、俺はよく  
かう思ふんだよ。『俺の爲に誰かに祈つてゐて貰ひたいものだ。』と、それはお前極樂へ行つちや俺  
はから、駄目なんだからなあ! だが、極樂のことはよく考へるよ。始終しじうではないがね……これは  
これは、可愛い鳩や、悪いことを云つてお前を怒らせたな? 何もお前を悲しがらせたくなか  
つたんだよ? まあまあ、お前こゝにゐるがいゝよ。年寄のゑひどれや助平沙汰ばかりのところ  
にゐるよりは、こゝにゐるのは何よりさ、汚れることがない。お前は天使なんだな!……ちつと  
も、みんな迷惑なんかしてはゐないよ。お前はまつたくいゝことをしたんだ。その眞理とやらが



分つたら、俺にも教へてくれるんだよ。あの世はどんな風か、前からわかつてゐるとなあ、出かけて行くのも楽になると云ふものだよ。また誰も俺に向うのことを話してくれる人がないんだ……さあ身を焼いて、往生してもな、また甦つて出る。その上で俺のところへいつか戻つてくれるんだよ、この誰からも憎まれてゐる可愛想な年寄のところへな。……(空泣き)俺は待つてゐるよ、この世界でお前だけが、俺によくしてくれたんだからなあ……

アリオーシャ お父さん……

フョードル (涙をのんで) うんうん、それだけだ。……勿體ない、長老様は何處にゐる？ みんなあの方の前に跪きに來たんだよ。……スメルチャーコフもな……あの小氣味のいゝスメルチャーコフを覚えてゐるかな？ いつもさつぱりした風を忘れたことがないだらう？……品がある。漆ぬりの長靴をはいて……近頃哲學をやつてゐるんだよ。さうさう、イヴンが教へてゐるんだ。イヴンの弟子なんだ。(舞臺奥にて共に語つてゐるイヴンとスメルチャーコフを指さし乍ら)「それ、仲がよいだらう、が、あのイヴンの奴、何といふ目で俺を見るのだらう！ アリオーシャ、イヴンなどを決して構ふことはない。

アリオーシャ 兄さんにそんなことを……

フョードル イヴンは家の人間ではない。カラマーゾフの魂が傳はつてはゐないんだ。

アリオーシャ 僕、つい今ドミートリイ兄さんに會つたんですよ。

フョードル ドミートリイの奴か！ あんな奴は、さそりのやうに上靴でふんづけてやる！……うん、お前は彼奴を思つてやつてゐたな、けれどそんなことはどうでもいゝ。イヴンの奴が彼奴につくと恐ろしいんだ。たゞ幸ひイヴンは誰をも愛することがない。イヴンは俺達と人間が違ふのだ。

アリオーシャ (當惑して) お父さん、お父さん！ もうゾシマ様がおいでになります。……お願ひです……どうか……ゾシマ様のお年のいつてゐられることや、お體の弱つてゐること、この場所の尊いこと、場合がどんな場合かも考へなければなりませんよ。……

フョードル うんうん、尊いとな、……それは俺だつて考へてはゐる……俺が悪いかな。

アリオーシャ 悪いとは思ひません、けれど何をなさるか御自分でも御存知ないのですからね。(ゾシマ長老現はる。イヴンとスメルチャーコフは舞臺奥より出づ、アリオーシャ、イヴンに) 兄さん、お願ひし



ておきますよ。(ソシマ長老に近づく)

## 第九齣

第八齣に同じ、ソシマ長老。僧ヨシフ。僧バイーシイ。

(兩人の僧はソシマ長老に禮す。長老答禮。アリョーシヤに倚りて前に出づ。イザン、フョードル、その後、後ニスメルザヤコフ、遠くより跪く)

フョードル (無言の後、また敬禮して咳く) 勿體ない長老様、何といふ有難いことで……

ソシマ 皆様、さあ、お腰をおかけ下さい。

フョードル (頻りに禮しつゝ咳く) ……はい、まつたく、それどころでは御座いません。勿體なう

御座います。私共罪の深い者が……

ソシマ その御心配は決して要らぬことです。

フョードル

いえ、いえ、もう何も申し上げられませぬが、これは深い感謝を以てで御座います……(俄かに)が、先づ何よりも私めにはまだ腑に落ちないことがありますので、勿體ない長老様、

貴方様が久しくいろ／＼の人間の告白をお受け遊ばしてゐらした間に、その人間の惱んでゐる心の苦痛を一目で見破られると云ふ不思議な力を御會得遊ばされたと云ふのは、正眞のことで御座いますかな？ さうでないかと？ 大袈裟すぎますかな？ 大袈裟！ いや伴のイザンめが、この話をほんとにいたしましたな。へっ、こはがつてゐるので御座いますよ。……(肩越しに何か云はう「見物にはきこえず」としてゐるイザンに) ふん？ さうでない？ 嘘だといふのか？ ……いゝやな、ほつとけ、何も言やせんわ。……(熱意をこめて) いや、どうもとんだ饒舌おしゃべりで、正眞正銘の道化なので、これが生地で、何とも他に仕方がないので御座りましたな。

ソシマ ありのまゝを見せるのを恐れなざるな、間違ひごとはそれから起りますのぢや。

フョードル 左様で御座いますともな！ どうも人様の前へ出ますと、自分が他の人間よりも根性が悪くて、人様からいつも道化のやうに見られてゐる氣がしてなりませんでしたが、何ですか、私は道化るので！ ……これでよろしいと致しましたが、どうもこの氣性では、とても永遠の生命とやらを持ってないやうな氣が致しますでな。

ソシマ 段々持てるやうになります。酒を一切断ち、口數をつゝしみ、身體を深く保つて、あまり



金錢を愛さぬこと、また第一に嘘を云つてはなりません。

フォードル (跪き胸を打ち) 私めはその嘘なので、嘘の父、嘘の子供なので御座います。けれど貴方様のお話ですつかりわかりまして御座います。

ソシマ お立ちなさい、それがまたまことの態度ではない。

フォードル (狼狽して) 勿體ない長老様、どうかお許し下さいまし。どうかしてゐますので……この頃何から何まで疑はれますのでな、さうさう、俵のイヅンが家へきて住むやうになりましたから、いろ／＼わからないことばかり見せますので……

イワン 私が何もわからないことを見せたのではないのです。

フォードル さうかな、では、見せたのではない、置いたのだと申しますかな、そのいろ／＼の謎、得體の知れぬ言葉をな、さうしておいて、イヅンは自分で逃げて哲學とかを致します。可愛想な私めの頭をからかふので御座います。

ソシマ (イヅンに) 貴方がいけませんね。

イワン (微笑しつつ、懇懇に) 何故いけませんでせう。

ソシマ 貴方はその問題を解いては居られぬ。問題は解かれるのを待つてゐるのです。

イワン (同じ所作) 一體、解決と云ふものがあり得べきでせうか？

ソシマ 神様がはやく貴方にそれを教へたまふように！ 貴方の尊い苦しみを祝福したまひ、救けたまふように……

フォードル そ、それまでにな、一つところを堂々めぐりしてゐるこの考へを持つてゐましては、……ほんとうに静かな信心などは家の中にもありませんので。(アリョーシャを指さし) この天使がゐなくなりましてからはな。私めのぐるりでは、誰も彼も考へすぎますので、それがまた私めをかきまはして、わけをわからなくするので御座いますよ。……さうさう、この下男めまでがそれで……このジュズイトがあらうことか、私めのところにまゐりまして、お星様が最初の日にもう創造されてゐるのに、お日様が四日目だとはどう云ふ譯だと聞きますので……そんな風で御座いますので、私めの、ゆるぎがちな信心もそれからそれとぐらつので御座いますよ。たしかにこの下男めの質問が、私めの墮落一切の原因なので。(怒つて出口まで歩み去つたイヅンに) おい、俵や、どうするのだ？ 歸るなよ、もうおしまひぢや。これからいよく用向だよ。……へへ、勿體な



い長老様、どうかお裁き下さいませ。……不幸者の倅、このおいぼれに恥をかゝせませう。ドミートリイ・フォードロギッチが私めに三千ルーブリ出せと申しますので、私めが倅共の金を長靴の中へ隠して、當然やるべきのをやらぬと云ふやうに云ひましてな。……それにはこちらにも、れつきとした云ひ分が御座いますので、あいつにどれだけ金があつて、それをどれだけ使つたか、どれだけ残つてゐるものか、ちやんとわかる書付が御座います。……世間様がよつて私めに反対しなくてもな、ドミートリイの奴はどうして私めに、めんこ一つの貸しがあるどころでは御座いません。

(やゝ以前よりドミートリイ、御堂より出で舞臺に在り、帽子を脱ぎ手に持ち、靜かにゾシマ長老に近寄る)

## 第十齣

第九齣の人々、及ドミートリイ。

ドミートリイ (ソシマ長老に恭々しく) 私としましては、親父のくれる勘定書が何のことやら、譯が

わからぬので御座います。また私は取て……

フォードル こんな無頼漢の云ふことを誰が信じるもので御座いませう。この男のひどくみだらな所業は、世間に噂の絶えたためしがないので御座います。聯隊にゐました頃でも、千ルーブリ、二千ルーブリと、湯水のやうに使つて、罪のない娘さんを騙しましてな。

ドミートリイ (抑制して) お父さん、酷いことを云ふ、お父さんのさう云ふ下心は……

フォードル 現に、こいつの隊にもとゐた大佐さんの娘でな、いゝお家の娘さんをだまして、汚した揚句が今……

ドミートリイ おのれ、この地上で誰よりもけだかい婦人をさうまでは云はせないぞ。……しかし、私がかうした場所、この立派な方々の前で醜いことはしたくない。寧ろ失禮する。

フォードル うん、ミーチャ、ミーチャ、この親から貴様を呪つたらどうする。

ドミートリイ (入口より聲をあらゝげ) 俺から貴様を呪つてやる。

フォードル 親をつかまへてか、親をつかまへてか。

ドミートリイ (フォードルに近より) 何から何まで悪いことは貴様のせゐだ。俺達の生命から魂まで



も病毒を傳染させをつた。……皆様、私だつて今までこの親父に言葉を逆つたことはないのです。けれど親父の方からかうまで私に恥をかゝせるのですから、親だらうが何だらうが、此奴のやつたことは皆、ぶちまけてやります。

フォードル ドミートリイ・フォードロヰチ、貴様が俺の倅でさへなければ、一足だつてそこを動かせるんぢやないぞ。決闘をしてやるんだ。

アヨリーシャ (イザンに) 兄さん、とめて、とめて……

ドミートリイ 倅だ！ 一體倅のやうに扱つたことがあるのかい？ お袋が死んだばかり……俺がたつた二つの年だ……俺を門番小屋に抛り出して虱に食はしておいたのが始まりだ。それからはどうだ。……イザン、アレクセイ、お前達が知らなくつても俺は見えて知つてゐる。此奴は家へ、ちこくを引張り込んだ。しかもよ、お前達のお袋、ソフィア・イザノヴァの見てゐる前で馬鹿騒ぎをやつたんだ！

アヨリーシャ (イザンの腕をつかまへて揺すり) イザン、イザン

ドミートリイ 来い。(スメルチャークコフに突進しひつとらへて、恐れるのを、舞臺前方にひき出す) この巖

癩やみの青蛙、病みほうけた牡雉……へッ、俺の兄弟、うん、フォードル・パヴロヰチの正真正銘の倅、下男におとされてゐるスメルチャークコフを御紹介申す！ 親父が白痴の乞食娘を、往來の溝で寝てゐるところをやつつけて、その鼻持ちのならない女から出来たのが此奴なんだ！

僧侶達 (眩く) もういゝ、もういゝ、我慢出来ない。

ドミートリイ 此奴が兄弟でも俺はいゝさ。俺は何も欲しかあない。が、お前、大きな望みのあゝイザン……お前、神を求めてゐるアヨリーシャ、このスメルチャークコフはお前達の眞身の兄弟だ。よく見るがいゝや。

(スメルチャークコフを突放す。スメルチャークコフ顛へつゝ舞臺奥に逃げる)

フォードル (ドミートリイに拳を向け) 追ひ出せ！ 追ひ出せ！

ドミートリイ お父さん、お前さんのやり方は實によくしたもんだ。一コベックを手放すよりも、その爲に倅達が困つて盗みまでするやうにするんだ。

フォードル 貴様に何の借がある。

ドミートリイ そればかりか、汚い情慾から俺の思つてゐる女を汚しなかつた。グルーシエンカを



盗む氣でゐるな？ さうだらう、今夜女の來るのを待つてゐるんだな。

フォードル (たちくとして) 俺の方がいいと云ふのだ、よかつたら女房にでも貰ふさ。

ドミートリイ 何？ 黙れ！

フォードル カチ、リーナを放しなさんな。どんな氣まぐれ通りにもなるからな。……蒼白い優しい娘さんにや、放蕩者だけが氣に入るんだ。(ドミートリイ答へず、拳をあげて父親に跳りかゝる) 助けてくれ、助けてくれ！ 人殺しだ！

(フォードル叫び乍ら逃げる。ドミートリイ後を追ふ)

イワン (やつと間に入り、ドミートリイの道をふさぐ) 待て！ 狂人。

ドミートリイ (弟の手の下に身を震はし乍ら) あんな奴を生かしておいてどうするんだ？

(一同佇立、ドミートリイのこの態度に一座氣のぬけたやうになる。ドミートリイ自身ぼつとほうけたやうになり、ソシマ長老靜かに歩み寄り、急に額を床にすりつけ、びたりとドミートリイの前に跪く)

何故です？ 何故？……もう、いゝんです。いゝ、……いゝんだ。(ドミートリイ階段に走せゆく、俄かにとまりイザンを呼ぶ) イザン、カチ、リーナを思つてゐてくれ。今日でも行つて、お前會つ

てやれ、會ふんだぞ。(階段を走せ降る)

フォードル (僧侶たちと舞臺奥より出づ) よろしいので、へい、もう結構で御座います。え、かへります。え、もうまわります。私めもたしかに道化で御座いますよ。が、その、紳士にはちがひないので……

(フォードル退場、僧侶達後に従ふ)

## 第十一齣

ソシマ長老。アリオシヤ。イザン。スメルチャニコフ。

(ソシマは依然跪坐せるまゝ。アリオシヤその上に身を跨む。イザン左手に佇む。スメルチャニコフ、イザン傍による)

スメルチャニコフ 旦那、何故かうびたんとお辭儀してゐるんでせうな？

イザン 俺の頭をくだいてまでもこの謎を解かうとは思つてゐないよ。

スメルチャニコフ 旦那がとめなかつたなら、屹度殺しましたぜ。



イワン

(咳く) それが何だ。悪黨が悪黨を食ふ。當然の報いが来るんだ。

五〇

アリョーシャ

(イワンの最後の言葉に頭をあげて、行かうとするのを止め) 兄さん、他人の生きてゐていゝものか死んだものかを定める権利が人間にあると思ふんですか？

イワン

(傲然と) 御質問恐れ入るな。

アリョーシャ

兄さん、返事をして下さい。

イワン

無駄な嘘は云はんさ、人間がさう出来てゐるなら、脇から何が出来る？ また希望といふ奴が一切許されてゐるならばだね。

アリョーシャ

一切の希望……

イワン

さうさ、人間が望んで悪からう筈がない。

アリョーシャ

他の人の死までを？

イワン

(もどかしく) 俺が、ドミートリイのやうに老いぼれが殺せるとでも思ふのか。ふん。

アリョーシャ

何を云ふんです、イワン兄さんでも、ドミートリイ兄さんでもそんなことをなさるな  
どと考へられるものですか。

イワン

では何故赧い顔をする？ (額を小突き) 大丈夫だ。弟、いつものやうに親父の守護につとめてやるよ。

アリョーシャ

あゝ。

イワン

が、自分の希望はだね。……そのまま自由にほつておくのさ。

(イワン、スメルサヤコフの後より退場)

## 第十二齣

ソシマ長老。アリョーシャ。

(前齣の最後のあたりソシマ長老、身を起して立つ。アリョーシャを深き感動を以て眺め、口を利げざるとい、次にアリョーシャを無言にて抱く)

ソシマ

お前はこゝにゐるべきではない。……兄さん達の傍へ行つてやる時が来たのだよ。一人の  
でない。二人とももの傍へだ。……何故顛へる？

アリョーシャ

こはいのです。兄に頭をお下げになつたのは？



ソシマ あの人にやがてふりかかつて来る大きな苦痛に頭を垂れたのだよ。……さあ急ぎなさい！  
アリョーシャ (恐る／＼) 僕はこの静かなお寺が好きです。長老様が好きなのです。

ソシマ アリョーシャ、お前の心は、恍惚の裡にあまりに費されて来た。さよなら、俺の残つた日數とは云はない、時間も程なく終ることだからな。(語り乍らアリョーシャを静かに階段につれゆく。無理に放す)

アリョーシャ (ソシマの手に接吻して) 左様なら、左様なら……(顔をこちらに向けつゝ段を下りる。ソシマは身をかゞむ)

ソシマ (最後の瞬間、一段降りて、手をアリョーシャに差し出す。低い聲で、しかし確信をこめて) アリョーシャ、……お前、他の人の罪を自分の身に背負ふことを得たらばな。……その人の爲に苦しみ、その人を咎めずに出してやるのだよ。……さあ、おいで、主様がお前についてゐなさる。愛する子よ、行きなさい……

(アリョーシャ涙にくれて去る。ソシマこれを祝福し、アリョーシャ庭に出て後も欄干によりて暫らく見送る)

(幕)

## 第二幕

同じ日の午後、夕暮に近い。カチエリーナ・イブノヅナの住居、典雅にしつらへられた化粧室、左手に窓、舞臺奥に戸口、玄關に通ず。右手の戸口は客間に、左手の戸口はカチエリーナの部屋に續く。

### 第一齣

イヴン。カチエリーナ。

(幕開くと二人とも舞臺にあり。黒い着付のカチエリーナは卓子の側に腰掛け、膝をつき、額を手に握め、云ひ争ひたるあとの様子にて顔色蒼白なり。イヴンは顔りに室内を歩む。二人の間の會話は、イヴンの暴言によりて中絶せし態、イヴン佇立してカチエリーナを見詰む、やがて近寄り卓を挟みて身を跨める)

イヴン (顔へを帯びた低聲にて) カチエリーナさん、貴方が幸福になることを考へないのは遺憾に思ひますよ。



カチエリーナ (頭を振る) 妾<sup>わたし</sup>としては幸福になることよりも、もつとしなければならぬことがあるんですもの。

イヴン (微笑しつつ、再び身を起して) 義務ですか？

カチエリーナ 義務よりももつと尊いものですわ、そして妾の心を惹く……

イヴン 冒険を好むこと、危険を愛でること、それですね！……貴方は自分の感情を傷つけるものには、何にでも意志を激させる、さうして生命を賭してゐないと、生きてゐるやうに思はれない人なんです。

カチエリーナ ええ、生きてゐるのがそれ程いいものでもないのですからね。

イヴン (再び近寄り) 貴方には生命がどれだけ力のあるものかまだ分つてはゐないのです、さうして生命が結局貴方を曳摺つて行くんでせう。

カチエリーナ 神さまのお力を借りますわ。

イヴン 神！……絶大な天賦のない限り、神の求めることも出来ませんよ。

カチエリーナ どんな苦業にも妾は懈怠なく備へてゐます、私を悦ばせるだけのことでもすもの。

イヴン その苦惱に何か報酬が期待出来る間はね……しかしその報酬が絶対にないとなつたらどうです？ 目標がないとなつたら？ 人間に何が分るものですか。

カチエリーナ でも人間は信じてゐられますわ。

イヴン はは、それは私も信仰は持つてゐますがね……しかしそれも期待があるからでせう？ 生命は過ぎてゆく……貴方の生命は……この地上での幸福、歡喜と云ふものが！

カチエリーナ (殆ど殘酷に) 貴方は苦しむことが出来ない方です。

イヴン 貴方はまだこれからも苦しんでゆけるんですか？ その人間性に背く反抗の根を枯らして御自分の純真な感情をそのままに受取れるやうになるまでに、十年、十五年の歳月を待たなければならぬとします、萬事手後れになつてから、ありのままにその生命を送る方がいゝのだとやつとわかつて來た場合に、御自分の生命を振返つて御覽になる……え、カチエリーナさん、その時には最も美しい時代、一切が可能である時期、即ち御自分の青春と云ふものをまつたく浪費されたことになるでせう。そしてまたそれらを道化芝居の競合に無駄に使はれたことにもなるでせう。しかも相手は空威張りをするほかに能のない人なんですよ。



カチエリーナ (起き上つて) ドミートリイなら苦もなく勝つて見せます。

五六

イワン あの男と一緒に、御自分も失はれるんです。

カチエリーナ 妾はかはらぬ愛であの方を奪つて見せますわ。

イワン 貴方のその愛をあの男は拒んだのではないんですか。

カチエリーナ 無理にもあの方に讃仰させて見せますわ。決して妾から離れる事は出来ないのです、それは私があの方の前に身を投げ出して、あんなにまで寛大に扱はれたその日から分つてゐますわ。あの方の生涯でも一番氣高い時、あの瞬間にゐてあの方を見てゐたのは妾一人で御座いますもの、あの方から何を期待出来るか存じてゐるのもたつた妾一人なので御座いますもの……

イワン さうした、たつた一瞬間の印象、刹那の昂奮が貴方に全生涯を支配する法則を與へたのです。そしてこの永遠の義務が愛から來たものとされる、それが馬鹿げたことなんですよ。

カチエリーナ それがどうにかなるとお思ひにならないんですか？

イワン カチエリーナさん、貴方は御自分のうら若さを愛さないのでですか？ 幸福とは云ひませんよ、ある満足、あなたの持つてゐられる力を使はうとは……求めないのでですか。よく考へて下さ

い。貴方と同等な人間、あなたにふさはしい男に對する愛、今日さうやつて浪費されてゐる尊い思想や、強い努力、それらが花を咲かせ、實を結ぶとしたらどんなものか！

カチエリーナ (深い感動) さう云ふ方もあるひは……ゐらつしやるかも知れません。貴方の仰しやるやうなお方も！ さう思ふとうれしう御座います。けれどそれとてもこの心を曲げることは出來ないので。

イワン そのお考をまともにつきつめようとはなさないのです。

カチエリーナ いえ、私がそれに心を惹かれれば惹かれるだけ、ドミートリイを思ふことが一層祝福を受けるんですもの。

イワン あの男が不實であつても？

カチエリーナ あの方のお弱いのは望むところです。

イワン ではあの男が、他の女を愛してゐても貴方はそれを受け容れると仰しやるのですね？

カチエリーナ いえ、あの方は愛してゐると思つておいでになるだけのことなんです。

イワン あの女好きが！ 貴方はあの男の望みに逆つて、ますくそれをいらくさせてゐられる



んですよ。

カチエリーナ あの方には何處か尊いところがおあります。私の申し上げるのはあの方のその點なのです。

イヴン あなたはあの男の魂の傷口に毒を注いで、餘計にたゞれさすやうなものです。あの男の魂に、ますます恐ろしい闘争が起るやうに仕向ける。そしてその闘争では、尊いものが卑しいものに負けるのに大方定まつてゐるんです。

カチエリーナ そんなお口のきゝ方は、これまで一度だつて伺ひませんでしたわね。

イヴン 御免なさい。貴方の前で、兄貴の罪をこきおろすなんて。

カチエリーナ これからそんな後であやまるやうな事は仰しやらないで下さいましな……わたくし、三日も前から、あの方がきつとおいでになると思つてをりましたの。あの方はどこへいらしつておいでも、わたくしのことを考へておいでなのは分つてをりますもの、何をなさつてもきつと歸つていらつしやいますわ、私におあやまりなさるんなら、わたくし、「存じてゐますわ」と申すつもりなんです。いらつしやるのが、どんなに遅れてもきつと歸つておいでになるといふ確信

は決してなくならないのです……

イヴン (中途で急に) カチエリーナさん……私はドミートリイ兄の命令で参つたのです。

カチエリーナ (顔色を變じ) 何故で御座いますか？ 何か申しまして？ 詳しくお話下さいませんか……

イヴン (カチエリーナの顔をちつと見詰め)……貴方に私から御挨拶しろと命令したのです……そしてもう参らぬと申すように……

カチエリーナ (顔色を和げ) そして？

イヴン それだけです。

カチエリーナ 相變らずで御座いますこと……私に挨拶しろ……あの方がお使ひだつたのはそのお言葉ですの？

イヴン 特別にこの言葉に力を入れて云つてゐたんです。

カチエリーナ では、昂奮して……御自分をお忘れになつておいでたので御座いますか、大方。イヴン それまでは僕の存せぬことです。



カチエリーナ あの御自分の御決心が恐ろしかつたのですわ、そしてこの言葉を強く仰しやつたのも、わざとらしく大袈裟な物言ひを一層強く仰しやろうとしただけのことです。御座いますわ。

イワン あるひはさうでせう。

カチエリーナ その御挨拶だけで、こちらの返事を受けずに私を抛つてお置きになるお氣でせうか？  
イワン いや反対に、その大袈裟な物言ひには、貴方の最も祝福された御返禮をなさることゝ思ひますかね。

カチエリーナ わたくし眞面目で申し上げてゐるので御座いますよ。

イワン いや、悪いくらゐる極端にですよ、眞面目すぎて嘘になるまでですな。

(女中登場)

## 第二齣

前齣に同じ、女中。

女中 お嬢様にアレクセイ・フォードロピッチ・カラマーゾフ様がお目にかゝりたいと仰しやるんで

す。

カチエリーナ イワンさん、弟さんですね、ほんとうによくいらしたことです。(女中に)お通し申し上げます。

女中 それから御婦人のお方もおいでです、あのお嬢様が……

カチエリーナ いゝの、いゝことよ……お客間へ御案内してお置き、直ぐお目にかゝるから。(女中退場、カチエリーナ、イワンに近寄る) イワン・フォードロピッチさん、貴方のその鋭い見透すやうなお目で、はつきり私の心がお見えでしたらば、……どうか……また幾度か私に手をかして下さつた、私の信じてゐる御尊敬申し上げてゐるお方でしたらば……どうかこれからも、踏んでまゐつた道を行く私を支へてやつて下さいませぬ、これまでもどんなにか苦しい思ひをしてまゐりました、これからもその苦しみをまた見ようとしてゐるのです。いつか私にも、お言葉におさからひしたのを悔む折もあることで御座いませう、けれども私はつきつめて行きたいと存じてをりますの、精一杯をつくしてかゝらねばならぬことで御座いますもの、そしていま貴方をおなくなしては、私どうなるか分らないのですから！



（イザンとカチエリーナは右手、たがひに相よりてあり、イザンは頭をうなだれ手を小さき卓におく、カチエリーナは語り乍らその手をイザンの手の上に置く、アリオージャ入り來り、兩人をちらりと見る）

六二

### 第三齣

イザン。カチエリーナ。アリオージャ。

アリオージャ （禮して低い聲にて） 神様が貴方さまにおつき遊ばすように。

カチエリーナ （いそ／＼と近より）アレクセイ・フォード・ロギッチさん……アリオージャさん……かう呼ばせて下さいましたか？ お目にかゝれてほんとうに嬉しう存じますわ。

アリオージャ （イザンとカチエリーナをこも／＼も見て） 御免下さい、お伺ひするのがぶしつけとはよく存じておりました。けれどもドミートリイ兄のことが、あんまり心配だつたものですから、兄はほんとうに危い瀬戸にゐるのです……もうイザン兄からお聞きでせうけれども……

カチエリーナ あの方が私のところにもう來ないと申すことですか？

アリオージャ さうなのです。兄を救へるのは貴方だけと思ひましたから、僕は急いで駆けつけて來

たのです。

カチエリーナ アリオージャさん、まあお坐り下さいまし……どう考へておいでかその通りを御遠慮なくお話して下さいました、……最近のことがあつてからの……兄さんのなさることを。

アリオージャ ええ……でもあのことは僕、あんまりよく分らないのです。

カチエリーナ まあ、清いお言葉だこと。

アリオージャ 兄は悪いことをよくします。けれど兄は罪を犯したと云ふことを知つてゐるのです。悪いひとではないのです……それから貴方を、貴方は兄の心に、もう抜くことの出來ない矢のやうに深くはひつておいでなんです。兄は貴方を思つてゐるんです。けれど、きつと貴方が兄をこはがらせたのだと僕は思ひます。貴方が兄の心にある一番美しいものなのです。けれどまたそれが兄を苦しめてゐるのです。

カチエリーナ そしてあの方はお金のことをお話して、三千ルーブリの？

アリオージャ え、御存知なんですか。

カチエリーナ あの方はきつと、届けまいと見抜いてゐましたわ。あのお金をおあづけしながらも私



は……

イワン さうやつて弄んだのですね。

アリョーシャ 兄を恥かしい目に合せようとなさつたんですか？

カチエリーナ 恥かしい目を見せたかつたのです、そしてあの方を、神様のところへ行くように自分のところに來させて見て、私がどんなことでも宥せると思ひ知らせてあげたかつたんです。

イワン が、兄は來ませんでしたね。

カチエリーナ まだ私がわからないのです。

アリョーシャ でも、もう名譽まで無くしたんですから、どんなことがあつても一つなのです。

カチエリーナ 私のところへ來なければいけないのです。私はあの方をお迎へして、慰めてもあげます。

アリョーシャ 兄は何故……知つてゐてお金を放さないものでせう？

カチエリーナ あのグルーシエンカさんと私をだまして逃げるつもりなのでせう、ドミートリイがこの一時の誘惑に心を動かしたからと云つて、争ひを棄てる私とお思ひですか？ あれは愛ではな

いのですからね、あの人はグルーシエンカさんを愛することは出來やしません。  
イワン が、ですな……

カチエリーナ グルーシエンカさんは人を妖まじはす女ですと仰しやるの！ 争ふことも出來ない女ですと。そして私があの子の一睨みにも耐へられないと？

アリョーシャ 不實な恐ろしい女ひとですからね……

カチエリーナ あの可愛い遊び女おに、私よりも力があるか、かたい心組みがあるか、あのひとのまどはしが私の愛にまして、高い尊い人の心をとどめられるか、また私がつかんだあの心を、あの人にあつてとられるか……それはこれから分りませう……（右の戸口をさし）グルーシエンカさんはそこにゐますのよ、おひきあはせませうね。

イワン カチエリーナ・イヴーノヴナさん、まあ僕は遠慮ませう、歸して下さいませんか。

カチエリーナ （命令的に）歸つてはいけません。おいでなさいまし、ねイワン・フォードロギッチさん、お願ひですから。

イワン （冷笑しつゝ）その麋鹿を手馴らさうとするのですか。



カチエリーナ もつと難かしいことをするので。(戸を開く) アグラフェーナ・アレクサンドロヴナ様、お待ちして居りましたわ。

グルーシエンカ (舞臺に姿を現はす前に悠長な聲で) はいお嬢さま、お召しを待つて居りましたわ。

#### 第四齣

前齣の人物とグルーシエンカ。

(盛装のグルーシエンカは、顔に無邪氣な子供らしい微笑を浮かべ、歩むといふより寧ろ滑り込むやうな形で、頭を振りながらおどくした様子で入つて来る)

カチエリーナ (紹介し乍ら) こちら、イヴン・フォードロヰッチ様、(グルーシエンカが恭々しく禮をすると、イヴンは軽く禮を返す) こちらがアレクセイ・フォードロヰッチ様、……(グルーシエンカは不思議さうにアレクセイを見て頭を下げる。アリオージャも頭を下げる。カチエリーナはグルーシエンカに椅子につくよう手で示し乍ら、一寸彼女を凝視して、少し窮屈さうな容子をしたが、又鷹揚な態度で) あなたね、私がこんなことをするのを悪くお思ひにならないで下さいました、つまりあなたを尊敬したいからですわ

……でも、よくいらしつて下さいましたわねえ、お禮を申しますわ。

グルーシエンカ (優しく) あら！ お禮ですつて……お嬢様。私こそあなたにお禮を申し上げなければなりませんわ、だつて、いやなお顔をなさらないで下さるのでございますもの。

カチエリーナ (無理に) 私ね、あなたのやうなごきれうの方がいやな顔をされるなどは思はれませんわ……(イヴンの方をむいて) この美しいおぐしを御覽になつて？

グルーシエンカ (微笑して) まあ、私、どうしたらよろしいでせう。でも御用心遊ばせ、餘りあなた方がお世辭を仰しやると、私が自分で自分を信用しなくなりますから。

カチエリーナ (少し頭へ聲で) でも、私、これだけの所で、本當の事を申してゐるだけですわ。

グルーシエンカ (突然手を舉げて) シッ！ ……(左手の扉を指して) 何人か、足音が……(と云つて椅子からはれ上がる)

カチエリーナ 女中ですわ。

グルーシエンカ 確かに？ 扉の後方の音をお聞きにならなくつて？  
カチエリーナ あなた、どうなすつたの？



グルーシエンカ

しゅー……(耳を扉に押しあてて) 私、本當に馬鹿ですことー！ ドミートリイ・フォード  
ロヰチだとばかり思ひましたの……いゝえね、私、こちらへあがり乍らも、あの人を二度も見た  
やうに思ひました。私、あの人を離れては、一步も歩けないんです。私はそれが怖ろしい  
んですわ。あなた、あの人を来ないことをお約束して下さいますか？

カチエリーナ

えゝ、えゝ、……

グルーシエンカ

それで、私、安心しましたわ。……私、あの方に見つかつてはいけませんの！ も  
うあの人から隠れて三日になりますもの。今私が嘘を云つたことがわかれば……あゝ！ それこ  
そ何もかも滅茶々になつてしまひますわ！ あの人を知つていけないことはみんな濟ませてし  
まひました……私が何故こんなにおど／＼してゐるのか、あなたおわかりですわね。どなたでも  
私を良にかけることが出来たかも知れませんわ。……

(女中、チョコレート、乾菓子、砂糖煮の果物を盆にのせて登場)

カチエリーナ チョコレートを召しあがれな……お菓子の方？ あ、シャンパンに致しませうか？  
ね？

グルーシエンカ

いゝえ、チョコレートが結構ですわ。

(女中退場、カチエリーナ自分でチョコレートに湯をさす)

カチエリーナ

果物もお好きでせう？ 私取つてあげますわ。

グルーシエンカ

(心から笑ひ乍ら) あら、そんなに、まあ！

カチエリーナ

シガレットは？……(マッチに火をつけて出して) でね、あなたがドミートリイに大變な  
祕密なことをなすつたつてことをお伺ひしてもよくつて？

グルーシエンカ

(手を拍ち乍ら股掛椅子の中で身を反らして) そら、私、きつとさうだと思ひましたわ。

……あなたも本當に物好きな方！ 私ね、あなたが氣になさることはちやんと知つて居りました  
の。と云つて、私、あなたに御心配をかけて自分で今喜んでをられませうか？……(アリオシヤの  
方をむいて) 貴方もやはりそのことに興味をお持ちになりました？ けど、こんなことはまだ世慣  
れない方の前でお話することではありませんわね！

カチエリーナ

赤面するやうなことなの？

グルーシエンカ

赤面？ え、さうですわ！

先刻も階段の處で私を追ひ越しながらこの方は目を外



らして行つておしまひでしたわ。私、この方だとちやんと知つてをりますの。私もおこりましたわ。だつてその方が私を輕蔑なすつたのだとばかり思ひましたからね……（微笑しながら自分を見てゐるアリオージャに向ひ）あなたのおこりになりまして？（アリオージャ首を横に振つてみせる）あなた、私にお手を下さいませんか？（アリオージャ手を延ばす）あなた、私を氣味わるくお思ひになつて？

アリオージャ いゝえ。

グルーシエンカ 嬉しいわ！……私ね、あなたにお目にかゝるのが何故こんなに嬉しいのか、自分でもわかりませんの……

カチエリーナ （グルーシエンカの側に寄つて）だつて、私達お友達の仲ですもの。

グルーシエンカ （アリオージャから目を放さずに）この方のお兄様がよく私にこの方の事をお話しになりましたの。馬鹿な私はいつもかう考へてをりましたわ。『さういふ方はきつと私のことを輕蔑するに違ひない。』つて、けども私、この方のやうな優しいお目を今迄に見たことがございませんわ。……（楽しいげに）私も今日は本當に善良な女ですわ。（カチエリーナの方に向いて）さあ今ですわ、あ

なた。そしてあなたもお急ぎなさいました、私の逃げてまゐります用意はよろしいのですから。

カチエリーナ （グルーシエンカの手を取りもぢくし乍ら）でも、私の心が私に申しましたのには、私達二人は私達だけの用意をしたのですつて。

グルーシエンカ 私はもうこの上誰にも悪いことをする氣にはなれませんの、若し私があなたに悪いことをしたのなら、私、それだけの賠償つひなひをすることをお約束しますわ。

カチエリーナ まあ、あなたは本當に寛大な方ですわ！

グルーシエンカ あなたは私の頭を滅茶々になさらうと思つてゐらつしやいますの！アレクセイ  
フョードロヰツチさんの前で私の手に接吻なすつて。

カチエリーナ あら！あなたを？私に！グルーシエンカ、さうお驚きにならないでもようござ  
いますわ。……私ね、昔は確かに悪人でしたのよ、苦しみがありましたからね。

カチエリーナ あなたに苦しみが？

グルーシエンカ もうあれから五年も経ちますわ！あの人が歸つてしまつてから皆忘れられてしま  
ひましたの。



カチエリーナ 歸つてしまつて？ どなたが？

グルーシエンカ ムッシャローギッチ……本當ですわ！ あなた、ムッシャローギッチを御存知で御座いますまい？……ポーランドの士官で、私の初戀の人ですの。……そしてあの人が結婚するために私を捨てたのが、十七……え、十七……位の齡とでしたわ。あゝ！ 何といふ不幸でしたらう！ 若しあの時、あの年寄の商人のサムソノヴが私を救つてくれませんでしたら、私は水に飛び込んでしまつたでせうに。

カチエリーナ その人があなたを救つて。まあ！

グルーシエンカ あなたは餘り寛大すぎますわ。

カチエリーナ その人があなたを慰めて、保護して……

グルーシエンカ 私ね、その人はだませませんでしたの、あなたもお分りでせう。たゞ私、ちつとそのことを考へましたわ……五年間といふものは私、戀と恨を胸に抱いたまゝ世間から隠れて、かう思つては夜といふ夜を泣いてをりましたの。『あの人は今は何處にゐるだらう？ きつと他の女と一緒に私のことを笑つてゐるにちがひない。この恨みをきつと晴らさう。』そして、夜の明け

るまで泣き通しましたの。

カチエリーナ (グルーシエンカの手に接吻して) 私、あなたのお心がよく分りますわ、ほんとうによく分りますわ！

グルーシエンカ それからはお金を溜めることに身を打ち込み、同情も涙もなくなり、私は強い女となりましたの……ですけど、さうかと云つて、ほんとに理性の勝つた女にはなりきれませんでしたわ。やはり時には齒を食ひしばつて、五年前の哀れな女と同じやうに夜になれば泣いてゐましたの。

カチエリーナ あなたは矢張りその美男の士官を今でも思つてゐるのですわ、その他ほかの人をあなたは思はなかつたんですわ！

グルーシエンカ あなたはあの人のことを辯護なさり過ぎますわ。お嬢様、あまりお察しがよくつて……で、私、自分の胸の中の恨みだけは大事にして置きましたの……ところが突然、私、あることを耳にしましたの。神様からのお告げを！ ムッシャローギッチが鰥夫やもめになつてしまつたのですわ。私が五年間泣いたり怖おそつたりして待つてゐたのも無駄にはなりませんでした。あの人は今鰥



夫なんです、あの人は歸りましたの、あの人は私に會ひたがつてをりますの。「神様、私はあの人の方へ頭を下げてまゐりませうか？ 私はそんな恥知らずでございませうか？」私、さう考へましたの。そして私は思ひ切つてしまひましたわ！……私がドミートリイを利用したのがその時なのです。

七四

カチエリーナ あなたがドミートリイを利用なすつたんですつて？

グルーシエンカ いたづら心からなんですの……憂さ晴らしに、そして他の人と出来合はない用心にですの。(カチエリーナとイザンと眼を見合はす、グルーシエンカそれに氣付いてもその儘話を進める) お爺さんのフォードルまでも私を追ひかけましたわ。つまり私は二人を玩具にしたんです。……ですけどサムソノヴの意見には従はなければなりませんでしたの、サムソノヴは、二人の内一人を選ばなら、年寄の方を選べ、最もこれには、お前と結婚すること、お金をお前にやることといふ條件がついてゐる。ドミートリイとは關係を結ぶな、絞りとくとも何も無いからね。」といふのです、それはさうですよ、ですけどお金が何でせう、お金なら私持つてゐますわ。それにドミートリイは私の氣に入つてゐるんですもの。……男がよくつて、力があつて、熱がありますもの、あゝ

私 口惜しくなりますわ！……ムッシャローギッチがモークロエの宿屋で私を待つてゐるのが……

カチエリーナ あなた今夜お立ちになつて？

グルーシエンカ もう時間ですの？……ああ！ 何人が私の胸の中のことか分りませう！ 私、あの人と會ふために一番綺麗な着物を着てきたのですわ。けどあのドミートリイ、あの人私が出発してしまつたのを知つたなら……初心な可愛相なミーチャ！ 私があの人から離れたなら、私があの人一人を置いて行つてしまつたなら、あの方は一體どうなるでせう？……だけど、一體どういふ譯でせう？……ね、アリオーシャさん、私あのポーランド人を戀してゐるんでせうか？ 私、あの人を許さなければならぬんでせうか？

アリオーシャ 貴方はもう許したのです。

グルーシエンカ それで私、そこへ行くんですの？……ですけど、若しこれが愛情があつて行くのでなかつたら、復讐のために行くのですわ。私、あの人を誘惑してやりますわ、氣違ひにしてやりますわ。そして今日はあの方が泣き通すやうに、あの土地に置き去りにしてやりますわ。

(グルーシエンカは長椅子の方に行き布團に頭を埋めて泣く)



カチエリーナ

七六

(グルーシエンカの側に腰をかけ腕をとつて) いけませんわ、グルーシエンカさん、あなたも何日かは前の不幸も忘れずし、もつと幸福にもなりますわ。……さあ、ね、二人とも涙を拭きませう……さあ、あなたの優しい肥つた手を下さいな。私ね、その手を見ると嬉しくなりませうから、もつと接吻したいんですもの。……可愛い小鳥のグルーシヤさん！ もう二人ともそんな妙なお話はやめて、真直な道を行きませう。ね、私達は善良な寛大な女となりませう。

グルーシエンカ

いゝえ、私は悪い女ですわ、善良な女ではありませんの。だつて、私はドミートリイを笑つてやるために自分の戀人にしたんですもの。私はドミートリイを絶望させてしまつたんですもの。……

カチエリーナ

だけど、あなたは今はその事が悪いとお思ひになつたんですもの。

グルーシエンカ

私自分がゐなくなるからですか？

カチエリーナ

あなたがあの方に悟らせませう……

グルーシエンカ

あの人があなたを愛してゐることを？

カチエリーナ

(ちつと耐へて) いゝえ、あなたには他の戀人があること、すべてが皆冗談にすぎなかつたことをですわ。

グルーシエンカ

まあ、お嬢様、それこそあの人はどんなに苦しむことでせう！ あなたはあのミ-

チヤの苦しむのを御覽になりたいのでございますか？ あなたは私をそれほど残酷な女と思召してゐらしつて？

カチエリーナ

だつて、あなたは私にお約束なすつたでせう……

グルーシエンカ

まあ！ いゝえ、いゝえ、私、何もお約束なんかしませんわ。私があなたにお約束したなぞとおつしやらないで下さいました。何事も頭のなかでおまじめになつたのは、あなた、

カチエリーナ・イヴーノヴナさんですわ。

カチエリーナ

では私、あなたの仰しやつたことが分らなかつたのでせうか？ あなたが先刻仰しやつた……

つた……

グルーシエンカ

私、何と申しまして？

カチエリーナ

あなたがそれだけの賠償をするつて……

グルーシエンカ

よろしう御座います……結構ですわ……私が先刻何か自分の知らない事をあなた



にお約束したならそれで結構ですわ。あのドミートリーのやうな男を好きになることは容易ぢや出来ませんわ。ドミートリーは或る晩、まる一時間、すつかり私を喜ばせて呉れましたの。では若しあの人がもつと私の氣に入りましたなら？……私ね、ほんとうに移り氣な氣まぐれ女ですの。(カチエリーナは口惜しがつて身をひくとグルーシエンカは優しく寄り添ひ) 私の心はやさしう御座いますの、あなたも御存知ですわね。私ね、あの可愛相な男が、私の心得違ひから受けた苦しみを思ひますと……若し私があの人に同情がありましたら、どうなりましたでせう？

カチエリーナ (もう耐へ切れずに) あなたは私がこの上まで我慢するものとお思ひですの？

グルーシエンカ あゝ、あなたもとう／＼私を愛して下さらなくなりましたのね。本當に善人であらつしやるあなたまでが！ あなた御免遊ばせ……(グルーシエンカはカチエリーナの手をとる。全く當惑し切つたカチエリーナはなすが儘になつてゐる) あなたの可愛いお手を下さいました。あなたは三度私の手に接吻して下さいましたわね。私からあなたにお返しするためには、私はあなたのお手に三百ぺんも接吻しなければなりませんわ。……それはさうと、一體私達は、他人様ひとさまが約束も條件も無しに私達の考へてゐる事を實行して下さいればいゝと思つてをりませうか？ 一體皆さんが私達

にあの私達のドミートリーをお任せになつて置いて、そして皆なが私達を放つてお置きになることが、私達を幸福にすることになるのでせうか？ 如何でせう？ ねえお嬢様！ まあ何といふお可愛いお手でせう！……あゝ！ 私の天使様、あなた御存知であらつしやいますか？……私はあなたのお手に接吻したくはございませんの！

(グルーシエンカはカチエリーナの手を不意に落す)

カチエリーナ (容子を整へ直して、アッショーシャに) アレクセイさん、この人をあちらへお連れなすつて……

グルーシエンカ カチエリーナ・イヴーノヴァさん、あなた、よくおぼえてゐらつしやいました、あなたは私の手に接吻なすつて、私はあなたのお手に接吻致しませんでしたことをね。

カチエリーナ 失禮な！

グルーシエンカ あゝ、あなたは私を引き止めようと思ひなすつて、皆さんもその用意をなすつたんでせう。あなたはチョコレート一杯で私を瞞さうとなすつたんでせう！ (笑ひ、けて) 私、このことをドミートリーに話しますわ。あの人も嘸笑ふことでせうよ！



カチエリーナ 早く出て行つて下さい。汚らはしいー

八〇

グルーシエンカ おや、汚らはしいんですつて？ ちよいと！ 生娘風のをばさん。あんたはね、ある晩、ある美しい士官の處へ、たつた一人で、自分の操を四千ルーブリで賣りには出掛けませんでしたかしら？ (カチエリーナはグルーシエンカに向つて烈しい容子を示す。イザンはカチエリーナを引きとめる。グルーシエンカは笑ひ乍ら) いつかの晩、酒屋で酔はらつたドミートリイがあんたの情事を私に聞かせて呉れましたわ！

アリオーシャ (グルーシエンカを連れ出し乍ら) さあ、すぐ歸つて下さいー

グルーシエンカ (アリオーシャに) え、何？ ちよいと？ 今の幕はよかつたでせう。お嬢様は一芝居打ちたかつたんです。え、慥かにお打ちになりました！ さあ、それでは私はモークロエへ立ちますわ！ あゝ、酔つたまゝで！ では、どなたも……アリオーシエンカさん、御機嫌よう、ドミートリイによろしく仰しやつて下さいな。……私ね、あなたが私のことを姉さんて云つて呉れたことを忘れませんわ。……ではね、今の話の士官さんに、グルーシエンカはあの人を一時間しか愛さなかつたつて、けどそのことは一生あの人胸に残るからつて云つて下さいよ！ (グルーシエンカ退場)

## 第五 齣

カチエリーナ。イザン。アリオーシャ。

イザン (カチエリーナに) 世間見ずのあなたの想像、無暗とセンチメンタルな計畫の結果がこれです！ どうです、あなたはあの小娘を見ましたか？ あの女はあなたを鼻であしらつてました。

第一、あなたは嫉妬してゐるぢやありませんか！

カチエリーナ (兩手で頭を押へ、涙は無く、あへぎながら) 私、恥かしうございます……(イザンとアリオーシャは黙つてカチエリーナを見てゐる。間) 皆さん、どうか、お引取り下さいました。私、ほんとうにお恥かしう御座います。……(イザンとアリオーシャは奥の方へ身を引く) あッ！ お待ち下さい。……(カチエリーナ立ち上る) 私、あの人を愛してゐるのやら、ゐないのやら、もう分らなくなりましたの。……(アリオーシャ何か云はうとする) ですけど、一つの決心だけはつきましたの。かうなんです。どんなことがあらうと、あの人があの人と結婚するやうなことがあらうと、私、決して、



決して、あの人を見捨ては致しません！ 私、いつもあの人の上に目を注いでをりますわ、見張つて居りますわ。いつかはあの人にも私の値打ねうちが分りませうから、それだけの決心ですの。そしてこれが私の生涯ともなりませう。……(イザンの方を見ずに、途切れ途切れの聲で) どうぞ、イザンさん、私の云ふことを認めて下さいました。

(カチエリーナは項垂れて獻敬する。イザン後を向く)

アリオシヤ カチエリーナ・イヴーノヴナさん、僕は先刻、あなたがドミートリイ兄を助けなければならぬと云ひましたが、……あれは僕の間違ひでした。僕には分らなかつたんです。……あなたには餘りに苦しんでゐますもの。……そんなことは逆も出来ない事ですもの！

カチエリーナ (つゝましく) いゝえ、なんでもありませんわ、なんでもありませんわ……僅かな勞力ですもの……眠りのない夜……それも過ぎてゆきますわ……あなたやお兄様のやうな二人のお友達さへあれば、私は氣強う御座いますわ。……

イヴン (少しかすれ聲で) 折あしく、僕は今夜マスクワへ行かなければならぬ。  
カチエリーナ (顔色を變へたが我慢して) 今夜、マスクワへ？

イヴン どうしても。

カチエリーナ そんなことはおつしやいませんでしたわね。……少し突然ですわね。……  
イヴン もうこの上延ばす事は出来ません。

カチエリーナ あなたが何も私にお話しなさる義務はありませんけど……さうしてあなたの御決心さへつけばですけど……で、何日頃お歸りですか？

イヴン わかりません。

カチエリーナ さうですか、では、……さよなら。

(沈黙。アリオシヤは一言も云はずにイザンとカチエリーナを見てゐる。カチエリーナは左手に動かずに立つ。イザン静かに近寄る)

イヴン では、さよなら、カチエリーナさん……僕は今、困難な務と良心の修練との中にあなたを置いて行きますよ。(一層熱心に) どうかあなたの生涯をあなたの美德の默想に用ひて下さいまし。そして最後に、自分が慰められたと感ずるに十分なだけの、美しい光榮を持つことを希望しますよ。



カチエリーナ

(緊張して、唇を震はせて) 良い機会ですわ。イヴン・フォードロギッチさん……私はあなたの助を藉らずに私の生存の目的を達したいと存じますの……私にもやはり無暗と折れない意志が御座いますからね。

(イヴン五六歩出口の方へ進む)

アリョーシャ イヴン兄さん! 出発をやめて下さい! 凡てが誤解です……あなたは出発してはいけません!

イヴン しかし僕はもう此處に用はない。

アリョーシャ カチエリーナさんに云ひ直しをする時間を與へて下さい。

イヴン お前はカチエリーナさんが決心をしたと云つたのを聞かなかつたのかい?

アリョーシャ けど、あれは一時の發作です。

イヴン どんな詰らない言葉にも永久に責任を持たなければならぬよ。

アリョーシャ カチエリーナさんに云つて下さい。……  
イヴン 僕は僕のいふだけの事は云つた、そして僕は永久にお別れするんだ……

アリョーシャ

(絶望して、カチエリーナに向ひ) あなたは兄をあつた儘で立たせますか?……イヴン兄さん、カチエリーナさん、僕がお願いします……あなた方はたゞ滅茶苦茶に争ふために自分の力を使ひたいのですか? あなた方は眞實といふものを受け入れないのですか?

カチエリーナ (氣に支へて) 眞實ですつて?

アリョーシャ 僕は先刻から此處にゐて、あなた方の顔にその眞實を探してゐるんです。あなた方は眞實に背を向けて争つてゐるんです。つひには誰かがその眞實を云はなければならぬのです! まあ聞いて下さい……どうも僕は説明が下手で……それに、こんな様な場合にあなた方双方の行爲を決定するなぞといふことは、僕には出来ないのだが……僕も或はあなた方の感情を害すかも知れないとは知つてゐます。……で僕の考へでは、ドミートリイ兄さんが先づイヴン兄さんの手を取つて、それからカチエリーナさん、あなたの手を取り、双方の手を握らせるのに越したところがあるまいといふのです……カチエリーナさん、僕にはどうも、あなたがドミートリイ兄を愛してゐないやうで、あなたの愛してゐるのは、この、イヴン兄のやうに見えるのです。

カチエリーナ (憤然として) あなたはどうかしてゐらつしやるんです!



アリョーシャ あなたは耐へてゐるのです。あなたはドミートリイ兄を愛しようとして苦しんでゐるのです。そしてあなたはイヴン兄を愛してゐるからこそこの兄を苦しめてゐるのです。

イヴン いや、お前は間違つてゐる。カチエリーナさんは未だ曾て僕を愛したことはない。カチエリーナさんは先刻要求した僕の友情なるものに、敢へて執着があるのでないんだ。カチエリーナさんは最初の出會にドミートリイ兄貴から受けた侮辱を僕の上に返さうとして僕を手なづけたに過ぎない。だから何時でも兄貴との愛情ばかりを僕に話してゐたよ。

カチエリーナ (苦惱して両手をイヴンに差しのばし) イヴンさん!

イヴン いや、僕はあなたの手をとらない。僕は今、あなたを許さうとは思はないから。あなたは故意に僕を餘りに苦しめましたね。……それといふのもあなたはドミートリイ兄貴を愛してゐたからです! 兄貴はあなたにとつて、あなたの犠牲的精神、道徳的精神の證據として必要なのです。ドミートリイ兄貴が屈従すればする程、あなたは自分を偉大だと思ふのです。兄貴の罪は皆あなたの爲には利益となるのです。あなたがあれを愛してゐるのはさういふ有様です。寧ろあなたの自慢なんです!

カチエリーナ (悲しげに) イヴンさん……

イヴン しかし、あなたにも自分の力とドミートリイ兄貴の力との計算に誤算があることがありませう。そしてそれが僕の復讐となるでせう!

アリョーシャ おゝ! 兄さん……

イヴン もう一言もいふな! お前も来い……(イヴン退場)

## 第六 齣

カチエリーナ。アリョーシャ。

アリョーシャ あゝもうイヴン兄は永遠に歸らないでせう! これも僕の過失でした。僕がイヴン兄を佛らせたのです。許して下さい。イヴン兄も不正であり、悪くもありました。カチエリーナさん、どうかイヴン兄を許して下さい。僕の二人の兄を許して下さい。二人の身體の中には狂的な野蠻な本能ともいふやうなものがあるのです。其處には神の御心も恐らくは宿つてはをりますまい。それがカラマーゾフ家の魂なのです!……復讐をしないで下さい。二人に對して何事も計畫



せすに置いて下さい。僕が二人を見つけて、二人に話をしませう。僕が二人の胸に絶望の這入らぬように盡力します！ 勇氣を出して下さい。カチエリーナさん！ ね勇氣を出して下さい。神様はあなたを護つて下さいますよ！ (アリョーシャ退場)

### 第七齣

カチエリーナ一人。次に女中。

前齣中カチエリーナは動かずにゐる。アリョーシャが出て行つた時、両手を顔にあてたまゝ少時ぢつとしてゐる。それから靜かに長椅子の方に行き腰を下し、膝に兩手をつき、腮を掌にあてる。女中がはひつて来て卓子の上を片付けてから一たん出て行きランプを持つて再びはひつて来る。そして窓掛を下して出て行く。呼鈴の音がする。カチエリーナ身震ひして動かずにゐる。扉のあく音がして一步廣間に踏み込んだドミートリイは駈けるやうにして現はれる。カチエリーナ立ち上がる。最初、薄明ウラカの中でドミートリイはカチエリーナに氣がつかない。自分の周圍を見廻し、別の部屋へ行かうとしてカチエリーナの前に行き、頭を下げて後ずさりをする)

### 第八齣

カチエリーナ。ドミートリイ。

ドミートリイ (低い聲で) グルーシエンカは何處にゐるんだい？

カチエリーナ 恥知らず！ 極悪人！……あなたはあの女に、居酒屋であたし達の秘密を皆しやべつたんですね！

ドミートリイ (深い悔恨の情を表はして) 何しろひどく酔つてはゐたし……ボヘミア女が歌をうたふし……しかし話してゐるうちに俺も泣くし……グルーシエンカも泣いてしまつて……

カチエリーナ あなたは、何よりも美しい日の記念を穢してしまつたんですわ。あたしはもうあの日を呪ひます！

ドミートリイ 俺もあの日を呪ふ。

カチエリーナ さういふ風に、あなたはいつも、あたしがあなたの處へお金をもとめに行つたといふので、あたしを輕蔑するのですわ。……あなたは何も了解しなかつたんです。あなたは貴いあの



何を、少しも了解することが出来ないのです……あたしはあなたの背信を黙つてゐたかつたんです。今朝はまだ、あなたのことを何もかも許さうと決心してゐたのでした。ですけど、あなたの輕蔑を許すのではありせんわ。それは私の力以上なんですもの。

ドミートリイ (野性の歡喜を以て) とうとう云つたな、さあ俺の敵になるがいゝ!

カチエリーナ 御用心なさい。……あなたは私が、あなたを犠牲にした事を御存知ないでせう?……

ドミートリイ お前、グルーシエンカをどうかしたのか?

カチエリーナ ミーチャ、おえらびなさい。……まだ時間はありますよ。……二人に一人をお選びなさい。……善か悪か。

ドミートリイ 俺は選ぶことは出来ない。戦はもう澤山だ! 俺は恥の中に轉がりたい……俺に同情して呉れ、カーチャ、俺はもう……今朝から金策で金貸の處を駈け廻つてゐたのだ……どいつもこいつも貸してはくれない! しかし俺はお前の三千ルーブリは返済するよ。シベリアへ行かないか? 俺にはお前の愛情よりも指環の方が有難い。俺はお前には返済するよ。……では左様なら、御立腹の御婦人! やはり、左様なら! 俺の愛人! 俺はお前の自尊心を

我慢しないでも済むやうに、それからお前をもう愛さないために自分の姿を消すからね。……ドミートリイを輕蔑しちやいけないよ。いいかい、ドミートリイのために泣いてくれるんだよ!

さあ、俺はお前の足に接吻する……グルーシエンカは何處にゐるか云つておくれ。俺が飛び廻つてゐる間に、彼女は逃げてしまつた。到る處を探して見たが、誰も彼も俺をだましくさる。あの女が此處へ來たのは俺も知つてゐる。あなたも御一緒にどんな御計略を運めらしましたね?

カチエリーナ (齒をかみ乍ら) あの女は私を侮辱したんです。私を愚弄したんです。

ドミートリイ あゝ! あゝ! あの惡魔め! 無禮者! お前には本當に暗劍殺だ。お前がまた容子振る方だからなあ!……彼女はまだ此處にゐるのかえ? え、返事をおし! (カチエリーナ黙つてゐる) あれは何處にゐるんだ。俺はお前に神様の御名に於いてお願ひする。あれが何處にゐるか云つておくれ。(沈黙) あれは出發したのかい? (カチエリーナ首肯する) 俺の親父の處へ? ぢや、あれは三千ルーブリの金を取りに親父の處へ行つたのかい? さうかい? さう云つたかい? そのことを自慢してゐたかい? 俺は親父が今夜あの女の來るのを待つてゐるのを知つてゐる、……(カチエリーナは頑固に黙つてゐる。ドミートリイは聲を變へて烈しい苦惱を表はして) あゝ! 迎も



我慢が出来ん！……しかしお前は決して偽りをいふ女ではない。……たゞ一言云つておくれ。……たとひお前が俺の敵であつたところで、カチエリーナ、俺はお前の言葉とお前とを信用するのだから……ね、お前はグルーシユンカが三千ルーブリの金を取るために親父のところへ出かけることが出来ると思ふかい？

カチエリーナ (内心の闘争ののち、辛うじて、しかし決然と) あたしは、あの女には出来ると思ひますわ。……

ドミートリイ (飛び上つて) 有難う……俺も行く！

(ドミートリイ走り出で、背後の扉をしめる)

カチエリーナ (自分の今したことに不意に気がついて) ドミートリイ！…… (扉を開き、戸外に馳せ出す。)

ドミートリイ、ドミートリイと呼ぶ聲が聞える。間もなく顔色を變へ、両手を振り反らせて歸つて来る) おお！……ドミートリイは殺さうとしてゐる！ 殺さうとしてゐる！

(幕)

### 第三幕

同日の夜。フォードル、マゲロギツチ宅。白色金光の大廣間。贅澤と荒廢とが入り雜つてゐる。小さなランプが正教の聖像の前に點つてゐる。左方、前寄りに一つの窓。その奥に、庭を見下ろす扉口。正面奥に事務室に通ずる扉口。右方、木造廻廊に通ずる階段の圍ひの下に扉口あり、廻廊の上にも室が列んでゐる。

#### 第一齣

ドミートリイ。スマルヂャーコフ。

(幕開くと舞臺空虛。左手の扉が烈しく開く。ドミートリイ廣間を走り抜けて右手扉口から消える。ドミートリイとスマルヂャーコフが登場する前から烈しく早口に話す聲が聞える)

ドミートリイ お前はあの女が何處にかくれたか俺に云つて呉れるだらうな？



スメルチャーコフ 私は旦那に誓言します。グルーシエンカさんは此處にはをりません。そのことは  
おわかりでせう。

ドミートリイ 来たことは来たのか？

スメルチャーコフ いゝえ。

ドミートリイ ぢや、何時来るだらう？

スメルチャーコフ 夜半前は駄目です。あなたはお出掛けにならなければいけません。

ドミートリイ あの何は何處であの女に會ふんだ？

スメルチャーコフ 此處なんです……旦那はぐづくしちやみません。若しやあの方があなた  
を見つけてもなかつた日にや。

ドミートリイ あの女は柵から這入つて来るんだらう？

スメルチャーコフ さうです。

ドミートリイ そして板石をたたくんだな。

スメルチャーコフ それはもう申し上げましたでせう。さあ、どうか、お歸り下さいね、どうぞ。

ドミートリイ 始めに、少し間をおいてコツコツと二度やつて、それから三度続けさまにコツ！

コツ！ コツ！ とやるんだつたな！ さうだな？

スメルチャーコフ さやうです。さあ料理場からお出下さいよ、そして小さい扉から外へ。

ドミートリイ (奥の方へ出てゆきながら) 夜半まで待ちぶせだぞ！

(スメルチャーコフはドミートリイを押し出し室内へ歸る、途端にイザン左手の扉口より登場)

## 第二齣

スメルチャーコフ。イザン。

(イザンは何も云はず舞臺を横ぎつて、スメルチャーコフを避け、階段を上らうとする)

スメルチャーコフ 私の立場も全く苦しくなりましたよ。イザン・フォードロギッチ様！ 私はもう生き  
てゐられませんや。あなたのお兄さんは何をなさるか分からない方です。今も此處へ氣違ひのや  
うになつて飛び込んで来て、道具を抛り出すやら、部屋中を探し廻すやら、仕舞には私をピスト  
ルでおどかして……



イヴン お前もまた何だつて一緒になつてたんだ？

スメルチャーコフ 向う様で、私の方を此處へ引っぱり出したんです。私は口應へ一つせず黙りこくつてゐたんです。それだもんですから、向う様で私の事をすつかり信用してしまつたんです。イヴン それはどうもお氣の毒だね。

スメルチャーコフ 又あなたくらゐ用心深い方でもものは世間にはありませんな。イヴン 俺はお前を庇護つてやるよ！

スメルチャーコフ 大旦那は朝から晩まで私をお苦しめなさるし、若し今晚グルーシエンカさんでも來なからうものなら……

イヴン あの女は今夜來ないぞ。

スメルチャーコフ あなたはどうして御存じなんです？

イヴン 知つてゐるんだ。や、お寢み！ 今夜は何ももう食べないよ。

スメルチャーコフ では明日の朝になると又、どうしてあの女は來ないのだ？ 何時來るんだらう？  
が始まる事でせうな。あの女の來ないのが何か私のせゐでもあるやうに……あゝあゝ！ あゝやつ

て二人共一日一日と逆上上つていきなすつて私の生命迄も持たないやうにしてしまふんだ。私も時々、この苦みを逃れるために死んでしまはうかとさへ思ひますよ……  
イヴン (自分の部屋の中へ入りながら) それで、お前は俺にどうしろといふのだい？ (イヴンが扉をしめる途端に戸外にフォードルの聲が聞える)

### 第三齣

スメルチャーコフ。フォードル。

フォードル (戸外から) おい、スメルチャーコフ！ (大急ぎで入つて来て) スメルチャーコフ！……あれがあすこにゐるぞ……ドミートリイの奴が！……生垣の後方に……木の枝の間にあれの頭が見えた。あれが見張つてゐるんだ……

スメルチャーコフ まあおかけなすつて。息を切らしてゐらつしやる。

フォードル (眩掛椅子に身を投げ込んで) 扉をしめてくれ……グリゴリーを探して来てくれ。はやくグリゴリーを呼んでくれ！



(スメルチャークコフ退場。フォードル汗を拭きながら眩掛椅子の中で獨語してゐる)

九八

#### 第四齣

スメルチャークコフ。グリゴリーイ。フォードル。

フォードル (弱々しい聲で) あゝ……あゝ……来てくれたかい、グリゴリーイ。深切なグリゴリーイ。わしのそばへ寄つてくれ。

グリゴリーイ もう大丈夫でございますよ。旦那様!

フォードル わしにお前の手を貸しておくれ。わしの勇敢なグリゴリーイ、強いグリゴリーイ、わしの守護神、え! わしはお前さへ此處にゐれば少しも恐ろしい事はないんだ。忠實な番犬……  
(グリゴリーイ黙つて人の好い笑を見せる) おい、わしの顔を見てくれ……

グリゴリーイ 畏りました。旦那様。

フォードル 平生のわしの顔を知つてゐるお前が、今のわしを見てどう思ふかい? 赤い目をしてゐないかね? 正しい目付をしてゐないかね?

グリゴリーイ そんな事はございませんよ、旦那様!

フォードル ちや別に變つたところは何處もないかね?

グリゴリーイ ございませんとも、旦那様。

フォードル (安心して、入つて来た時に持つて来て今迄手放さなかつた小さな包をスメルチャークコフに示しながら) これはあの女に持つて来たお土産だ。チョコレート、砂糖焼の巴旦杏、酒精漬の果物……  
(再び苦惱に捉はれて、グリゴリーイに) あゝ、昨夜は實に苦しかった、突然はツと目が覺めてな。どうしたのか自分にもわからんが、魂が喉へひつかゝつて。やっどうも恐ろしかったこと。わしはまだ生きてゐたい。お前にもわかるだらう!

グリゴリーイ 食べ過ぎなすつたのでせう。旦那様は下劑をかけないといけませんな。私などはちよいとやりませんが……

スメルチャークコフ グリゴリーイ、ウシリーフ。下劑をかけるのはいけないなあ。キリスト信者が凡ての悪を直すのにはお祈りで十分だよ。それがいけないといふのならお前は其惡を信仰する人だ。

(フォードルは笑を噛みしめる)



グリゴリー この悪黨を征伐しなければなりませんよ、旦那様、何一つ尊敬するものなどがある  
ものですか。

フョードル さうだ……さうだとも！ お前は美しい靈魂に少しも耳を傾けない！ 丁度あすこの  
お寺のあの老爺のやうに。「嘘をいふ勿れ」とあの老爺が云つたつけ！……ブウ！ 愚人に智識を  
返すためにはあんなお寺や、あゝいふ處の神祕主義を亡ぼさなければ駄目なことだ。それに……  
何といふ汚はしさだ、このロシア……ロシアの悪徳……おゝロシア自身がそれだ。凡てが不潔だ  
……わしは水に頭を漬けたい……おい、晩飯の用意をしてくれ、スメルチャーコフ……ドミートリ  
イか、ドミートリイは悪人だ！ わしは彼奴を捕縛させてやる、それはわしの権利だ……彼奴は  
公然とわしを脅迫したんだ……法律でえものがあるのに……  
(つぶやきながら階段を上り自分の部屋に入る)

## 第五 齣

グリゴリー。スメルチャーコフ。

グリゴリー 今朝、お寺でどうかしたのかね。

スメルチャーコフ プー……馬鹿げ切つてることさ。恥掻きな話さ。

グリゴリー それで長老様もあの人達の仲裁をなさらなかつたんだな！

スメルチャーコフ 大旦那も讓歩しなからうし、ドミートリイの小旦那だつて一步も退かないだらう。  
此處だね、グリゴリー・ヴシリーフ、罪障てえものは……イヴン様はたゞそれ許りを待つてゐる  
んだ。あの人は二人のことを笑つてゐて、二人の費用で自分は御馳走を食べようつてえのさ。あ  
の人は馬鹿ぢやないやね。

(話しながらスメルチャーコフはポケットから化粧道具の箱を引出して、髪に櫛を入れる)

グリゴリー (相圖をしながら) シッ！ いやな奴だな！

スメルチャーコフ (口の中で) あの人は俺のことを下男扱ひにしてゐる……あの人が俺の事を知つ  
てるよりや、俺の方があの人を知つてゐるんだのに。

グリゴリー 何しろお前は自分の弟子をこしらへたんだから、マスクワの聖人と云はれるお前に  
何人かと思ひちがひされるよ。お前が髮油をつけて白リンネルでも着た日にや紳士になるぜ。い



やな奴だな！ だからお前は何さ……

スメルチャーコフ (食卓に白布を掛け乍ら) おれだつて育て方によつちや、別な人間になつてゐたがなあ。

グリゴリーイ 育て方によつちや！……ふむ私生兒が！

スメルチャーコフ (身慄ひしながら) お前はそんな事を皆に話しやしまいね？……おれも自分が私生兒だつてことは能く知つてるんだ。マスクワにゐた時にや、世間の奴がおれの事を寄つてたかつて種々噂をするし、此の土地へ來ても市場などで、おれの目の前で、おふくろの丈がニアルシー又あつて、髪にはいつも泥がこびりついてゐたまで大きな聲で話してやがる。

グリゴリーイ きいてゐてお前は苦しいかね？

スメルチャーコフ 苦しかねえが、恥かしいさ……おれは自分が一個のスメルチャーコフだつてえことを能く知つてゐるんだ……おれの小さい時には皆がよくおれを殴りやがつて……

グリゴリーイ その時分のお前の楽しみてえのは猫をつかまへて來て、大騒ぎをしてその猫を生埋めにすることばかりさ……

スメルチャーコフ おい、グリゴリーイ、ヴシリーフ、お前は、おれをずるぶんひどい目にあはせたなあ……

グリゴリーイ お前はよく福音書をかれこれ論じてゐたつけ！

スメルチャーコフ お前には答辯の出來ねえ理窟のある異論を俺はいつも説破してやつたつけ……いつだつたか矢張り異論を説破してやつた後のことさ、俺が最初の癩癩をやつたなあ……俺は自分が癩癩病で、皿洗ひの男に過ぎねえことをよく知つてゐる……(ナイフを食卓へ切りつけて弄んでゐたが、突然深い太息をついて) あゝあ！ いくらかの金せえおれのポケットにあればなあ……

グリゴリーイ どうしようてんだい？

スメルチャーコフ もう疾うの昔に此處を立ち退いたらうに。

グリゴリーイ そして？

スメルチャーコフ マスクワで料理屋を開業したね、どこのどいつだつておれ位な料理をこしらへる事が出来るもんか。

フォードル (部屋から) 支度はいゝかい？



スメルチャーコフ (グリゴリーに) さあ、行つてくれ。旦那はおれの外についてゐてもらひたくないのだから。(スメルチャーコフ左手から出てゆく)

フォードル (下りながら、グリゴリーに) お前まだゐたのか、泣真似をするために、え？ ぢいさん？ 二人であるスメルチャーコフを殴つてやらう、きつとだぞ！

(グリゴリーはぶつ／＼云ひ乍ら出てゆく、スメルチャーコフ挽肉コロツケを持って道入つて来る)

## 第六齣

フォードル。スメルチャーコフ。

フォードル (食卓のそばへ寄つて) おゝ！ おゝ！ 魚の挽肉コロツケかね！ 誠に結構！ 一段と腹が鳴り出すよ。實際、魚の挽肉にかけてはお前は名人だからなあ、スメルチャーコフ……時に、何は……イヴンは？ 下りて来るかね？

スメルチャーコフ いゝえ、いらつしやいますまいよ。

フォードル その方が好都合だ……お前な、二階へ行つて、あれが何をしてゐるか鍵穴からのぞいて見て来てくれ。(スメルチャーコフ靜かに上つてゆき鍵穴から内部をのぞく) どうだ！

スメルチャーコフ (下りて来ながら) 何もしておいでぢやありませんよ、椅子にかけてぢいつと前を見ておいでですが。

フォードル 奴は考へてゐるな、計畫してゐるんだ、苦しんでゐるんだ……何事も自分の思ふ通りに運ばんものだからなあ。イヴンはチェルマーシニアへ行くだらうか？

スメルチャーコフ 私は存じませんが。

フォードル ああ腹が空いて耐らん、切つてくれ！……(挽肉に見入つて) どうだ、此黄金色の工合！ 汗氣を含んだ按配！ (食べ始める) さうだ！ グルーシユンカが手紙に書いてよこしたのは夜中といふんだな？ さうだらう？ 酒を飲まう……何だお前、わしの顔を見てゐるのか？……わしに艶はないな、どうだい？……驚くよ、わしのこの鈎鼻と二重腮とで、わしがデカダンの年寄りのローマ人に似てゐるといふんだから……それで、たうとう新しい襟巻を買はされてさ。……しかしわしはあの女には凡てを解放するよ。あれは、こんな風に少しおど／＼しながらやつて来ることだらう……。『たゞ今、フォードル・パヴロピッチ……あなた、あたしを待つてゝ下すつて？』や？、



まつたくわしは待ちこがれてゐるんだ！ わしは猫のやうにあれに惚れてゐるんだ！……

スメルチャーコフ 時に、旦那様、あの三千ルウブリのお金はどうなさいましたね？ あの三千ルウブリの包を何處にお置きになりました？

フォードル 布團の下さ。

スメルチャーコフ 飛んでもない！

フォードル お前さう思ふか？ ちや、お前そうツと上つて行つてあの包を持つて来てくれ。（スメルチャーコフその通りにする。フォードル、イザンの部屋の扉を指して）しっ、靜かに……（スメルチャーコフ下りて来てフォードルに包を渡す）

スメルチャーコフ あ、その聖像の背後が何故いけませんでせう？

フォードル 成程！ いや、これや素敵だ。聖像の背後とは！ あすこならドミートリイの奴がいつ迄探し廻らうと…… グルーシエンカはわしがあの聖像の背後から此小さな土産物を取り出して來たらさぞ笑ふことだらう！ ではと…… 燈明をお消し。何人か又今夜つけるだらう。わしが油に火をつけるのは明るくするためで神様にさゝげるのぢやないんだからなあ…… あゝあゝ！（酒を

飲む、そして烈しく喉を鳴らす）

スメルチャーコフ 旦那様、どうかなさいましたか？

フォードル （いや、つくりなしながら）いや何でもない…… 逆に呑み込んだのだ…… いや實に奇抜だよ…… あゝ、えツ、聖像の背後とは實に……（長い間、腹をゆすつて笑ふ、イザンは騒ぎに身を引かれて自分の部屋の敷居に現はれる。フォードル急に笑を止める）何だい？ 何か用かい？ え？

イザン 何でもありません、たゞお父さんの笑聲がきこえたから。それだけです。

## 第七 齣

フォードル。イザン。スメルチャーコフ。

フォードル お前晩飯はどうだな？

イザン え、今澤山です。しかしお邪魔でなかつたらお仲間入りをさせよう。

フォードル （口の中で）どうでも。（イザンはフォードルの前に腰を下ろす。フォードルは黙つてしまつて、無暗と食べる）どうしたんだ、ひどく黙つてゐるぢやないか。



イワン あなたの健啖に感嘆してゐるんです。

フォードル スメルチャーコフ！ さあ、もうおしまひだ！……（スメルチャーコフ食卓の後片附をしてゐると、フォードルはイワンに向つて）お前、アリョーシヤに氣の毒なと思ふかい？ わしは今朝、アリョーシヤの坊さんの前で、少し云ひ過ぎたことを後悔してゐるんだ。

イワン 本當ですか？

フォードル お前はわしの事を信じないのかね？ どうもさうらしい容子だな。お前はわしを道化者だと思つてゐる……おや、バラームの驃馬奴（註スメルチャーコフのこと）が酒を背負つて戻つて來たぞ。（スメルチャーコフ卓子の上に瓶とコップとを置き放心した様に、少し離れる）どうだ、お前もこの古いコニャックを一杯やらんか？ わしはお前がコニャックの好きな事は知つてゐる。お前はあの水ばかりがぶく／＼呑む愚人達の仲間ぢやない。コニャックを愛するためには、どうしても精神（エスプリ）でえものが必要だな。つまりおれ達仲間が精神家だ、さうだらう、イワン？ そしておれ達は一生、背中を温め、腹を充たしそしてコニャックを呑み續けて行くんだ。さう決めなければならなかつたのは神自らだ……

イワン さうですとも！

フォードル （眩をついて）イワン！……かう云ふ問題でわしはいつも苦しんでゐるんだ……この年寄の不具者を笑つちやいかんよ。お前はわしを愛しちやをらん、又、お前がわしを愛する何らの理由もないさ……が、しかし、おい、二人だけのところで、わしに云つてくれ、眞面目に、イワン、一體、神は存在するものか？ 即ち有か無か？ え、どつちだ？（イワン黙つて自分の盃を乾す）おい、倅、わしはそれが知りたいのだ。

イワン （眩をつき、眞正面に父の顔を見守りながら）神は存在しません！

フォードル まつたくか？ アリョーシヤは神の存在を主張してゐるが……（身動きもせずに一語も聞き漏らすまいとしてゐるスメルチャーコフを見とめて）貴様、話を盗聞きしようてのか、此ごますりめ。（スメルチャーコフ舞臺の奥に引き下つたが退場せずにある）彼奴、おれ達の話を見かかるとして彼處にゐるのだらう。お前は多分あの男と何か關係があるのだらう。お前、あいつに何かしたのかい？

イワン 何もしやしませんよ。あれはあゝ云ふ風の男なんです。

フォードル ではと……靈の不滅は？ あるものかな？

イワン ありません。



フォードル (内心大喜びで) そりや、お前ほんとに云ふのかね、イヴン？ お前、わしの事をからかつちやいかんぜ。まさか、お前も、餘命幾何もない哀れな老人をだまさうとはすまいな、え？ 不滅無しか、不滅の破片もなしか。

イヴン 少しも。

フォードル と云ふと。絶対無か、それとも單位の一部分はあるのかい？ 一部分の一部分もないのかい？

イヴン 絶対無です。

フォードル (もう堪へ切れずに) すると、……さうすると……イヴン。凡ての事が許される譯か？  
イヴン さうです。凡ての事が許されるのです。お父さん。

フォードル シッ！……そんな事をいふな。お互のために黙つてゐなくちやいかん……やっ、お前の健康を祝す！ (二人乾盃する) イヴン、わしはな、お前がわしの前に腰を下ろして、二人で顔を合せて、友達のやうに一緒に呑んだのが實に愉快だ。

イヴン 私もです。

フォードル (片足を卓子にのせて) 人てえものは此世にあれば、かう云ふ愉快を味へるものだよ！

イヴン (辛うじて) さうです。

フォードル わしだつてまだ若い、さうだらう、まだ二十年位はこのままでゐる積りだ。しかし、いつかは年も取らうし、だんだんと好かれなくなるだらう。さうなれば、あの可愛い女達も、今迄のやうに喜んでわしの處へ來ることもなくなるだらう……その時になればだ、わしには一コベツクの金でも必要になつて來るんだ。

イヴン ごもつともです。

フォードル (すつかり酔つて) だからだ、わしはお前に、わしが今迄に自分ばかりのためにしか金をためず、これからもさうだといふことを知ってもらひたいのだ。わしは出来るだけ永く、汚い生活を送りたいのだ。汚い生活、至極結構だ……わしはアリーコーシャが想像してゐるやうな天國なぞへは行きたくない。天國なぞは精神家のゆく處ぢやないさ……(片手を酒壺にかける)

イヴン 大分もう上つたやうですが。

フォードル フン！ ぢや其處に置くさ。もう一杯、一杯きりだ。大丈夫、こんな小さな盃一杯で



死ぬやうなこともあるまい。(イザンの注いだ自分の盃を引き寄せて) お前、女達の處で殺されたフ・  
ン・ツ・インの話を知つてゐるかね?

イザン 知りたくもありませんね。

フォードル さうか。では、わしがお前に、墮落女のエリザベット・スメルチャーシチャの珍らしい話を聞かせてやらう……まあ、その女が下着一枚着たきりで往來を走つたと思ひなさい、可なりひどい姿でゐたが、それでゐて、その女はある、その……何を失はなかつたな……わしは、今迄に醜い女でものを一人でも見たことがない。何人にもそれだけの美しい處がある、これがわしの主義なのだ。性のたゞ一つの行爲が既に偉大なものなんだ……お前がチェルマーシニアに行けば、わしはお前に或る娘を見せてやる、その娘は跣足だがな……ところで、ある夏の晩、五六人の飲仲間と晩飯をやりに入ると、生垣に寄りかゝつて、いたいた草の中でぐつすと寝込んでゐるエリザベット・スメルチャー……

(亂酔したフォードルは、エリザベット・スメルチャーシチャの名を聞いたスメルチャーコフが聴耳を立て、そろ／＼と卓子の方へ寄り添つて來初めたのに氣がつかない。イザンはスメルチャーコフをみる。

ンの目につれてフォードルも恐怖して靜かに背後を向き、自分のすぐ背後にスメルチャーコフが身を屈め、口端に泡を吹いて、痙攣の發作で四肢をふるはせてゐるのを發見する。フォードル話を急にやめる。だらけた微笑が顔に漂ふ。イザンは椅子の上で身體を揺り乍ら天井を見つめる。沈黙)

スメルチャーコフ (憎惡の表情が泣きたいやうな冷笑に變つて) 旦那様、十一時でございますよ……

フォードル よろしい、しかし……おい……あ、さうか……

(スメルチャーコフ靜かに奥から出て行く)

## 第八齣

イザン。フォードル。

フォードル (憤然と、イザンに) お前、何故、わしの話をやめさせなかつたんだ?

イザン あなたが何處迄なさるか拜見したかつたんです。

フォードル 馬鹿! お前はここのわしの家へ、わしを侮辱しに來たんだな。

イザン 私はもう行きます。あなたには酒が物を云はせるんです。



フョードル

もう注いではいけなかつたんだ。さつさと片づけろ！……いやな目付でわしを見つめてゐるな。その目付でわしを探偵してゐるのか、わしを疑つてゐるのか。お前は何か底意があるな……さあ、それを云へ！（イザンは輕蔑して兩肩を上げる）さうだ、お前はいつも黙つてゐる、お前と云ふ奴は黙つてゐる事と、黙つて他人を輕蔑することしか知らん奴だ。さうやつては學者ぶつてゐる。さうでなく、口をきけば、きつと苦蟲を嚙みつぶしたやうな顔をする……貴様にわしを裁判する権利があつてたまるか！ 貴様にわし以上の値打があるか……

（イザンには説明の出來ぬ嫌惡の情が湧く。この時、アリオシーヤ左手より登場）

## 第九齣

イザン。フョードル。アリオシーヤ。次にスメルチャーコフ。

フョードル

（アリオシーヤに）お前、何に來たんだ。わしは何人も呼びやしないぞ。

アリオシーヤ

（側へ寄つて）大層御立腹です、お父さん……

フョードル

（低く、わきをむいて）わしの一人息子、わしの天使になつてくれ。あれを引つばつてつ

てくれ。……わしはあれが恐ろしいんだ、外の何人よりも怖ろしいんだ。

アリオシーヤ

イザンは苦しんでゐるんです。ね、憐れんでおやりなさいまし。

フョードル

（靴の踵をぎり／＼云はせ乍ら）プッ！……おい、スメルチャーコフ、着物を着替へさせて

來てくれ！

（階段を上る、スメルチャーコフ後からつゞく。フョードル、イザンにやさしく）イザン、ど

うか、今夜、チェルマーシニアへ立つてくれ！……え、頼む……（イザンは熱に浮かされたやうに室中

を縦横十文字に歩きながら、頭を横に振る）いやだ？ お前、行かんといふのか？……お前は此處で

見張つてゐたいのか？ グルーシエンカがわしに會ひに來た時に、わしがあれば幾ら金をやるかを

知りたいのか？……そしてお前は、あの金持のカチェリーナ・イヴーノヴナを横取りするために、

ドミートリイの奴とグルーシエンカを逃がさうとするのか？ お前の考や計畫はそれ位のものだ。

ならず者め！……わしはな、氣さへむけば、今の今でもあのグルーシエンカと結婚するんだつて事

を覚えてゐてくれ。カチェリーナ、あれはお前の者にはならん、わかつたか？ え、お前はカチェリ

ーナと一緒にはなれん！……お前にはそんな事は逆も出來んよ！（フョードルはスメルチャーコフを

連れて部屋へ入る）



## 第十齣

一一六

イヴン。アリオーシヤ。間を置いてスメルチャーコフ。

(フョードルがゐなくなると、アリオーシヤは黙つて部屋中を歩き廻つてゐるイヴンに目を止める。そして困惑、羞恥、恐怖に捕へられたやうに目を伏せる。それから何か云はうとする。遠くからイヴンが手を上げて何も云ふなと相圖をする)

イヴン

(自分自身に云ふやうに) もう一時間以上も此處にゐたなあ。二度と再び、此處へ、この空氣の中へ……あの老人を見に……來なければならぬこともあるまい！ 厭な氣持がして折角出立のいゝ氣持が滅茶苦茶になりさうだ。

アリオーシヤ。そんなでも、やつぱり立ちますか？

イヴン。一時間の内には僕も大分遠くの方にゐることだらう。

アリオーシヤ。兄さんは何をしやうといふんです、え、イヴン兄さん？

イヴン。自分自身のために生活するのさ。そして皆惡魔に喰はれつちまへといふのさ。お父さんの

云つたやうに精神的の人間として生活するのさ。……(立上り、拳で卓子の上を打つて) 若しお前が、先刻の僕が忍耐したことを知つてゐたならなあ……お父さんは僕に目で合圖をしたり、肩をたゝいたりしたんだ。お父さんは五十七、僕は二十三だ、そんなに違ひがあるのだらうか？ あゝやつて、自分のしたい三昧の事をしてゐるが、實に愚劣だ！……あゝ、アリオーシヤ、僕が三十歳だつたなら、僕は盃を抛り投げたかも知れん、酒を飲むことを排斥したかもしれん。しかし、三十歳迄、一體何を聴くのだ、即ちお父さんの慾望をか？……お前のやうに自己の目的を知つてゐて其處に眞直に進むことを知つてゐる堅固な人間でない限りは駄目だ。僕も堅固な人間が好きではあるが、アリオーシヤ、お前、僕を愛するかい？

アリオーシヤ。え、僕は兄さんを愛してゐます。僕はあなたに對して了解してゐる或物があるのです。

あなたも二十三歳の他の青年と同じやうな純な若い處があるんです。

イヴン。さうだ。

アリオーシヤ。(微笑しながら) 潑刺たる青年です。

イヴン。さうだ。アリオーシヤ。大人となるてことは恐ろしい。僕は成熟したくない。僕はお前のや



うな青年でゐたい……そして、自己満足を自信しないほど尊い心を自覚する青年でゐたいんだ……あの女の處から出る時も、僕はかう云つた。「僕の若さは凡ての障害に打ち克つたらう。幻滅や反逆の凡ての恐怖が僕を打ちのめして來ても、僕は生きることが願ふだらう。僕の体内の生存慾を消すに十分なだけの絶望などはあるものではない」と云つた。

アリョーシヤ あなたは一體、何の絶望の事を云つてゐるんです？

イワン それを聞いてくれるな。僕は凡てから解放されたんだ、僕はお前に斷言するよ。あゝ僕は解放といふ事がこんな簡単な事だとは今迄思はなかつた。一瞬時にして、僕の生命の六ヶ月は消えて行つた。僕達の年には何人でも意氣壯んだ。そして、どんな物でも不正を吸ひ込むよりは優しなんだ。

アリョーシヤ 時に、兄さんはカチエリーナを愛さなかつたのですか？

イワン さうかも知れん……お前も知つてゐるだらう。何者でも僕に對して暴君的に振舞ふことは出來ないことを。僕は快活のすきな男だ。待つてゐたり、自分で苦しんだりする時間のもてない男だ……チヨッ！僕はまた始めたな！……

アリョーシヤ カチエリーナさんはあなたを愛してゐますよ。

イワン さうかもしれない。

アリョーシヤ では何故あなたは、カチエリーナさんは自分を愛してゐないと云つたんです。

イワン それは故意といつたんだ。

アリョーシヤ あの人を苦しめるためですか？

イワン 苦しむがいゝんだ！

アリョーシヤ 兄さん、あなたには、悲みに夢中になつたカチエリーナさんがドミートリイ兄さんに復讐をすることが出來たことをお考へですか？

イワン 僕がドミートリイ兄貴の番人だと云ふのかい？

アリョーシヤ それぢや……何の返事になります……

(スメルザヤコフ、フォードルの着物と上靴を事務室へ運びながら、舞臺を右から左に横ぎり出て行く。二人の兄弟はスメルザヤコフを出させるために黙る)

イワン それぢや、カインの返事だといふのかい？……しかし、僕は僕の一生をあゝの馬鹿もの共の



監督に費すことが出来るかい？ 僕はもう後方うしろを振りむきたくない。僕は自分の好きにしか行動しないと同時に、又何人をも頼らない。……僕はもう縁を切つたんだ、関係がないんだ。わかつたかい？ 僕はどんな事でも出来るんだぞ。

アリョーシャ (悲しげに) あゝ、さうです……凡ての希望は許されてゐます。さうぢやありませんか？

イワン さうだとも。さうぢやないとは云はない。凡てが許されてゐる……アリョーシャ、僕は自由だ……僕は僕の自由を祝ひたい、僕の自由のために飲みたいんだ！

アリョーシャ いや、飲みますまい。僕は實に悲しいのです。(沈黙) 長老ゾシマ様はお逝たぐなりなさいました。

イワン (變な微笑を浮べて) それで、お前は僕達のところへ歸つて來たのか。え、この小さいカラマーズフ。

アリョーシャ 長老様が僕を世の中へ送つたのです。

イワン お前の來たのは最初に僕のところだ。

アリョーシャ 長老様がさう僕に命令なされたのです。

イワン 三月前からお前はその美しい灰色の目で僕に訊ねてゐた。お前は知りたがつてゐた……僕もお前が非常な期待を以て、僕を見つめてゐるのは知つてゐた……僕も、永久に別れる前に、お前と心の底から知り合ひたいとはどれ程思つてゐた事だらう。だがもう遅過ぎた。何故そのことをしらせ合はなかつたのだらう。何故最初の一言を云はなかつたのだらう。

アリョーシャ 何故、僕は切り出さなかつたのでせう？ 二人の間には何一つ起りませんでしたね。

イワン 何一つ起らなかつた、……思想……と云つたところで、精々まじまじ悪夢のやうなものに過ぎなかつたし。

アリョーシャ あなたはまだ此處から逃れようとしてゐる！ 僕はもうあなたの秘密をその儘にして置く事は出来ません、兄さん……一體兄さんは何が不満なのです？ それを云つて下さい！ 僕の方ではあなたの苦しみをどうする事も出来ないのですか？ え、兄さん？ 一體何を苦しんでゐるのです？ 僕はあなたからその苦しみを取りのぞきたいんです。

イワン (肩を上げて) 無邪氣な男だな！ では、まだお前には了解出来ない僕の苦惱と云ふものを



話さう。が、それを知つてお前どうしようといふのだ？ 人には、自分では溢れるばかりの愛情を持ちながら、どうしても愛することが出来ぬことがある。ある肉體的不可能がある。障害がある。他人の苦惱を了解するについての！

アリョーシャ イヴン兄さん、あなたの苦惱が、たとひ何であらうと、僕は、その苦惱があなたを腐敗させることが出来なかつたことを知つてゐます。何かがああなたの顔に現はれて残るものならば、あなたの靈魂の尊さが残るのみです。

イヴン いや僕の靈魂は困惑と争闘の中で、いつも苦痛で充たされてゐる。充たされてはゐるが、しかし實に清新だよ！……その説明を求めてはくれるな、僕には、凡ての道理といふものが、僕の身體からだに取つては、ある恐ろしい本能を包むにすぎないといふことが分つたんだ。凡ての道理が何だ、皆汚らしいぢやないか。僕にはもうそんなものは要らないんだ……僕が生きること。それで十分だ、青い空、温かい春、新しい花は僕を満足させてくれる。僕達の前には生命がある。その生命は僕達を僕達の到達する或る場所へ運んでしまへば、それで終つてしまふのだ……え、わかつたかい？

アリョーシャ (目を伏せて) え……

イヴン さあ、お前あつちへお出で。僕はもう質問に都合のいゝ人間ぢやないのだ。僕はもう凡ての自分の思想を話すことは出来ないのだから。

アリョーシャ 兄さん、僕は恐れませんが！ 僕が兄さんの抱いてゐる思想を恐れてゐると思はないで下さい……たとひ、それが……革命であらうとも！

イヴン 革命ぢやないさ！ 人間は革命の中で生きることが出来ない。僕はたゞ凡てを無視して生きるのだ。革命ぢやないよ、そんなものぢやないさ！……絶望……むしろ忿怒だ、さうだ、否定だ！ そこだ、僕が世間を受けつけない譯は！

アリョーシャ (やさしく) しかし、あなたはあの人を愛してゐますね。兄さん……

イヴン 僕はあの女を愛することを止めようとしても出来なかつた。

アリョーシャ 青い空、温かい春、新しい花……

イヴン 三十歳まで。

アリョーシャ その三十歳まで、胸と頭にそんな苦惱を持つてどうして生活してゆきます？



イワン　そこが、神に對する僕の不平、憤恨のある所以なんだ。神が僕を生活の中に投げ込み、僕をその生活と對抗させる感激と勇氣とを下すつたのなら！　あゝ！　神が、僕に對して猛烈な生活慾、僕の厭世以上に力づよい焦躁を下すつたものならなあ……先刻も云つた通り、僕の抱いてゐる思想は決して革命ぢやないよ、たゞ猛惡な邪念だ。僕は自分の本來の性質に従つて生活しようとは思はない、僕は、僕は煮え返るやうな思ひを抱いて生活するのだ。僕には復讐が必要なのだ！

アリョーシャ　僕はあなたに其復讐を祝福します。イワン兄さん、來るべき復讐を祝福しますよ、そして其復讐が、丁度地下の種子が實を齎らすために犠牲となつて失くなるやうに、あなたの力を消耗させることを祝福します……あなたの仰しやることは道理でした、兄さん。僕は、あなたの苦惱を取除くには餘りに弱過ぎるのです。矢張り神があなたの心を軽くして下さるでせう……

(イワンはアリョーシャの言葉に少し頭を下げる。スメルチャーコフ舞臺を左から右へ靜かに横切る)

イワン　(スメルチャーコフに向ひ、憤然として) お前まだ探偵する氣か？　(アリョーシャに) 彼奴はまた戸口で聽いてゐたんだ。(スメルチャーコフを怒罵りつけて) 出て行け！　(アリョーシャに) 彼奴は何處

へでも影のやうに僕について歩いてゐるんだ。

アリョーシャ　兄さん、氣を落ちつけなければいけませんよ。

イワン　僕はもうあの男の卑しい馴々しさを我慢することは出来ない。僕はあの男と何をしなければならんのか？　あゝ！　あんな男が、これ程までに僕の心を亂すことが出来るとは！……僕は頭が痛い、アリョーシャ。僕は悲しい。僕は今夜は愉快にゐたかつたのだ！　僕は悲しい。悲しみで僕は胸が一杯だ。僕は此處を出發する際に、少なくとも一人の友人をのこしたいと思つた。しかもこの最後の場合、お前にのこるのはいやな記憶ばかりだ。どうか僕のことを極惡非道を奴とまちがへてくれるな……

(アリョーシャ立ち上り、兄の方に身を屈めて抱擁する)

アリョーシャ　イワン兄さん、あなたは僕達のちひさい頃の事を覚えてゐますか？

イワン　何でも覚えてゐるよ、アリョーシャ……しかし、もう愈々お別れだよ。

アリョーシャ　外の人達とも？　あのカチュリーナさんとも？……あの人達はどうなるでせう？

イワン　僕のやうにすればいい、そんな事は考へないが……



アリョーシャ 兄さん、どうかしましたか？ 呼吸が苦しさうぢやありませんか。

イワン 外氣にふれば直ぐなほるよ。

アリョーシャ (頭を振りながら) あなたは自分の思想から逃れ得たものと信じてゐる……

イワン さあ、燈火で照らしてやらう、アリョーシャ。(イワンはランプを取りアリョーシヤル戸口まで案内してやる)

アリョーシヤ 兄さん、あなたの顔は何て嚴格なのでせう……僕はその顔が大好きです！

## 第十一齣

イワン。スメルチャーコフ。

(スメルチャーコフは歴しつけられたやうな容子で、頭を両手で押へ、階段の踏板の上に腰を掛けてゐた。イワンとアリョーシヤが正面奥の方で最後の問答をやつてゐる間其處にゐる。アリョーシヤが去つた後で

イワンが自分の部屋へ戻るために階段を上り始めようとして暗がりには途を塞いでゐるスメルチャーコフを發見し、立ち上り、彼が途を開けるのを待ち乍ら躊躇してゐる容子である。スメルチャーコフは漠然とした微笑を浮べてイワンを見上げる)

イワン 通してくれ。

(立ち上らずにスメルチャーコフはイワンが擦れ擦れに通れるくらゐに、踏板の上で身を引く。イワンは二段ばかり上つてから、無意識のやうに、前のやうに、微笑を浮べて見送つてゐるスメルチャーコフを見返る)

スメルチャーコフ (眼を外らして、低い聲で) どうも驚きましたな。

イワン (額に八の字を寄せて) お前が何で驚くんだ？

スメルチャーコフ 何故あなたはチェルマーシニアへいらつしやらないのです？

イワン お前までがそんな事を聞くのか？ え、お前までが？

スメルチャーコフ 大旦那がさういはれたでせう、御自分で……

イワン ふざけるな！ もつと明瞭に云へ！



スメルチャーコフ おゝゝ！ そんな事は大した事ではありません。それは寧ろ或る事をいふためなのでした。

(スメルチャーコフ黙す。そして太息をして震へはじめる)

イワン (部屋へ入らうとして) 大變齒ががた／＼いふぢやないか……

スメルチャーコフ (ふるへながら) きつと、私は今夜、時間の長い癲癇をやるでせう。

イワン (スメルチャーコフの方へ戻つて来て) え？ 時間の長い？

スメルチャーコフ さうです、長い、少なくとも五六時間、或は一日か二日程の。

イワン どうしてお前は今夜、さういふ病氣の起るのが前から分るのだい？ この前の大發作の時にはお前、物置から落ちたぢやないか。

スメルチャーコフ 私は毎日、屋根裏の物置へ行きます。物置から落ちなければ、始終私の行かなければならない穴倉の中へ落ちるでせう。

イワン (スメルチャーコフを自分の前に來させて) お前かうなのだらう？ 今夜、癲癇の發作の起つた眞似をして、それを三日ばかり続けようといふ積りだらう、え？ お前笑つてゐるのか？

スメルチャーコフ 病氣の眞似ぐらゐ見逃して下さい。……私の生命が危いから用心する位の權利は私に無いものでせうか？ グルーシエンカさんが來たところで、お兄さんも私がそれを防ぎ止めなかつたといつて、まさか病人に向つても來ますまい。

イワン 何故、そんな事をお前は僕にいふのだ、この僕に？

スメルチャーコフ あなたの御意見を伺ふためにです。イワン・フォードロピッチ様。

イワン 僕は先刻も、グルーシエンカさんは來ないだらうと云つたぢやないか？

スメルチャーコフ しかしですね、あのドミートリイ・フォードロピッチ様がお父さんに何か馬鹿な事をやるやうな事があつたところで、私までが共謀者だと見られては耐りませんからね。

イワン どうして又、お前が共謀者だと思はれるかも知れないのだ？

スメルチャーコフ それは、合圖を教へたからです。

イワン どんな合圖を？

スメルチャーコフ あなたも此場合に關係があるから、私も白状しますが、實はあのグルーシエンカさんが夜中に訪問する時には、あの窓をかう云ふ風にたゞく事になつてゐるのです、つまり、最初



はトン！ トン！ と二つ間を置いてたゞいて、それから今度はトン、トン、トン！ と続け様にたゞくのです。あなたのお父さんはグルーシェンカさんと私だけが、その合圖を知つてゐるものと思つてゐるのです。ところが、あなたの御兄弟たち迄が知つてしまつた事になつたのです。

イヴン どうしてお前はそれを兄に教へるやうな事をしたんだ？

スメルチャーコフ 恐ろしいものですから、あの人に忠義振りを見せて置かうとしたんです。

イヴン お前、若し兄貴がその合圖を使ひさうにしたら、さうさせないようにするさ。

スメルチャーコフ 若し私が例の病氣でしたら？

イヴン グリゴリーに話して置くんだ。氣をつけるように。

スメルチャーコフ グリゴリーは三日前から共同小屋で寝てゐます。若しドミートリーの小旦那が生垣を飛び越すか、それとも潜りぬければ、グリゴリーに聞えないで、家を廻ることが出来ますからな。

イヴン ちや、何故お前は僕にチュルマーシニアへ行くように忠告するのだ？……僕はお前の考が知りたいなあ、……

スメルチャーコフ (周章てゝ) 私の考がこの場合何のお役に立ちませう？

フォードルの聲 (自分の部屋から呼ぶ) おい、スメルチャーコフ！

スメルチャーコフ (イヴンを正面奥の方へ拉しゆき、低い緊張した聲で) 私はあなたの爲を思つてお話しするのですよ。あなただつて、私があるためには献身的になつてゐるのがおわかりでせうに。あなたとしては、こんな話に關係するやうな危険を冒さない方がよろしいのです。……こんな事は、あなたには分りすぎてゐるくらゐにお分りになつてゐることですがね、イヴン・フォードロギッチ様……

(イヴンは終まで聞くのが我慢しきれず、何度か、スメルチャーコフが自分の腕にもたせかけてゐる手を拂ひのける。そして自動的に階段を上る。全身が内攻した笑のために波打つてゐる。上りつめてから欄干にもたれて)

イヴン 知りたければ、教へてやるが、僕は一時間の内にマスクワへ立つのだ。

スメルチャーコフ (蒼ざめて) あなたが、あの……何……をなさるよりは、その方が結構です。

フォードルの聲 (自分の部屋から叫ぶ) おい、スメルチャーコフ！



イワン (荷物を階段の最上部の處まで引いて来て) おい、手を貸してくれ。

スメルチャーコフ お父さんが私を呼んでゐらつしやるので。

イワン (スメルチャーコフの肩に荷物をのせて) さあ! これを庭へ出しておいでくれ。僕は御者を探して来るから……

(スメルチャーコフ命令の通りにする。イワンは外套を取りに部屋へ戻り、すぐ階段を下りる。階段を下り切つて、一寸躊躇したやうな容子である)

スメルチャーコフ (戻つて来て) お父さんにお暇乞をなさらないのですか?

イワン (懐中時計を見ながら、戸口の方へ歩み) マスクワ行の汽車は十二時十五分だ、停車場は遠いし、やつと間に合ふかな…… (聴耳をたて) 二階で歩く音がするが、お父さんかしら?

スメルチャーコフ 左様です……私にもうおつしやることはございませんか?

イワン お前は?

スメルチャーコフ 私はあなたよりもおしやべりをしましたよ!

イワン お前は僕が立つとは思はなかつたのかい?

スメルチャーコフ よく世間で精神的人物と話し合ふことは、いつも幸福なことだといひますが、全くですな……私もつれて行つて下さいませんか?

イワン 僕一人にしておいてくれ!

(イワンはスメルチャーコフを押ししのけ、扉をしめる。スメルチャーコフは扉にびたりと身體をつけて耳をすます。それから板石をみつめる。二階でフォードルの呼ぶ聲がする。その時、スメルチャーコフはランプを吹き消し、こつそりと、自分の背後の扉をしめながら右方へ出て行く)

## 第十二齣

フォードル一人。

フォードル (自分の部屋から出る、片手に火のついた蠟燭を持つ。フォードルは明るい色の部屋衣を着し、赤い襟巻をつけ、レースの縁飾のついたシャツを着込み、氣取つた風をしてゐる。又呼ぶ) おい、スメルチャーコフ! (懐中時計をみて) おや、十二時十五分前だ!……ゐるのかい? スメルチャーコフ。(階段を下りる。静寂が續くに從ひフォードルの態度が次第に熱を帯びて来る。右に行き左に行き、目に見えて不安



の状態となる。叫び立て乍ら、小言をいひながら左方の扉を開き、それから右方の扉を開く。しまひに急いでイザンの部屋へ上つて行き、扉をたゞいてから開き、中へ入り又出て来て、階段を下りながらつぶやく。出發した……出發したのかな？ 二人ともわしを残して行くつもりかな？……（スメルザヤコフを探しに行かうとする途端シンとした中で、左手の窓をトン……トン……トン！ トン！ トン！ とたゞく音が明らかに聞える。フォードル立ち止り、顔を變へ、蠟燭を置き、窓に近寄る。感情が迫つて喉が塞がる）グルーシエンカ、お前かい？ （又、相圖の音がする。フォードル靜かに窓を開き、外方を見るために身體を伸ばしながら）お前かい？ 此方へお寄り！ お前、何處にゐるのだい？ え？ （沈黙。最初の合圖と二度目の合圖の間に、スメルザヤコフそろりと室へ入り道具の背後に隠れながら、いら／＼しながら待つてゐる。フォードルは窓の處で話をつとける）グルーシヤ……何故お前返事をしないのだい？ え、わし一人だよ……お前が隠れてゐても、わしはすぐ見つけるよ！

（フォードル左方から出る。その時肘掛椅子の背後にしゃがんでゐたスメルザヤコフは立ち上り、薄暗の中を急いで室を横切り、聖像の掛けてある柱の背後、身を隠さうとする）

（幕）

## 第四幕

場所。モークロエ。夜半。宿屋の二階。壁に襷色した奇紙を張りつめた大きな室。寢臺の置いてある場所には帳が半分絞られてゐて低いベッドが見えてゐる。正面。宿屋の庭を見下ろす木造バルコニーの上に開かれる大きなガラス窓。左手前寄りの壁には姿見がついてゐる。低い長椅子。長椅子の前にテーブル。テーブルの側に肘掛椅子。

### 第一齣

△ツシャローギ、チ。ウルブレーフスキイ。グルーシエンカ。

（長椅子に半身をねそべらした△ツシャローギツチは、パイプを啣へて、濃い煙を吐き出してゐる。卓子の片側に腰を下ろしたウルブレーフスキイは、カルタ占ひをしてゐる。グルーシエンカは、放心したやうな容子で、△ツシャローギツチの側に座を占めてゐる。卓子は、二つの燭臺で照らされてゐる。倦怠の重い沈黙）



グルーシエンカ (自分に凭りかかるムッシャローギッチから離れて) パイプが手放せないんでせうか？  
ムッシャローギッチ (パイプを置いて) ついどうも見恍惚れてゐたもんだから……

グルーシエンカ あたしが綺麗だからでせう？ え？ あなた名譽だとお思ひなさい。

ムッシャローギッチ しかしこの寶物は千ルウブリの値打はしないね。

グルーシエンカ あなたはよくお分りですわね。(再び沈黙。グルーシエンカ嘆息する。そして立上り、伸びをしながら部屋を歩いて、遠くの方から自分の盃に酒を注いで、何か背<sup>そむ</sup>いてゐるウルプレーフスキイの耳に囁いてゐるムッシャローギッチを憎々しく見成る。低い聲で) あたしの生命の五ケ年！

ムッシャローギッチ (立ち上り乍ら) え、何？

グルーシエンカ あたし、五ケ年と云つたんですわ。

ムッシャローギッチ (女の方へゆきかけ乍ら) おい、グルーシエンカ、お前はその五年間に一種の美しさを持つて来たことを知つてゐるかい？

グルーシエンカ あたしだつて何時迄も瘦せつぼちぢやありませんわ……お互に變りましたわね……あなた、もとは本當に優しい、本當に面白い方でしたわねえ……

ムッシャローギッチ (媚びるやうな容子で) しかし……

グルーシエンカ (片手を伸して、男をとめて) あなたはあたしの指環のことを少しも、何もおつしやらないのね。これ、あなたのお氣に召して？

ムッシャローギッチ 素晴らしいものだね。(女の手に接吻する)

グルーシエンカ (やつと我慢しながら) ぢや、あたしの上衣の絹にも觸つて下さいな、そして値ぶみして下さいな……

ムッシャローギッチ 俺には分らん……

グルーシエンカ (離れて腰を下ろして) あなたはもと、本當に好いたらしい唄を聞かせて下さいましたわねえ。もう、どれも覚えてはゐらつしやらないんでせう！

ムッシャローギッチ あゝー 唄かい……おぼえちやゐないよ。

グルーシエンカ まあ。あたし、昔のやうに、どんなにかどひたいでせう……(グルーシエンカは低吟して、すぐと、そつと目を拭ふために中止する)

ムッシャローギッチ お前、悲しいのかい？……(身體を寄せて) え、可愛いお前？



グルーシエンカ あたしを、可愛いなんて云はないで下さいましな。

ムッシャローギッチ (驚いて) ちや、『妹』と呼ばなければいけないのかね？

グルーシエンカ ある善良な、ある無垢な方が今日あたしの事を「姉さん」といつて下すつたんですよ。あたし、赤面しましたわ。生れて始めて其方が、あたしに同情して下すつたんですもの、そしてあたしを許して下すつたんですもの、汚れてゐるあたしなのにも構はず、汚れの外の何かをみとめて下すつて、あたしを愛して下すつたんですもの。その時、あたし、ほんとにこんな着物も飾りも脱いでしまひたかつたんですわ。持つてるだけのお金も返してしまひたかつたんですよ、そして女中にでもいふからなりたかつたんですの……

ムッシャローギッチ おい！ おい！ グルーシエンカ！ 何だい一體、その謔言は？ ……お前、たしかに少し疲れてゐるよ。少し休まなければいけないぜ。さあ、おいで、つれて行つてあげよう……  
(グルーシエンカの片腕を取る)

グルーシエンカ (身を引いて) どうかお構ひなく。もう大分更けましたわね。一時もすぎたし、あたし、出かけますからね……

ムッシャローギッチ (この場面を注目してゐるウルブレイフスキイに視線を送つて) 出かけるつて？ ……

お前、こんな時間に出立するなんてことを平氣でゐるのかい？

グルーシエンカ (外套を取り上げて) えゝ、今すぐ。

ムッシャローギッチ 宿屋の主人だつて寝なければならぬぢやないか。

グルーシエンカ (外套を着ながら) あたしおこしますわ。

ムッシャローギッチ ちや、お前、何しに來たんだ？

グルーシエンカ あなたにお目にかゝりにですわ。もうお目にかゝつたんですもの、ちや失禮致しますわ。

ムッシャローギッチ あゝ！ さうだ！ お前は俺が呼んだので來たんだ……

グルーシエンカ あなたが呼んだので。えゝさうですわ。丁度犬をでもお呼びなさるやうにね。あなたが口笛を吹いたので、あたし這つて來たんですわ。あたしのやうな卑しい心があるでせうか。ね、ムッシャローギッチさん、或る人があたしを愛してゐるんですの。それだのにあたしはその人をあなたのために絶望させたんですよ。



ムッシャローギツチ

(怒らうとして) 俺はお前に、内証話をしてくれとは頼まないよ……

(中庭で鈴の大きな音がする)

グルーシエンカ あ、馬車ですわね! まあ好い都合でしたこと、ちや。

(活潑に右方の扉の方へ數歩進む)

ムッシャローギツチ

(扉の前で) しかし、しかし、……ね、お前、俺はこんないきさつのまんまぢや

お前を立たせられないよ……

グルーシエンカ

あなたはあたしを立たせないといふんですか?

ムッシャローギツチ

立たせない。

グルーシエンカ あなたは力づくで、あたしを止めようとなさるんですね? あなた、お金がいの

なら、あたしお金を上げませう……さあ、放して下さい、放さない、あたし大聲を立てますわ

……あッ、しッ!

(戸外に人聲がきこえる。正面窓越しに、宿屋の亭主トリアフォン・ポリツチが片手に燈火を下げてゐるのが見える。其後方についてゐるドミートリイに主人はポーランド人達の部屋を示す。ドミートリイは一

寸窓に近寄り、それから入口の方へゆく)

ウルブレーフスキイ

何だい、あの音は?

ムッシャローギツチ

何だか知らん、俺達は隣室へ行けたんだのに……

(ムッシャローギツチがグルーシエンカを出口へ連れて行くとドミートリイが敷居の上に現はれる)

## 第二齣

ムッシャローギツチ。ウルブレーフスキイ。グルーシエンカ。ドミートリイ。

(ドミートリイが部屋の中へ入ると、グルーシエンカが鋭い叫び聲を立てる)

ドミートリイ 私は直ぐ出かけます……驚かないで下さい……

ムッシャローギツチ 何か……

グルーシエンカ (ほつと息をついて) まああなた……

ドミートリイ ちよつと……あなたのそばで……あなたにあへばいゝのです……(大股に卓子のと、

ろ迄進む。卓子の背後にはポーランド人達がつつ立つてゐる) 皆さん、私は旅の者です……すぐ出立し



ます……どうか皆さん、明朝迄一人の旅人を此處に置いて下さい、今夜文けですから、  
ムッシャローギツチ 此處は宿屋ですから、あなた、他に部屋もありますよ。

ドミートリイ では、皆お話しますが、私は私の最後の日の一時間文け、この部屋に用があつて、  
大急ぎで来たのです……いや、皆さんのお邪魔はしません。誓ひます……  
ムッシャローギツチ (グルーシエンカに) あなたの知つてゐる方かね？

グルーシエンカ 陸軍中尉ドミートリイ・フォードロギツチ・カラマーゾフさん…… (紹介しながら) 此  
ら、陸軍中尉ムッシャローギツチさん……

ドミートリイ (ムッシャローギツチの手を握りながら) あ……中尉！…… (ウルブレーフスキイに敬禮  
して) あなたは？

ウルブレーフスキイ ウルブレーフスキイ。

ドミートリイ ウルブレーフスキイさん……いや始めて！

グルーシエンカ まあ、皆さん、をかした事ばかり……おかけなさいよ、ドミートリイ、そして、も  
う黙つてゐらつしやい。

ムッシャローギツチ 私の女王があゝ申しますから……

ドミートリイ いや、私實に光榮です…… (トリフォン・ポリツチと共に御者アンドレー、大荷物を運んで  
来る。ドミートリイ御者に) 食糧か、そこへ置けばいい！ おい、アンドレー……さあ、十五ルウ  
ブリは運賃、五十コペックは酒手だ、貴様よくやつてくれたからなあ……それからこのカラマー  
ゾフさんがお前の深切を感謝したことをよくおぼえてゐてくれ。

アンドレー 旦那、おどろきましたね。これが五ルウブリだと、わしもうれしいが……

ドミートリイ (金を投げてやつて) えっ、ふさげるな！

アンドレー (出てゆき乍ら、トリフォンに小聲で) トリフォン・ポリツチ、おめえさん、證人だぞ……

ドミートリイ (又ムッシャローギツチに向つて) さあ、どうか、煙草をおやり下さい。私が、お邪魔し  
ちや濟みませんからね。このミーチャの馬鹿は、もうどなたのお邪魔もしませんよ。……もう、何  
もかもおしまひでさあ……皆さん、私を一人の乞食だと思ひ下さい。私は何もかも失つて了つ  
たんです。いろ／＼と持つてはゐましたが、いまぢやもう何一つ持つてはゐませんや……

(かう云ひ乍ら、ポケットから紙幣束を取り出し、卓子の上、自分のわきへ置く)



ウルブレーフスキイ

(紙幣束の上に指をあてて) これでも何もないといふんですか? 三千ルウブリはたしかだ!

一四四

ドミートリイ

(急いで金をポケットへ入れて) 金の事を云つてるんぢやありませんよ。何です、金なんか! 私は女の事を云つてるんです。(今度はポケットからピストルを取り出し装填の支度をする)

ムッシャローギッチ

あなた、今、ピストルへ弾丸ごめをするんですか?

ドミートリイ

え、さうです。弾丸をこめるんですよ。

ムッシャローギッチ

そして、その弾丸を試験するんですか?

ドミートリイ

きつと面白いですよ……

ムッシャローギッチ

何ですつて?

ドミートリイ

(ピストルをポケットへ藏ひ込み) 馬鹿らしい事ですね、ムッシャローギッチさん。凡てが馬鹿らしい事に過ぎませんや……(激しくウルブレーフスキイに) もし、あなたは我身を退かせる事が出来ますか?

ウルブレーフスキイ

(へどもどして) 一體何の事です?

ドミートリイ

つまり、自分の可愛い者と憎いものとの前から、自分を退かせる、自分を隠してしまふ、可愛い者に勝手な方へ行かせる……そして、かういふのです。「神様があなたと共にあらんことを! さあ、お出でなさい……私は、私はもう澤山です。」どうです、出来ますか? (ドミ

ートリイ手を振って椅子の背を抱き、泣く)

グルーシエンカ

まあ、大變に……ね、あなた、何故泣くの? 愧かしいことですよ……よし何か譯があるとしたつても……

ドミートリイ

俺……俺は泣きはしない……俺の歡喜を楽しんでくれ!

グルーシエンカ

さうだわ、愉快にしてゐらつしやいな。あたしね、あなたが来て下さつたのが、ほんとにほんとに、嬉しいんですの、わかつて、え? ミーチャ? あたし、あなたにあたし達と一緒にこのつてゐてもらひたいわ、あなたが行くんなら、あたしも行くわ……

ムッシャローギッチ

グルーシエンカの意志即ち法律です。いや、ドミートリイさん、よくこそお出で下さいました。

ドミートリイ

さあ、皆さん、友達になつて飲みませう。おゝいー トリフォン! シャンパンを持



つて来て呉れ!

一五六

グルーシエンカ あなた、よくまあ気がついてシャンパンまで持つてゐらしたのね。だけど、あなたが、あなた自身を持つてゐらした方が、シャンパン以上の大出来でしたわね。皆、もう此處で退屈しきつてゐたんですよ! — あなたはお祭騒ぎをしにゐらしたのね、ね?

ムッシュローギツチ (ウルプレーフスキイに) 今、何時かしら?  
(ウルプレーフスキイ、知らないといふ合圖をする)

ドミートリイ 君、時計がないのですか? 今、二時二十分。

ムッシュローギツチ ぢや、お祭りにも遅過ぎるな。

グルーシエンカ 皆さんはどうか、おやすみ下さい、そして、済みませんが、ドミートリイとあたしとだけはこの儘にして置いて下さいました。

ドミートリイ (シャンパンを持つて来たトリフォンに) お前、荷物をほどいたか? 脂肪肉も、燻した魚も、鹽漬のはら子もあるぜ……おい、ボヘミア人はゐるかい?

トリフォン もう此處には一人もをりません。巡査が皆、おつぱらつてしまひましたので。ジュデア人

の音楽連中はをります。呼びにやらせませうか?

ドミートリイ 呼びにやれ! 呼びにやれ! 皆を起してしまへ、男も女も。いつか、始めの時のやうに。彼奴等覺えてゐるかなあ? 音楽連中にやる二百ルウプリはあるだらう。(紙幣を二枚トリフォンの方へ出して) おい……取つとけ!

ムッシュローギツチ あなたは、紙幣をまるで紙屑みたいになさるよ、全く。

トリフォン このお金ぢや、町中の者が皆起き出させようよ。しかし、あなたは乞食や、いやな臭ひのする百姓共に葉巻を吹かさせるために、澤山のお金をおつかひにならうといふんでございますか? 手前も手前共の娘達を寢床からたゞき起して参りますよ。尻つぺたでも何でもぶつたたいて起してまゐりますとも! 娘共もあなた様のために唄はせませあね。(出てゆく)

ドミートリイ (ついで行つて) 俺はね、大騒ぎ、大祝ひをやりたんだ、皆がいつ迄も噂するやうな。金はあるぞ!

グルーシエンカ (ドミートリイに目を放さず、背後に廻つて、低い聲で) 袖が……

ドミートリイ 何?



グルーシエンカ (同じやうにして) 袖のところをお入れなさい。

ドミートリイ (シャツの袖口をみて、急いで中へ押し込んで) さあ、よし……(卓子に歸つて) 皆さん、飲まないんですか? (部屋の中を縦横に大股に歩いてゐるウルブレーフスキイに) あなた、え、何と仰しやつた……

ウルブレーフスキイ ウルブレーフスキイ。

ドミートリイ 何か、さうやつて歩いてゐなけりやならん事でもあるのですか、えウルブレーフスキイさん? 杯をお取り下さい……皆さん、ロシア流にやませう、そして兄弟になりませう……(一同飲んで、杯を置く) さてと、女共の來る間、何をしませう? (卓子の上のカルタを見て) うん、さうだ、銀行をやりませう。

ムッシャローギッチ 何でも致しますよ。

ドミートリイ さあ、お始めなさい。カルタをお持ち下さい。私はあなたがうんと儲けることを希望します。

ウルブレーフスキイ あなた方の代りに……

ドミートリイ あなたは銀行にいくらお持ちです?

ムッシャローギッチ あなたのお好きだけ、え、と、百、二百ルウブリ。

ドミートリイ ではと、チャックに十ルウブリ。

ウルブレーフスキイ (微笑して、グルーシエンカに) では、私はハートのナインに一ルウブル。

(皆始める)

ドミートリイ 二倍賭と!

ウルブレーフスキイ 私は又一ルウブルと。

ドミートリイ やられた……七點札ちちにこれだけ——又やられた!

グルーシエンカ (ドミートリイに小聲で) もうおよしなさいよ!

ドミートリイ 七點札に! 七點札に!

ムッシャローギッチ あなたは丁度二百ルウブリの損です。又倍にしますか?

ドミートリイ え? もう二百ルウブリも損をしましたつて? チョッ! 又倍賭だ!

グルーシエンカ (カルタ札の上に両手を置いて) もう澤山です!



ドミートリイ 何故さ！

グルーシエンカ だつて、あたしもういやになつたんですもの。あなたももうおよしなさいよ。唾でも吐きかけたいわ！

ムッシュャローギツチ あなた、ふさけてゐるんですか？

グルーシエンカ あゝ、お黙んなさい！……何と云ふ卑怯な方でせう！ 神様、この人は何になつたので御座いませう？

ドミートリイ (グルーシエンカを見て) 何だい？……

グルーシエンカ あたしは、この人が二度もカルタをすき見したのを知つてますわ。

ムッシュャローギツチ 奥さん、私も紳士ですぞ！

グルーシエンカ あたしは五年間を泣いてゐたものです……盗賊！

ウルブレーフスキイ 私は勘辯出来ません……

グルーシエンカ お前さんもさうだ……この人の袖を振つてごらんなさい！

ウルブレーフスキイ (退却し乍ら) 淫賣め！

(ドミートリイ、ウルブレーフスキイにとびかり掴へて階段から抛り投げに行く)

グルーシエンカ (両手を拍ち乍ら) まるで荷物だわ、まるで荷物だわ。

ムッシュャローギツチ 俺は許すために来たんだ、結婚するために来たんだ、それなのに何と云ふ鐵面皮な人間だ。

グルーシエンカ お前さんの来たところから出て行つておくれ！

ドミートリイ (戻つて来て) すこし手酷しかつたなあ……(笑ふ。ムッシュャローギツチに) あなた、どうぞ……

(と云つて扉口を指す)

ムッシュャローギツチ まつたく、あなたの戀人は私をおどろかしましたよ……

ドミートリイ 俺はこの女の戀人だつたことはないんだ！

グルーシエンカ 云はせておおきなさいよ。

ドミートリイ 出て行つて呉れ！

トリフォン (物音を聞いて駈けつけて) 且那樣は盗まれたお金をお取りかへしにならないんですか？



ドミートリイ　せめて金くらゐ持たせてやるさ。  
 グルーシエンカ　立派だわ、ミーチャ！　可愛い人！  
 トリフォン　音楽連中も来てをりますよ、旦那様、そろ／＼上つて参りませう……（退場）

## 第三齣

ドミートリイ。グルーシエンカ

ドミートリイ　（扉を閉め、グルーシエンカの方へ戻つて来て、荒々しいが愉快げに）おい！　グルーシヤ、  
 たうとう見つけたな。このいたづら者め！

グルーシエンカ　（ドミートリイに両手を擁して）あなたは、あたしを救ひ出したんです。

ドミートリイ　（低い聲で、両手を反らしながら）おゝ……

グルーシエンカ　あなたの這入つて来た時、あたしがどの位恐かつたかを、あなたが知つたなら……  
 あなた、あたしをどうして見つけて？……誰が云つて？……

ドミートリイ　お前とこの女中さ。あの女が皆話してくれたんだ。

グルーシエンカ　フェニアが？　あなた、あたしの家へ行つたんですか？

ドミートリイ　二度。最初行つた時には、フェニアは何もいはうとしなかつたよ。あの女はびく／＼してゐたさ。あゝ！　もしあの女が、すぐ話してくれたんなら……あんな事は起らなかつたらうに、あれは、餘程夜が更けてから後のことだ……俺はお前を探しながら泣いた、子供のやうに泣いたんだ。

グルーシエンカ　何處を探して？

ドミートリイ　到る處さ。

グルーシエンカ　さうでせうねえ、あたし自分の行くさま／＼で、いつもあなたがあたしの背後うしろにゐるやうな気がしてなりませんでしたもの。

ドミートリイ　俺はカチェリーナイワノヅナのところへ行つた、お前はもう出たあとさ。そこで、今度は間違ひなくあす、だと思つた……その前に、スメルチャーコフが俺の親父がお前を待つてゐるつてことを話したからなあ……

グルーシエンカ　ちや、あなたは、あたしがお父さんのところにお思ひになつたの？



ドミートリイ 話さしてくれ……さうなんだ……そして一時間許り扉口を見張つてゐたんだ……

グルーシエンカ それから、中へ這入つて？

ドミートリイ 這入つた。

グルーシエンカ ドミートリイ……そこ、袖のところに……血でせう、それは？

ドミートリイ 血だ……人間の血だ……神よ！ 何故血が流されたのか？ (この時、モークロエの娘達の合唱が戸外でどつと起る、ドミートリイ、立ち上つて) あゝ！ 音楽隊だ！ (奥の階段口へ走り出る。人々ドミートリイを拍手する) 上れ！ 上れ！

#### 第四 齣

ドミートリイ。グルーシエンカ。大勢の男女。

ドミートリイ (階段口の群集をもてなしながら) よく来た！……うん、さうだ、この前来たドミートリイ・カラマゾフだ！ 皆、俺を知つてゐるかい？ 俺はお前方に會ひに来たんだ、お前方とお祭をやりに来たのさ。シャンパンがある、そうれ……(罎を分けてやる) コニャックもあるぞ。ラム

もあるぞ。俺はお前のことを考へてゐたよ、ワシリーフ……おゝ、グレゴルか。シガーもあるぞ。おお、煙草を吸はんのなら、食べてもいゝぞ。(笑聲) ポンチもあるだらう……おい、トリファン、ポンチに火をつけろ！ さあ、どの部屋へでも入つて食べるなら食べる……よし、よし！ 音楽隊が来たな……(ギター、ヴァイオリン、六絃琴を持つてジュテヤ人の音楽隊登場) ボリスか、おはひり！ (ドミートリイ、ボリスの手を握り) 今晚は！ 今晚は……金があるなら？ あゝ！ あゝ！ 音楽連中にやるための三百ルウブリ、さあ、持つておいで、持つておいで……(ドミートリイ、紙幣束を見せびらかす)

グルーシエンカ (小聲で) お金をポケットへ入れてお置きなさいよ。

ドミートリイ (小聲で) うん、さうだ、こんな事は愧かしい事だ。俺は愧かしい。グルーシヤ！ かし、かうやつて、此處にゐるのが何ともいへないくらゐ嬉れしいんだよ！

グルーシエンカ 愉快におなりなさいな！……

ドミートリイ 明日になれば俺は出發する……俺は自分の出發するのをちやんと知つてゐる……残りの荷物もほどいたがいゝ。ボンボンもあるし、砂糖菓子もある……おい、音楽連中、お前達は寝



るかい？（ドミートリイは皆に遊んであてもらひたい容子で歌ふ）お前達、踊らうつてんだね、馬鹿騒ぎをやらうといふんだね。娘さん達が男の連中と、さあー（二人の娘登場）やッ！ アリナとステバンだ！ おい、二人の美人、どんなに美しいのか見せておくれ！（グルーシエンカに）二人ともほんとに綺麗ぢやないか？

グルーシエンカ 接吻しておやんなさい、氣違ひさん！ あなたのやうな氣違ひは面白いわ……

（ドミートリイ二人の娘を交代につかまへて接吻する、ヴァイオリンの音。ドミートリイ、ダンスの足つきをする。ボンチの煽が中庭を明るくする。やあ、ボンチだ、ボンチが燃えらあ……そして皆、階段の方へ押し寄せる）

ドミートリイ （群集に雜つて）さあ、飲まう！ そして愉快に、賑やかにやつてくれ。俺はお前さんたちに明日の朝まで何もかも忘れて騒いでもらひたいのだ！（ドミートリイ部屋へ戻り、少しよろめく。そして敷居のところ、獨語して立ち止る）明日の朝まで……そして萬事休矣だ……

グルーシエンカ ミーチャー！ こゝへいらつしやい……あなた、あたしのおるのを忘れたんですか？ 何だか悲しさうだわね、どうして？ 音楽をきいてゐるの？ おゝ！ ミーチャー、ミーチャー、あ

しは五年の間、あの人をどんなに愛してゐたでせう……此處へ来る途中でも、あたしは、あたし達二人がどんな工合で顔を見合せるかしら、最初に何といはうかしらと考へて来たんだわ。それが、あの人に會つた時……あたしは丁度埃箱でも頭へかぶつたやうな氣がしましたの……もうその話はやめませう、ね、ミーチャー。行つちやいやですわ、あなた、あたし、あなたに云ふことがあゝるの、聞いて下さいね、あたし、此處で今、或る人を愛してゐるのよ、誰のことだか、あたしに云つて下さいな……

ドミートリイ （自分の幸福にもがき乍ら）いやだ。

グルーシエンカ 今誰かが此處へ這入つて来たんです、幸福を連れて！ そして、あたしの心がかう云ひましたの。「さあお前、お前の可愛い人が来た」つて。ミーチャー、あたしの事はかり思つて下さいね……ミーチャー、あたしは此處で、今、或る人を愛してゐるんです。あなた、誰だか知つてゐて？ え？ あたし、その人のことをお話しするわね……

ドミートリイ （耳をふさいで）いけない、いけない。それを云つてはいけない！ 俺はもう……出来ない……俺はお前を失つたと信じただけに、俺のして来た凡ての事は問題にならなかつた。俺の



して来た凡ての事は、それでも善だつた……お前、わかつたかい？ 處々方々を探し廻つてから、俺が此處へ這入つて来た時……おゝ！ 氣持のいゝ風が顔にあたるし、空には星が降るやうに出てる……さうだ、其處へ這入つて来た時、喜びも一緒に俺について来た！ つまり……俺の魂は切れ切れになつてゐた、が、しかし、俺はまあ満足してゐた、さうだ……凡ての事が終つたから……お前に又會ふ、唯單にお前に再會する、そして萬事終りを告げる、といふ事に俺はきまつてゐたんだ！ 俺はお前に對して、優しい愛、全然新しい、全然自己を捨てた愛しか感じてはゐなかつた……あの男に對する嫉妬、憎悪などは少しも感じてはゐなかつたさ。あの男はお前の初戀の相手だ。お前は五年の間、あの男を待つてゐた、愛してゐた、俺はお前が、あの男をまだ愛してゐるものと信じてゐた。俺はお前を幸福な女と信じてゐた。グルーシヤ。俺はもう生を必要としなかつたのだ。俺にとつて、生はもう何らの意義も値打もなかつたのだ。あゝ！ 俺は死に向つて慕進して行つたのだ。それなのに、今、今となつて……お前が俺にその両手を擴げてくれるとは……

グルーシエンカ (ドミートリイを抱きしめて) ミーチャ、あたし、あなたが可愛いんです！ どうか勘忍

して下さい、ね、ミーチャ？ あたしを可愛いと思つて下さい！……あたしはもう、いつもとは違ふんです。あたしはわかつたんです……誰も、あなた程、あたしを愛してくれた人は無かつたんですもの！……

ドミートリイ しかし、あの血を！……

グルーシエンカ あたしを抱きしめて下さい。あたしに種々と訊ねないで下さい……あの人はあたしを抱きしめ、それからぢいつと見てから種々と訊ねるのです。何故あなたも種々とおきよになるの？ 抱きしめて下さい！ もつと強く、もつと強く、さう。人の愛する時は？

ドミートリイ (力強く) あゝ駄目だ！ グルーシエンカ、今此瞬間に、俺は俺の一生を棄てたい。俺はもう何も考へたくはないんだ、もう何も考へまい……グルーシヤ、俺は幸福だ！

グルーシエンカ さあ、飲みませう！ (グルーシエンカ、杯に注ぐ)

ドミートリイ あゝ！ 俺の心臓がこの喜びを支へるだけ十分強くあつてくれ！ あゝこの夜が、この歡樂を夜明迄に十分満足させてくれるまでつゞいてくれ！

グルーシエンカ (肘掛椅子の上に横はり、自分の杯をドミートリイに差し出して) ミーチャ、あたし酔つた



わ、あなたはまだね……

一六〇

ドミートリイ 俺は酒ぢやない他のもので、すっかり酔つてゐる！

グルーシエンカ 皆、まだ階下で踊つてゐるわ。

ドミートリイ 見ておいで。

グルーシエンカ あたしも踊りたくなつたわ。(二人で開けてある窓の前へ立つ) あゝー 夜ね……空がもう白みかかつて……(グルーシエンカよろめく。ドミートリイ彼女を両手で支へる) あたしを、連れて行つて下さいな、えゝ……(ドミートリイ彼女を寢臺の上へ横にする、二人の接吻が益々烈しくなる) いけない、いけない……觸つてはいや、まだいや。はなれて頂戴、ミーチャ、どうぞ……ね、ミーチャ、えゝ、あたし、あなたの者よ、けど此處ではないの。あの人達のゐるそばで……

ドミートリイ (跪いて) あゝさう。もう思想さへもいらぬ……

グルーシエンカ あたし、知つてゐます……あなたが野獣のやうな方だつてことを。けど、あなたの心は尊いわ、やさしいわ。ね、今晚が二人の最後の遊戯の晩ですわね。これからは正直に、いつでも正直にしてゐなければなりませんわね。あたし、あなたの戀人ぢやありませんわ、妻ですわ。

アリョーシヤさんが、今日、一生忘れられない言葉をあたしに云ひましたわ……そのまゝ、もう動いてはいや。(グルーシエンカの聲が弱くなる) あたし、あなたの妻ですわ、あなた、あたしを連れて行くでせう、遠くへ……櫓が二人を待つてゐますわ、ね、ミーチャ……あゝ、さうやつて、二人は出立するのね……世間の人が急いで行くやうに……眞白ですわ……雪がありますもの……あたし、雪が大好き……もう物の音は何一つきこえないで……地面の上とは思はれませんか……あたし、いゝ氣持、くたびれたわ……ミーチャ……ミーチュエンカ……(グルーシエンカうとうとする。ドミートリイ、一寸、れてゐる彼女を凝視してから立ち上る。部屋の中を見廻す。蠟燭消える。ドミートリイ窓に近寄る。唄の聲止む。沈黙。夜が明ける。ドミートリイ戦慄する。そして次第に少しづつしつかりする。そして急にポケットからピストルを取り出し、手燭の光りで弾丸込めをして、又寝てゐるグルーシエンカに近寄つて見つめる。最後にピストルを自分の額にあてる。グルーシエンカ目覚める) ミーチャ、おゝ寒いこと……あなた、何處？ 何をして……(グルーシエンカ寢臺から飛び起き、ドミートリイの側へ寄る)

ドミートリイ 夜が明けた……俺はもう生きてはゐられない、その事は前に誓言した！

グルーシエンカ (ドミートリイからピストルを奪ひ取つて) あなた、何故死にたいの？ 恐いのですか？



ドミートリイ こはくはない、俺は恥かしい、恥かしい！

グルーシエンカ その血のことが？

ドミートリイ 血は何でもない……金だ……

グルーシエンカ 何のお金？

ドミートリイ 八日前から俺が持つてゐたカチェリーナの金だ……その金を俺はあの娘達や音楽連中に投げてやつてしまつたんだ……俺は泥棒だ！

グルーシエンカ 二人でお金をカチェリーナに返しませう！ あたし入るだけのお金をあなたに上げますわ。今はもう、あたしの物は全部あなたの物ですもの、二人でカチェリーナさんの處へお詫びに行つて、それから二人で出立ませう。ね、カチェリーナさんにお金をお返しなさい、けど、あたしの外の人を愛してはいやですわ！……もし、あなた、そんな事したら、あたし、あなたを縊り殺しちやふわ……あなたの目をえぐつてやるわ！

ドミートリイ 俺はお前のほか、何人も愛さない。俺はシベリアへ行つてお前を愛する羽目になるだらう。

グルーシエンカ ね、二人で働きませう、忍耐ませう。神様は二人を許して下さいませう。あたしだつて、まだ神様にお祈りすることは知つてゐますわ……アリーシャさんが、はたらかなければいけないつて云ひましたの、あたし、あなたのために働きますわ、あなたの命令を何でも守りますわ、あなたの奴隷ともなりますわ。

ドミートリイ さうだ、シベリアへ行つても、生きることが出来る。シベリアでも愛することは出来る。又悩むことも出来る。俺はもう怖れない、シベリアへ行つて、ね、お前、地面の下、鑛山の底、苦みの中で、二人は喜びの神に讚美歌を歌はう！

グルーシエンカ あゝ、ミーチャ、二人は生きませう……どんなに苦しんでも、生きてゐるのは幸福ですわ……

ドミートリイ うむ、お前と一緒に！ (ドミートリイ、グルーシエンカを胸に押しつける。沈黙)

グルーシエンカ (飛びのいて、かすれた聲で) あゝ、誰かこつちを見てゐるわ、あすこで……

(ドミートリイ、彼女の見てゐる方に振りむいて、右方、敷居の上に立つてゐる一人の男を眺め、その人の方へ跳れ上る)



署長 (低いけれども力強い聲で) 同行して下さい、どうぞ。

(ドミートリイ一步進む。署長は身を反して扉を開いて見せる。ドミートリイはその時、階段口が百姓と兵士とで一杯になつてゐるのを認める)

ドミートリイ (叫ぶ) あゝ……俺はわかつた! (椅子の上へもたれかゝる)

署長 豫備陸軍中尉カラマーゾフ殿、本職は貴下が昨夜殺害された貴下の御親父フォードル・パヴロ  
ギッチ・カラマーゾフの殺人被告人である事をお知らせします。

ドミートリイ (躍り上つて) 決して! 私は罪人ではありません! この血はさうではありません!  
この血がついてゐるからといつて、私は決してそんな罪のある身ではありません! 俺は親父の  
血を流したわけではありません!

グルーシエンカ あゝ!

ドミートリイ え、私も父を殺さうと思つたことはありません、然し殺しませんでした。私ではあ  
りません、決して私ではありません!

グルーシエンカ この人の云ふことは本當の事です……この人のいふ事を信じて下さいまし……(ド

ミートリイの前にひざまづき、ドミートリイの膝を抱きしめ) あたしは、あなたを信じます、あたしは  
あなたを信じます!

(署長合圖をする。兵隊が部屋の中へ這入つて来る)

(幕)



## 第五幕

一六六

フォードル・バヴロギッチ宅。廣間。第三幕と同一の裝飾。二月後のこと。冬の初期。晝。

### 第一齣

グリゴリーイ。スメルチャーコフ。

(初めにグリゴリーイ登場。頭部に繻帯を巻いてゐる)

グリゴリーイ (扉口まで歸つて) どうしたんだ? 這入らないのか?

(スメルチャーコフ、目につかない程の躊躇の後で這入る。手に着物の小包を持ってゐる。顔色蒼白、傷がついてゐる。二人は黙したままで舞臺へ這入る。グリゴリーイ椅子に坐り、頭を両手でおさへる)

スメルチャーコフ まだ工合がわるいかね?

グリゴリーイ 何しろひどい傷だからね。……しかし、お前も随分變つたなあ!

スメルチャーコフ 二月つてもものは發作が続いたからね。病院でも迎も保つまいつて云つたよ。(更に

沈黙。スメルチャーコフ自分の周圍を見廻す) この部屋かい? 例の事件のあつたなあ?

グリゴリーイ 彼處さ、聖像の前に、ぶつたふれてゐたんだ。

スメルチャーコフ 死んでかい?

グリゴリーイ さうさ。(沈黙)何でも刑の宣告があつてから、ドミートリオ・フ、ードロヴキチ様は別人のやうになつて、自分の罪を泣いて許りゐるつて話だね。

スメルチャーコフ シベリアの二十年と來ちや、随分辛いからなあ。

グリゴリーイ 不仕合せな人さね!……あの人が子供の時にや、俺がよくお湯をつかはせたもんだつけ。……大それたことをやつつけたもんだ! あゝ、旦那の部屋の窓が、すつかり開けひろげであるのを見て、俺はハッと思つたよ。何でも、もう夜中頃だ。急に目が覺めると、庭の垣根の鏡を下ろさなかつたのを思ひ出して、外へ出たんだな。すると、俺から五六間先を走つて行く人の影があるのさ。俺がその行手を遮らうとして飛びつくやうに、丁度矢來の處まで來ると、ドミートリオ・フ、ードロヴキチ様が今、矢來を乗り越さうといふところなんだ。俺にはすぐ分つたさ!



そこで俺が大聲を立て、その脛をつかまへたんだが……その時、つかまへた手を放して夢中になつて地面へぶつ倒れた程こつびどくの頭を擲りつけられたのさ。それから五六時間経つと、もうドミートリイの小旦那はモークロエで捕縛されちやつたんだ。

スメルチャーコフ　ぢや、騒ぎ出したのは何人だね？

グリゴリーイ　俺の噂さ。俺が出て行つたきり歸らないので、噂が今度出て來たんだが、奴、大聲で呼び立てたもんだから、大勢の人が出てきた譯さ。そしてその時に始めて大旦那の死骸を發見した譯なんだ。……それからお前は、その翌日さ、癲癇を起して口から泡を吹いて、氣絶してゐるのを穴倉の中で見つけたのさ。

スメルチャーコフ　うん、そのこたあ病院でも聞いたよ。俺は何も覚えてゐないんだ。何も。

グリゴリーイ　（兩手を組んで）あゝ何といふ不幸の事かなあ！

スメルチャーコフ　そしてイヴン様は？

グリゴリーイ　イヴン・フォードロギチ様は、葬式が済んで二日目にやつとマスクワから歸つてきたのさ。裁判が始まつてからといふもなあ、此處から一足も動かなかつたよ。

スメルチャーコフ　そして……何て云つてるね？

グリゴリーイ　何をさ？

スメルチャーコフ　宣告をさ。

グリゴリーイ　何とも云はないよ。いつも閉ぢ籠つて、いつも沈んでゐるばかりさ。あの人にや誰を辯護することも出來やしないからなあ。アリーシヤ様はたまには來るが、あの人は決して牢屋を離れないし。カチェリーナ・イヴーノヴナさんだけが……

スメルチャーコフ　二人はちよい／＼會ふかね？

グリゴリーイ　よく會ふよ。

スメルチャーコフ　此處で？

グリゴリーイ　さうさ。

スメルチャーコフ　（口の中で）この薄暗い悲劇も結婚式で幕になるだらうよ。（沈黙）あの人は俺のことを訊ねなかつたかね？

グリゴリーイ　誰？



スメルチャーコフ イヴン様さ。

一七〇

グリゴリーイ 一言も。

スメルチャーコフ ちや、あの人は俺を多分死んだ者とも思つてゐるんだらう。

## 第二齣

イヴン。 スメルチャーコフ。

(イヴン正面奥から這入る。何も云はない。グリゴリーイはイヴンに言葉をかけるのを躊躇してゐる。しかし、イヴンの氣むづかしい顔でグリゴリーイはその氣がなくなる。かなり長い沈黙。イヴンは喋ることが出来ず、スメルチャーコフは出て行くことが出来ないといふ態である)

スメルチャーコフ 私、今朝、病院を出しましたが。

イヴン またこの家へ奉公しようといふのかい？

スメルチャーコフ さうお願ひしたいと思つてゐますが。

(グリゴリーイ、右手から退場。更に沈黙)

イヴン では、お前知つてゐたのかね？

スメルチャーコフ あなたも御病氣のやうですな。どうして、そんなに目が黄色いのです？

イヴン 僕の病氣はどうでもいゝ。僕の質問に返事をしてくれ。

スメルチャーコフ どうして私が知らずにゐませう。すべて前から分つてゐました。

イヴン お前の發作までが？

スメルチャーコフ 病院の醫者達に私の病氣の詳しいことはお聞き下さいまし。……あなたは私に何を云へと仰しやるのです？

イヴン お前は確にあの穴倉のことを話してたなあ。

スメルチャーコフ あの穴倉へ落ちたのでは中々助からないと始終こはがつてゐたからです。私は常「あ、始まりさうだぞ、俺はおつこちるかな？」と自分に云つてゐました。私が痙攣を起して倒れたのは、實際さういふ考へが起る時なのです。私はこのことを醫者にも云ひましたし、豫審判事にも云ひました、皆、私の言葉を信じて呉れました。

イヴン あゝ？



スメルチャーコフ

何故私が嘘を云ふ必要があるのです？

うか？

わたくしに何か恐れることでもあるでせ

一七二

イワン そんなことは、お前がどういふ譯か知らんが、僕のチェルマーシニアへ出發するのを熱望してゐた説明にはならんよ。

スメルチャーコフ 私は不幸を感じたんです。この家が安全ぢやなかつたんです。私は、あなたが此處から遠ざかることを望んだのです。

イワン お前は、僕が罪惡から遠のくことを望んだつて？

スメルチャーコフ あなたにはそれがお解りにならなかつたのですか？

イワン 僕にはいつまでも解らないかも知れないよ。

スメルチャーコフ 私は、あなたが恐ろしがつてゐて、それで自分から逃げ出したのだといふことがわかりました。

イワン では、お前は、僕をお前同様卑怯な人間だと思ふのか？

スメルチャーコフ どうも仕方がありませんな。私はさう信じました。

イワン (躊躇して) ドミートリイ兄貴はお前のことを明白に裁判官の前で告白したよ。

スメルチャーコフ 自分の背負はせられた重荷に苦しんで、そんなことばかり云ふのです。自分で、助からう助からうとしてゐたのです。あなたも、ドミートリイ様がどうにもならなかつたことがお解りでせう。(イワン黙す。スメルチャーコフ、イワンに近寄り腕に觸つて) ね、イワン・フォードロヰチ様、若し、私が、あなたのお父様に對して、何か惡企わるだくみを持つてゐたら、あなたは、私がこの前あなたにお話したことをあなたに話す程の馬鹿者だと思ひですか？

イワン 俺はお前を告發しやしないよ。お前を告發したつて滑稽だからなあ。

スメルチャーコフ 私は神を信するやうにあなたを信じて居ります。……私、部屋へまゐりましてもよろしうございますか？

イワン おいで。

(スメルチャーコフ二階へ上る。イワン見送る。振り向いて左方數居の上にかチェリーナ・イゾーノヅナをみとめ、走り行き、兩手で彼女を抱く)



### 第三齣

一七四

イヴン。カチエリーナ。

カチエリーナ (一寸身を退いて) あなた、熱があるのね。……あつゝいこと。

イヴン (再びカチエリーナを抱く) 毎日、僕はあなたが来るかどうかと心配してゐたんです。あなたは来るには来たが、僕を拒絶するために来たんですね。

カチエリーナ 待たなければいけませんわ。

イヴン 何を？

カチエリーナ あたしをそ、おつとして置いて下さいね。

イヴン 僕はあなたに……

カチエリーナ 少し我慢して下さい。……だつて、あたしはもう、あなたの兩腕の中にあるんですもの。……ね、あたしは、あなたに抱かれて幸福を感じてゐるんですもの！

(カチエリーナはイヴンの肩に頭をのせて泣く)

イヴン おゝ！……いや／＼ではないんですか？

カチエリーナ あたしの愛を疑はないで下さいね。イヴン！

イヴン 僕は、あなたがかうならない時には、もつと幸福さうな人だつたのを知つてゐますよ。

カチエリーナ あたしはもう自分の愛しか持つてゐませんわ、イヴンさん！ そしてあなたは、私からその愛をとつたんですわ。……

(左手の扉が開いて、グルーシエンカ登場)

### 第四齣

イヴン。カチエリーナ。グルーシエンカ。

イヴン (振り向いて、強く) 誰？

グルーシエンカ (一步進んで) アリョーシヤさんは来て居りませんか？ 監獄からこちらへ廻つた筈なんですけど。では、私、戸外で腰をかけて、待つてをりませう。(外へ出ようとする)

カチエリーナ (グルーシエンカの方へ一步進んで) 奥さん……あなた、ドミートリイとお會ひになり



時々監獄へいらつしやいますか？

グルーシエンカ え、毎日。

カチエリーナ ドミートリイは、イヴンさんと私の二人があの人を逃げ出させようと決心したことをもう知つて居りますか？

グルーシエンカ ええ？ 何で御座いますつて？ あなた方が……

イヴン どうしてもその必要があるんです。用意はすつかり整つてゐます。僕は金も持つてゐます。驛場の役人も助力してくれることを約束しましたし。

グルーシエンカ そして、ドミートリイは同意致しましたか？

イヴン アリョーシヤが見貴の考を探る役目を引受けたんです。

カチエリーナ アリョーシヤさんの返事は、あなた？

イヴン それを待つてゐるんです。

カチエリーナ 奥さん……あなた、今日もドミートリイにお會ひなさいまして？

グルーシエンカ え、今朝。

カチエリーナ 何をして居りました？

グルーシエンカ もう喋つて、喋つて！

カチエリーナ どんなことを？

グルーシエンカ 時には私の解らない事を申しますが、何ですか、私も泣かすにはゐられないやうな立派なことを申しますの。

カチエリーナ 悲しいことですか？

グルーシエンカ いゝえ、かへつて、楽しさうなことでしたの、ですけど、あの人が頭の毛を掻き廻し乍ら、部屋の中を歩き初めた時には、私何かがあの人を動かしてゐる事が解りましたの。

カチエリーナ さうですか？……

グルーシエンカ 祕密ですわ、それは。まあ厭な人！ 私、ちゃんとその祕密を知つて居りますわ。

……（目を伏せて）あの方は私を愛してはをりませんの！ あの方はあなたのことを思つてゐるんですのよ。カチエリーナさん。あの方は私に、あなたのことを話しましたわ！

カチエリーナ （内心元氣づいて）ええ、私、あの方の魂を傷つけましたわ。あの方も私の魂を傷つけ



ましたの。そして、一生！

一七八

グルーシエンカ あの人、若しあなたが来ることを拒むなら、自分はいつも不幸であるだらうと、繰返し繰返し云ふんですの。よう御座いますか？ ドミートリイは、私に、この私にさへ、そんなことを申すんですわね！（低く）ね、あなた、いらつしやらなければいけませんわ。……カチエリーナ 私、それは出来ませんわ。あの方は私をぢいつと御覧になるかもしれません。けど、どうしても……

グルーシエンカ あなた、可哀さうだと思ひになりませんか？  
カチエリーナ グルーシエンカさん、どうか、私に代つて、あの人の手に接吻して上げて下さいませね。

……そして、あの人に私達の愛は死んだのだと、あなたからおつしやつて下さい。しかし、その愛は残酷な程高價なものとして私に残つてゐるとおつしやつて下さい。おお！ あの人が、私を愛するのを止めないことを！ そのことをあの人にことづけて下さいね！

（グルーシエンカ、腰を屈め、頭を横に振つて否定の意を現はす）

カチエリーナ （恭々しく）ね、それをおつしやつて下さいませ、そして……私を許して下さいませ

まし。……

グルーシエンカ 私達は二人とも根性まがりですわ、ね。あなたは私に何もあやまることはいりませんわ。私もあなたにお話しすることもありませんもの。ですけど、私はあなたを一生尊敬しますわ。どうか、さうお思ひ下さいませね。

（アリョーシャ、左方より登場）

## 第五齣

イヴン。カチエリーナ。グルーシエンカ。アリョーシャ。

イヴン （アリョーシャに）どうしたい？

アリョーシャ ドミートリイ兄さんはいやだと云ふんです。流刑犯人の輸送隊は一時間の内にシベリアへ向つて出發することになつてゐますよ。

イヴン 兄貴は何故いやだといふのだい？

アリョーシャ 『皆は俺の無罪を信じないで、只俺に自由を提供するんだ。だから俺はいやだ。』これ



が兄さんの返事なんです。そしてまたかうも云ひました。『俺は純潔を掩ふことを欲しないんだ。兄さんには精力と歡喜とが溢れてゐましたよ。』

イワン 兄貴にいやだと云はせるやうにしたのはお前だらう？

アリョーシャ そんなことはありません、兄さん。しかし神様がドミートリイ兄さんを訪れたのです。そしてドミートリイ兄さんはそれに忍従したいのです。兄さんは凡ての人の救済の爲に流刑場へ行きたがつてゐるんです。……お氣の毒な兄さんです！ いつも向う見ずの事をする方……あのやうな殉難者の爲に、用意されたものが何一つあるものですか。牢屋の中で、監視人達の貴様扱ひはすぐドミートリイ兄さんを反抗させたんです。監獄で、若し何人かが兄さんを擲つても、その人は攻撃を受けるやうな事はありますまい。たゞその時です。兄さんは殺すでせう。

イワン お前は、『たゞその時、兄さんは殺すだらう。』と云つたね？

アリョーシャ え、云ひました。

イワン まるで兄貴が今迄に人を殺したことがないかのやうに？

グルーシエンカ あれは、あの人はありません！

アリョーシャ 兄さんは僕達のお父さんを殺しはしません。そんなことはありませんよ。イワン兄さん。

イワン お前にその證據があるのか？

アリョーシャ ドミートリイ兄さんが私に云つた言葉が證據です。僕は兄さんを疑ふことは出来ません。

グルーシエンカ あの人は嘘を云ふことの出来ない人です。

イワン つまり、判事の宣告にお前達がかれこれと抗辯するのは、そこを證據としてゐるのだね。

アリョーシャ 判事達はドミートリイ兄さんに宣告しない譯に行かなかつたんです。皆で兄さんを壓しつけたんです。凡ての辯明は兄さんの不利益の辯明となつたんですもの。推測よりも證據が十分あつたからです。

カチエリーナ お父さんに對するあの方の憎しみが。

アリョーシャ お父さんを憎むのはドミートリイ兄さん許りではありませんでしたよ。



イワン 親父を殺すといふ計畫を始終口にしてゐたぢやないか。

アリョーシヤ 事實は事實、また、感情は感情で別箇のものです。

イワン あの事件のあつた日の朝、お寺で若し僕がとめなかつたら、兄貴はお父さんを殺したかもしれなかつた。晩の八時に兄貴はまるで氣違ひのやうになつてカチェリーナさんの處から出て、この家へ來たんだ。

アリョーシヤ それは、お父さんの處へ來ればグルーシエンカさんに會へると思つたからなんです。ところで、グルーシエンカさんはここにゐなかつたんです。

イワン お待ち、お待ち！ 一時間許りたつと、兄貴は此處へきて、家の中を探し廻つてから垣根の背後で待ち伏せするために出て行つたのだ。つまりその時から待ち伏せをしてゐたんだ。さうするとその晩に、お父さんが殺され、庭の方ではグリゴリーイが打ち倒されて死にかゝつてゐたんだ。兄貴もグリゴリーイを擲りつけた事は白状してゐる。それだのにお前は、同じ時間に同じ場所で、同じ手がもう一人を打ち殺したといふことを否認してゐるんだ！

アリョーシヤ 兄さん、あなたは僕達の中の誰の爲に、そんな檢事の論告じみたことをやり直してゐ

るんです？ 僕はあのドミートリイ兄さんの利益のために、あの人の潔白を示す僅かな推測でもいゝから拾ひ出さうとする、あなたを見たかつたんです。……しかし、あなたはこれもドミートリイ兄さんの罪となつてゐる盜難のことを忘れてゐますね。もつとも、この方はあなたには大した事でもないやうに見えるからですか？ つまり、お父さんは自宅に三千ループリの金を包んで隠して置いたが、殺された後で、その紙包も金もいくら探しても見つからないんですね。

イワン 兄貴がモークロエで撒き散らした三千ループリかい？

アリョーシヤ あなたも僕同様、ドミートリイ兄さんにあの三千ループリの金は何處から來たものか御存知の筈です。あの事件の三日も前から、ドミートリイ兄さんはその金を襤褸かただに包んで身體につけてゐましたね。

カチェリーナ 私は裁判官の前で、そのお金は私からあの人の手に渡したお金で、あの人のものと、ちやんと申しましたわ。

アリョーシヤ さうです。あなたはドミートリイ兄さんの辯護のために、その事を明白においひでし  
たね。



グルーシエンカ それをあの人はあなたが裏切りをしたのだといふのです！

アリオシヤ あゝ！ 兄さんはあなたから金を貰ったよりも、まだ人殺しをした方が不名譽ぢやないと思つてゐるんです。兄さんは金を貰つたことを罪惡中の罪惡だと思つてゐるんです。

カチエリーナ 御遠慮にも程がありますわ！

アリオシヤ ですから法廷でも、ドミートリイ兄さんはその點を辯明しなかつたんです。あなたがそのことを云つた後で、兄さんは自分のことを辯解するのを止めて、罪を着てまでも黙つてしまつたのを御覽になりませんか？ カチエリーナさん？

カチエリーナ ええ、最後の言葉を待つために、私にあの人を失つた後悔を残すためにですわ。そして、あの人の立派さで私を粉粉に碎くためにですわ！

グルーシエンカ 私は今、あなたのお顔色の變つたのを見ました。あゝ！ 抗辯は待たされませんでしたわね。大層な勢で、あなたはあの事件の晩、あの人があなたに向つて、「自分がシベリアへ行かなければならぬのなら、三千ルーブリはあなたに返しませう。」と云つたことを法廷で叫びましたわね。若し僅かな疑念でも裁判官達の心の中にあつたなら、その證據で十分だつたんですわ。

もう何もかもおしまひになつたんです。

アリオシヤ 何です？ あなたはまだやつてゐる！

グルーシエンカ 何もかもこのお嬢様がしたんですわ。あの人を失くしたのもこの方ですわ。ええこの方ですとも！……あなたにはあの人が宣告される必要があつたんです！

イワン あなた方が證據を持つて來ない限りはね……

アリオシヤ もう證據のことを彼はいふのはよしませう。何の役に立つんです？ ドミートリイ兄さんは一時間の内にシベリアへ立つてしまふんですよ。……ドミートリイ兄さんにとつて刑罰が正當であらうと、宣告が不當であらうと、私は兄さんを許さずにはゐられません。たゞ不幸がある人を支配したに相違なかつたんです。兄さんは殺すことが出来たかも知れません。しかし、その危険な時に、神様がドミートリイ兄さんを御覽になつたのです。神様があの子供のやうな靈魂にお觸れになつたのです。兄さんは逃げ出したんです。決して殺した人はドミートリイ兄さんではありません。

イワン では、誰だ？ (アリオシヤに近寄り、低い低い聲で) では、お前の考へでは殺した人は誰な



んだ？

アリオージャ (静かに) あなた御自身でよく知つてゐるでせう。

イワン 何？

アリオージャ あなたが、たれだか知つてる筈です。

イワン 僕はお前が云ふのを待つてゐるんだ。

アリオージャ ドミートリイ兄さんではありません。……それだけです。僕の云へるのは。イワン (アリオージャの袖を打ち振つて) さあ、さあ、話してくれ！

アリオージャ イワン兄さん、あなたは一度ならずいつか、殺した人は自分だと自分に云つたでせう。

イワン (少しうろたへて) いつさ？ 僕はマスクワにゐたんだ。そんなことを云つたことはない。

アリオージャ この恐ろしい二ヶ月の間に、あなたは幾日か、獨りであると、さう自分で自分に云つたでせう。あなたは自分を告發したのです、自白したのです。……と云つたところで、あなたが殺した人ではありませんよ。あなたは思ひ違ひをしてゐるのです。わかりますか？ あなたがありませんとも。神様が私に、あなたに向つてさう云へと告げたんです。あなたが私を永遠に憎

むに相違ない時にですよ。

イワン おい、アレクセイ・フォードロギッチ、僕は豫言者にも神の代理者にも趣味を持つちやゐないんだぞ、さう思つてくれ。今から僕は永遠にお前と絶交する。どうか今直ぐ此處を立ち退いてくれ！

アリオージャ 兄さん！ 今日あなたの身のの上に何事かが起つたら、先づ第一に僕のことを思ひ出して下さい！……ドミートリイ兄さんは今朝僕にかう云ひましたよ。「イワンは僕達の中で一番勝れてゐる。生の價值のあるのはイワンだけだ！」つて……この言葉も覚えてゐて下さい。

イワン お前行くのか？……何處へ行くんだ？ え、アリオージャ？

アリオージャ 鑛山へです。僕は一步一步ドミートリイ兄さんと一緒に行くんです。ドミートリイ兄さんの罪はあの兄さんが分けることの出来る罪です。そしてたとひドミートリイ兄さんが終りまでその苦痛に堪へきれなくとも、あの方の側には誰か……兄さんの爲に保證することの出来る誰かがゐるでせう。さあ……

(椅子に掛けてゐたクルーシエンカ立ち上り、大喜びでアリオージャと一緒になる)